

大学生の視点を生かした農山村集落活性化と 郵便局との連携可能性に関する調査報告書

—福島県西会津町奥川地区を事例に—



2022年2月28日

福島大学行政政策学類

岩崎専門演習

は し が き

本報告書は、2021年度に実施した西会津町奥川地区でのフィールドワークの成果をまとめたものです。

本年度は、一般社団法人通信研究会よりご支援をいただき、「大学生の視点を生かした農山村集落活性化と郵便局との連携可能性」をテーマとして現地調査に取り組むこととしました。調査先としては、当ゼミと長年にわたってご縁をいただいている西会津町奥川地区が学生たちを受け入れてくださることになり、奥川郵便局の利用者や局員の方々へのインタビュー調査を行いました。

加えて、近年農山村集落は確かに過疎高齢化が進行していますが、田園回帰の流れを受け、西会津町にもIターンやUターン、地域おこし協力隊等の外部サポート人材が増加しております。そこで、これらの新たな人材から見た郵便局への期待も明らかにしたいと考え、現地の協力を得て地域おこし協力隊員の方々にもインタビュー調査を行うことができました。

現地調査に先立ち、6月には、日本郵便(株)東北支社経営管理部地方創生担当の皆さんから、調査のねらいや実施方法についてアドバイスをいただき、8月には、学生に対しオンラインでご講話を賜りました。これまで郵便局と具体的な関わりをもったことがない学生たちにとっては、新鮮な学びの機会となったようです。

夏場のコロナ第5波の広がりで見地調査が実施できるか心配でしたが、収束が見えてきた10月11日に、奥川郵便局・奥川支所がしっかりと感染対策をとってくださったおかげで対面でのインタビュー調査を行うことができました。現地の皆様は、いずれも学生を温かく迎えてくださり、貴重なお話を聞かせてくださいました。

学生たちは、先行研究を読み込み、調査票を作成して現地に赴き、緊張しながらも頑張って聞き取りに臨みました。その後の調査結果の分析作業では、ゼミの時間以外にも頻繁に集まってサブゼミを実施し、何とか報告書としてまとめることができました。

現地調査では、「奥川には何も無い」という声も聞かれましたが、確かに奥川には、大都市や観光地のように、ショッピングやレジャーでお金を消費する場は多くありません。しかし、豊かな人間関係や歴史、文化、農業、環境、むらづくりの取り組みの蓄積はきわめて豊富です。こうした地域資源は、奥川にしかないオンリーワンのものであり、関係人口の拡大を図るうえで大きな魅力となるものです。必要なのは外部の目も含めた地域資源の丁寧な把握、表現方法と情報発信の工夫だと思います。幸いなことに西会津町には多くの協力隊員が赴任し、それぞれの得意分野をむらづくりに生かそうと努力しています。地域と外部人材、関係人口との「架け橋」として、過疎地域の郵便局は大きな役割を果たすことができるのではないか、学生たちはそのような希望をこの報告書に込めています。

当ゼミとして郵便局という観点から過疎地域問題にアプローチしたのはこれが初めての

経験であり、未熟な箇所が多々あるかと思いますが、現地の声はできるだけ丁寧に把握したつもりです。この報告書が、過疎地域に果たす郵便局の役割について考える何らかのきっかけとなれば大変有難く存じます。

最後になりましたが、今回の現地調査にあたっては、奥川郵便局の矢部哲也局長をはじめ、西会津町役場奥川支所、集落支援員岩橋義平様、地域おこし協力隊員渡辺貴洋様から多大なるご支援・ご協力をいただきました。また、調査の準備段階では、日本郵便(株)東北支社経営管理部地方創生担当の尾形信寛部長、光井大祐課長（所属は当時）よりアドバイスとご講話をいただき、浅野不二男専門役は現地聞き取り調査にも同行してくださいました。心より感謝を申し上げ、今後ともいっそうのご教示をお願い申し上げます。

福島大学行政政策学類教授
岩崎 由美子

目次

| | |
|---------------------------------|----|
| 第1章 調査の目的と概要 | 1 |
| 第1節 研究テーマ | 1 |
| 第2節 調査の背景と目的 | 1 |
| 第3節 調査地の概要 | 2 |
| 第2章 調査の概要 | 7 |
| 第1節 調査の方法と対象 | 7 |
| 第2節 先行研究の検討 | 8 |
| 第3節 日本郵便（株）東北支社によるオンラインレクチャーの概要 | 11 |
| 第3章 聞き取り調査結果 | 13 |
| 第1節 利用者への聞き取り調査結果 | 15 |
| 第2節 地域おこし協力隊への聞き取り調査結果 | 37 |
| 第3節 郵便局員への聞き取り調査結果 | 72 |
| 第4章 まとめと提言 | 83 |
| 第1節 郵便局利用者への聞き取り調査まとめ | 83 |
| 第2節 地域おこし協力隊への聞き取り調査まとめ | 87 |
| 第3節 提言 | 89 |
| 第5章 調査参加学生の感想 | 90 |
| 附属資料 郵便局利用者アンケート調査票 | 97 |



第1章 調査の目的と概要

第1節 研究テーマ

2021年度、福島大学岩崎ゼミでは、「大学生の視点を生かした農山村集落活性化と郵便局との連携可能性」をテーマに活動を行うこととした。そこで、以前から岩崎ゼミと交流のあった福島県西会津町奥川地区でフィールドワークを行い、奥川地区における奥川郵便局の役割や集落支援・外部人材との連携可能性について調査することとした。

第2節 調査の背景と目的

農山村地域では過疎化と高齢化が進行し、頻発する自然災害や基盤の未整備による維持管理の困難さ等もあって、地域資源管理主体としての役割を果たせなくなりつつある集落が増加している。農業従事者の減少により、農業を通じて行われてきた集落共同活動が弱体化しており、地域内で十分な人材を確保することが困難な状況に陥っている。

こうした状況をふまえ近年、地域内で不足する人材を補完するために、地域外の多様な主体との連携が行われる例が多くみられる。集落支援員や地域おこし協力隊等の地域サポート人材をはじめとして、ボランティア団体やNPO、企業、大学との連携事例も増加している。

そのような中、過疎地域における郵便局は、地域住民同士の交流の場としても重要な存在であり、建物自体が集いの拠点としての役割を担っていける可能性がある。事実、こうした拠点機能を生かし、地域情報の発信や住民と移住者の交流の場の提供、高齢者の健康づくりや買い物支援等に関わる郵便局も近年増えつつあり、過疎地域の郵便局の有する機能に注目が集まっている。

本研究では、学生や外部サポート人材、移住者等の参画による農山村集落活性化の在り方を実践的に追究するとともに、こうした取り組みにおいて期待される郵便局の役割と連携可能性について検討を加えることを目的とする。



(奥川郵便局での聞き取りの様子)

第3節 調査地の概要

(1) 西会津町の概要

福島県西会津町は、県西北部の新潟県境に位置し（図表1）、飯豊連峰等1,000m級の山岳に囲まれ、山林が86%を占める山間地域である。夏は高温多湿だが朝晩は涼しく、冬は寒冷で1~2mもの積雪がある。町中央部を阿賀川が東西に流れ、国道49号線とJR磐越西線が川沿いに走っている。1997年には磐越自動車道が開通し西会津インターチェンジが設置されたことにより、会津地方の中心地である会津若松市との往来は40分程度、東北自動車道の郡山インターチェンジまでは約1時間に短縮された。

西会津町は、1954（昭和29）年に、野沢町、尾野本村、登世島村、下谷村、睦合村、群岡村、宝坂村、上野尻村、奥川村、新郷村の1町9村が合併して西会津町が誕生し、1960（昭和35）年に旧高郷村（現喜多方市）の軽沢地区を編入し、現在の姿になっている。

町の人口は5,850人、世帯数2,547戸（2022年1月1日現在）、高齢化率は43.6%で、県内でも5本の指に入る高齢化自治体である。人口は1965年以降一貫して減少を続けており、65歳以上の人口数の割合がきわめて高く、人口減少と少子高齢化が深刻なものとなっている。高齢化の進展は町内の旧村間で異なり、町中心部の野沢地区の高齢化率は36.7%であるが、中心部から最も遠い奥川地区の高齢化率は62.8%にのぼる（町役場資料より）。

西会津町は、喜多方市と周辺町村との合併を進める任意協議会（2003年）には参加せず自立の道を選択した。2011年度から集落支援員が配置され、特に高齢化率が高く集落機能の維持が困難な集落への訪問活動や相談業務等を担当している。2014年度からは町単独事業として「西会津町活力ある地域づくり支援事業」が設置され、地域活動への支援を行うほか、西会津ケーブルテレビによる情報提供、交通弱者へのデマンドバスによる送迎、サロンの開催等も行われている。

町では、複合経営による農家の所得向上を目指し、1997年より「ミネラル野菜」の振興に取り組み、土壌診断料の補助、ミネラル農産物の直売活動の支援、レンタルハウスによる冬作支援等を行っている。2000年には、農家女性や高齢者を中心に「健康ミネラル野菜普及会」が組織化され、町内の農産物直売所「よりっせ」でミネラル野菜の直売を開始し好評を得ている。

移住定住施策としては、廃校舎をリノベーションした「西会津町国際芸術村」を拠点として、移住相談を行っている。国際芸術村代表の矢部佳宏氏は、芸術系の大学でランドスケープデザインを学び、卒業後海外で活躍した後、東日本大震災を契機に祖父の家がある西会津町奥川地区に2014年に移住した。彼のもつ発信力で多くの若者たちが西会津を訪れ、30名ほどの移住やUターンにつながっている。移住した若者たちは、カフェやゲストハウスの経営をする者、大学で非常勤講師をしながら週末は奥川に暮らす二地域居住、キクラゲや菌床シイタケ栽培の新規就農者など様々である。外部サポート人材である地域おこし協力隊は、現在14名が着任し、観光振興や集落支援等の活動を行っている（詳細は後述）。

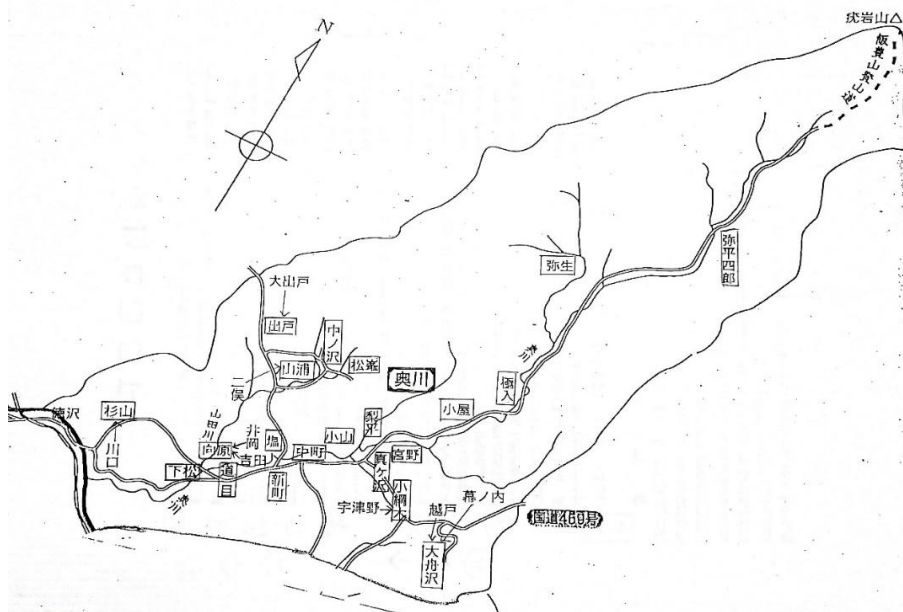


図表1 西会津町の位置（町役場ホームページより）

(2) 奥川地区の概要

奥川地区は、西会津町の北部に位置し、西会津町の5つの地区の中でも特に山間の特徴を有している。奥川地区の交通条件は、野沢地区からも自動車でも20分以上かかり、JRの駅もなく、大きな病院（診療所は週1日開所）もない地区であり、交通の便が良いとは言えない。

奥川地区集落の地理位置を図表2に示す。奥川地区は21からなる集落により形成されており、そのうち18の集落で高齢化率が50%以上となっている（図表3）。高齢化率100%の弥生集落も存在している。



図表2 奥川地区集落地図

（町役場資料）

図表3 奥川地区の人口と高齢化率（2018年度）

| 集落 | 世帯数 | 人口 | 高齢者数 | 高齢化率 |
|------|-----|-----|------|-------|
| 杉山 | 18 | 30 | 19 | 63.3% |
| 塩 | 9 | 17 | 11 | 64.7% |
| 新町 | 35 | 65 | 41 | 63.1% |
| 道目 | 14 | 31 | 15 | 48.4% |
| 下松 | 17 | 30 | 19 | 63.3% |
| 山浦 | 18 | 37 | 25 | 67.6% |
| 出戸 | 20 | 34 | 28 | 82.4% |
| 中ノ沢 | 22 | 38 | 28 | 73.7% |
| 松峰 | 10 | 21 | 11 | 52.4% |
| 中町 | 24 | 40 | 26 | 65.0% |
| 小山 | 17 | 33 | 21 | 63.6% |
| 真ヶ沢 | 20 | 37 | 24 | 64.9% |
| 宮野 | 12 | 28 | 11 | 39.3% |
| 梨平 | 13 | 25 | 18 | 72.0% |
| 小屋 | 8 | 16 | 13 | 81.3% |
| 極入 | 25 | 53 | 34 | 64.2% |
| 弥平四郎 | 17 | 23 | 19 | 82.6% |
| 弥生 | 3 | 3 | 3 | 100% |
| 小綱木 | 25 | 57 | 31 | 54.4% |
| 大舟沢 | 8 | 11 | 8 | 72.7% |
| 計 | 354 | 680 | 427 | 62.8% |

(町役場資料より)

(3) 集落支援員・地域おこし協力隊・大学生等外部人材による協働活動

①集落支援員の役割

上述のように、奥川地区の高齢化率は高く、ほとんどの集落の高齢化率が50%を超えている状態である。集落の環境維持管理ができない、伝統・民俗文化が継承できない、人手不足など多くの問題が挙げられる。こうした中で注目されるのは、人口減少や高齢化が進む奥川地区を対象とした集落支援員と地域おこし協力隊との協働による集落支援活動が積極的に進められている点である。西会津町では2011（平成23）年に、高齢集落が多く存在する

奥川地区の支所に集落支援の拠点が設置され、集落支援員 1 名を登用し、2017（平成 29）年からは集落支援に地域おこし協力隊の若い力が加わった。

集落支援の実際の活動は、コミュニティ支援、地域活性化支援、健康づくり支援の三つに大別される。集落支援員の岩橋義平氏は集落支援担当の協力隊員と連携し、それぞれの集落の現状やニーズを把握し、集落がかかえる切実な課題を明確にしつつ、集落のコミュニティ支援活動を続けている。集落で行う共同作業の支援には、農作業や農作物の販売の支援、環境保全や景観づくり、獣害対策、集落の祭礼など様々な事業が定期的に行われている。地域の活性化支援としては、各集落の歴史や資源の状況を踏まえて、集落単位で高齢者が参加しやすいイベントの立ち上げや運営支援活動が進められている。

また、集落住民の健康づくりの支援としては、サロンの立ち上げや運営のサポートに力を入れ、特に高齢化率が高い集落では、地域包括ケア研究所等と連携して、座談会や話し合い、カフェ、サロン、食事会などの取り組みを実施している。集落の主体性を尊重しつつ個人の人的ネットワークを活用し、積極的に外部人材と連携し、関係人口の拡大に重点を置いて、地域の課題解決や地域の活性化に努力を続けていることがわかる。

②地域おこし協力隊員の活動

西会津町では、総務省が地域おこし協力隊制度を立ち上げたことを受けて、定住や交流促進の事業に、都市部の若い力と行動力、斬新な発想を取り入れ、町の活性化や関係人口・定住人口の増加につなげていくことを目的として 2013（平成 25）年度より導入した。隊員は、定住促進、交流人口拡大に向け、町や町内関係機関、集落などが行う地域活性化事業の支援活動にあたる。2021（令和 3）年 9 月 1 日現在、福島県内では、44 市町村と県で 189 名の地域おこし協力隊が活動しており、西会津町では、現在 14 名の隊員が活動している。西会津町の協力隊員数は福島県内で最も多い。

西会津町の協力隊員の出身地は東日本を中心に、福島県、埼玉県、宮城県、神奈川県が多い。西会津町の地域おこし協力隊の活動内容としては、「集落支援」「起業支援」「教育振興」「文化振興」「情報発信」「芸術アート」「農業関連」の 7 つに分類できる。現在は、集落機能を維持していくためのサポート、起業家の事業コーディネート、フリーマガジンや SNS を通して町の魅力発信、「会津張り子」や「出ヶ原和紙」といった西会津町の伝統工芸の継承、古民家の利活用や小物づくりによる地域の活性化、アートプロジェクトの企画、有害鳥獣対策による農産物被害の解決、生徒に寄り添いながらの地域教育の推進など、隊員同士が連携しながら様々な分野で活躍している。

③大学生との域学連携

奥川地区のもう一つの特徴として、大学生との域学連携活動に積極的に取り組んでいるという点が挙げられる。地区内に空き家を活用したボランティア拠点が整備され、高齢化が進んで共同作業や活動の運営が困難になっている地域に、大学生等外部人材がボランティア

アとして参加できるような集落支援の仕組みを作っている。

例えば、奥川地区においてこれまで福島大学岩崎ゼミ生が参加してきたイベントは、人足体験ツアー（4、7、12月）、七観音ウォーク・奥川健康マラソン大会（6月）、極入大聖歓喜天祭礼・奥川盆踊り（8月）、出戸岩屋祭り・敬老会（9月）、奥川新そば祭り・杉山集落道路整備（11月）等である。（2020、2021年度はコロナ禍のため大学生の参加は休止している。）

こうした各種交流イベントへの参加のほか、住民への聞き取り調査や、地区内の産業遺産の見学を行うなどして集落活性化のための具体的な提案を学生が行い、形にしていく取り組みも行われている。一日孫体験、集落魅力マップ・屋号マップの作成、住民の生活史の聞き書きに基づく集落誌の作成等にも取り組んでいる。

第2章 調査の概要

上述のように、福島大学岩崎ゼミでは、以前より農山村地域再生をテーマに、福島県西会津町等で集落活性化のための基礎調査と計画策定、実践活動に携わってきた。

本研究では、引き続き域学連携活動を行いながら、とくに郵便局との連携のあり方に焦点をあて、以下の5点の調査研究活動を行った。

第1節 調査の方法と対象

a. 先行研究の検討（2021年6～7月）

過疎地域の郵便局の実態やその役割や取り組みなどについて文献収集を行い、輪読をするとともに、いくつかの論点を挙げ、大学生の視点で検討を加えた。インターネット等による情報収集のほか、ゼミでは以下の2本の文献を取り上げ、検討を行った。

「人口減少時代の持続可能な地域づくり～プラットフォームとしての郵便局の可能性」

（沼尾 波子/JP 総研 Research/第51号/2020年9月30日発行）

「人口減少社会における過疎地域の現状と郵便局のできること」

（下原田 寿/JP 総研 Research/第41号/2018年3月30日発行）

b. 日本郵便東北支社による地方創生に関するオンラインレクチャー（2021年8月16日）

日本郵便の組織機構や地方創生の取り組みについてレクチャーを受け、質疑応答を実施した。

c. 郵便局利用者へのインタビュー調査（2021年10月19日、11月16日）

現地調査を実施し、郵便局の利用者数や利用者間のコミュニケーションの様子を把握するとともに、利用者への聞き取り調査を実施して、地域生活概況・課題に加え、郵便局の利用頻度や利用実態やニーズを把握した。あらかじめアンケート調査票（後掲の附属資料1を参照されたい）を準備した上で、自記式ではなく、聞き取りによりお話を伺った。

d. 地域おこし協力隊員へのインタビュー調査（2021年10月19日、11月16日）

現地調査を実施し、外部サポート人材として西会津町で活動する地域おこし協力隊員に対し、現在の活動の内容や地域課題に加えて、郵便局の利用頻度や期待等について聞き取りを行った。主な聞き取り項目は下記のとおりである。

- ・お名前・年齢・現在の住まい・家族構成など（フェイスシート）
- ・協力隊員になったきっかけについて
- ・活動をするうえでのやりがい、課題や問題点、地域の将来について思うこと
- ・地区住民との交流の程度

- ・西会津の魅力、逆に変えた方がいいと思うこと
- ・地区で将来まで守っていききたいもの、地域の「お宝」
- ・西会津がこれからも活性化するために
- ・自分の夢や今後目指すものなど
- ・移住者に向けての支援でこれがあるといいなと思うもの
- ・学生との域学連携についての考え
- ・郵便局にどのようなイメージをもっているか
- ・地域コミュニティの拠点としての郵便局への期待 など

e.郵便局員へのインタビュー調査

現地調査を実施し、郵便局員に対し、地域の概況や利用客数の変化、域学連携活動への認知、郵便局と地域社会との連携に関する意見や課題等をインタビュー調査により把握した。

主な聞き取り項目は下記のとおりである。

- ・お名前・年齢・現在住んでいる集落・家族構成、勤務年数など（フェイスシート）
- ・奥川地域を回って感じること、地域の変化
- ・この地域の郵便局として、住民の方々と関わる際に意識していることや心がけていること
- ・郵便局の仕事のやりがい
- ・郵便局のもつ「強み」とは
- ・郵便局は今、地方創生につながる新たな役割を期待されているが、そのような状況についてどう思うか
- ・地域において、郵便局はどのような役割を担えると思うか
- ・人員不足等運営上の課題について
- ・郵便局と地域社会の新たな連携、取り組みについての意見 など

f.報告書の作成・報告

上記の内容を本報告書にまとめ、大学生の視点を生かした農山村集落活性化のあり方と課題、また、そこで期待される郵便局の役割と連携可能性について提言を行った。

第2節 先行研究の検討

本節では、ゼミで行った先行研究のレビューの内容について紹介する。

①「人口減少時代の持続可能な地域づくり～プラットホームとしての郵便局の可能性」

(沼尾 波子)

まず、本論文の要約は以下の通りである。

【要約】

近年、地方圏で急速に人口減少がすすむ中で、移住者の流入が続き活性化する農山村や、出生率が向上している地域が生まれている。ただし、持続可能な地域づくりには、単に人口増を図ればそれでよいというわけではなく、地域で暮らす人々の状況や環境を把握し、社会経済循環の再構築を図る必要がある。しかし、人口減少が進む地域において、住民だけで新たな取り組みを行うには限界もある。地域外からの関係を通じた社会経済活動の展開が、新たなアイデアを生み、新たなモノや関係を創出することにもつながる。こうした新たな価値の創出は、これまでになかった新しい結びつきによって地域社会の中で生じた「新結合」である。そこに必要なのは、ゼロから新たなモノを創出することではなく、地域にすでにあるものを丁寧に把握したうえで、域内や域外との新たな結合を通して、創造性を育むことである。

その点で郵便局は、いわば地域内で人々が集う窓口であり、地域の内と外との結節点に位置する存在でもある。その特性を踏まえるならば、持続可能な地域づくりに向けて「新結合」を生むためのプラットフォームにかかわる存在といえる。対面や書面のコミュニケーションに強い郵便局は、その強みを生かし、地域の現状を把握し、課題を検討するための情報収集拠点としての役割を担うことも考えられる。このように郵便局には、住民のナマの声を集め、その情報を活用することや、地域の拠点を担うことで、様々な地域課題に対応することが可能である。また、地域のプラットフォーム構築に関わることと併せて域外からの情報収集や、地元情報を域外に発信するゲートウェイとしての役割を果たすことも期待される。こうした機能を担う組織を構築し、多様な人々が集い、話をしながら、新たな繋がりを作り、アイデアを創出する環境がある地域に、人々は集い、発展が起こっている。郵便局がその強みを生かしながら、こうした「新結合」の一端を担い、地域づくりに参画していくことが期待される。

文献講読の後、学生から出された論点とそれに対する意見としては、下記の3点が挙げられた。

【論点1】

地域内の既存の関係を壊さないように関係人口はどのような点に配慮して関わっていくべきか。

- ・対象となる地域の情報を集め、徹底的に分析したうえで、関係人口としてどのように関わっていくのかを地域住民に丁寧に説明する。
- ・地域の今までの暮らしや伝統を否定するのではなく、「地元学」の考え方にに基づき、元からあるものを生かした取り組みを考える。

【論点 2】

郵便局をプラットフォームとした、地域住民と地域外の人との関係創出のためにはどのような工夫があるとよいか。

- ・地域おこし協力隊などの外部人材と協力し、地域外の人も見れるような SNS や WEB サイト等で地域の魅力を発信する。
- ・郵便局に対する「事務的な場所」というイメージを薄め、多目的に域内外の人が訪れることができる場所にする。例えば、観光や定住移住の相談スペースの開設や、交流スペースとして開放する。

【論点 3】

中山間地域におけるデジタル化による影響と課題はなにか。

- ・デジタル化によって、車を持たない高齢者でもオンライン診療やネットショッピングが可能になる。しかし、インフラ整備や機材等のコスト面の懸念のほか、高齢者がデジタル化に対応できるかが課題となる。
- ・SNS 等の活用により、より多くの域内外の人々と交流することが可能になる。しかし、端末代や Wi-Fi 設置費用等のコスト面が課題である。

②「人口減少社会における過疎地域の現状と郵便局のできること」 (下原田 寿)

本論文の要約は以下の通りである。

【要約】

日本では急速に高齢化と人口減少が進んでいる。それに伴う地方の過疎化と限界集落の問題、地域コミュニティの崩壊、買い物難民の発生、自治体の財政難に伴う住民サービスの縮小など、解決しなければならない課題は多岐にわたっており、現在の社会システムのままでは、私たちの生活はいずれ立ち行かなくなることは明らかである。今後は公的機関に頼るだけでなく、社会全体で地域と人々を支える必要がある。

全国の買い物弱者は年々増加傾向にある。地方自治体でも買い物支援を行っているが、その多くは交通手段を確保するための施策が中心となっている。また、日本郵便では四国支社において「おまかせ JP 便」というカタログを活用したサービスを行っていた（現在は終了）。市民サービス部門は今や外部の民間企業等に委託している自治体も多く見られることから、今後は「社会的企業」である郵便局が自治体事務を積極的に受託することを検討するべきである。

一方、地域で抱えている課題はそれぞれ地域の実情によって大きく異なる。そこで力を発揮するのは、長年にわたって地域に根ざしてきた郵便局だからこそ、その中心として活躍できる部分が多くあるものと思われる。いうまでもなく、郵便局には 150 年の長い歴史の中で培われてきた「伝統」と「信頼」がある。「創業 150 年の力」、それは日本郵政グル

ープが持つ新しいビジネスモデルの源泉である。郵便局は日本に山積する諸問題を解決する「未来の鍵」を握っているといえる。

文献講読の後、学生から出された論点とそれに対する意見としては、下記の4点が挙げられた。

【論点1】各郵便局の財政状況や人的支援によって生じる、サービスの地域差を解消するには。

- ・行政や地域おこし協力隊、民間企業との連携に加え、地域外との連携が必要である。
- ・地域によって抱えている課題は異なるため、その地域にあったサービスを提供する。また、似たような地域課題を抱える地域の郵便局の事例を参考にする。

【論点2】郵便局でもサービスのデジタル化が進む中で、その進化に高齢者が対応できないのではないか。

- ・インターネットを使ったサービスはあくまで選択肢の一つであり、高齢者に無理にICTの活用を強いる必要はない。
- ・職員等を媒介にしてアプリケーションを使用したり、講習会を開いたりする必要がある。

【論点3】郵便局のみまもりサービスをより良いものにするためにはどのようなサービスが考えられるか。

- ・月の訪問回数を増やし、利用者との交流の機会を増やす。また、利用者・家族からニーズを聞き出し、反映させる。
- ・家族と利用者がzoom等を活用したビデオ電話などでつながる機会を提供する。

【論点4】地域包括ケアシステムの中で、高齢者に対して学生に期待されること。

- ・人足や雪かき、買い物支援等にボランティアとして参加すること。
- ・イベント等を定期的に主催し、地域住民同士の交流の場を率先して作る。

第3節 日本郵便（株）東北支社によるオンラインレクチャーの概要

2021年8月16日に、日本郵便（株）東北支社経営管理部地方創生担当の方から、オンラインでレクチャーをしていただいた。初めに、地方創生担当部長の尾形信寛さんから挨拶を賜り、日本郵便の事業概要や仕組み、取り組みについて同課長の光井大祐さんからレクチャー

ーを受け、質疑応答を行った。

郵政事業は1871年に創始され、2021年で創業150年を迎えた。地域に密着し、地域社会とともに生きていくという企業理念は創業当初から変わらない。2021年には「日本郵政グループ中期経営計画」を発表し、お客様と地域を支える「共創プラットフォーム」の実現に取り組んでいる。また、デジタル化の進展や人口減少社会、高齢化、過疎化が今後急速に進むと予想される中で郵便局が担う役割は大きいと述べられた。

レクチャーを受け、学生からは「我々が今後の活動で郵便局の活用という点で考えていくうえで参考にするために、日本郵便では新しい事業を始める際、どのような流れで生まれて、どのような動きがあるのか知りたい。」という質問があった。それに対し、「全国でいきなり新しい事業を始めるのは難しい。エリアを絞って実証実験を行い、その後エリアを拡大していく。」と回答された。また、「社会貢献活動やサービス事業は、日本郵便が起点として事業を発信していくのか、それとも利用者の要望や意見を汲み取って事業を展開していくのか。」という質問も挙がった。その答えとして「両方。地方公共団体のサービスを受託する際は、郵便局から市町村に提案する場合もあるが、市町村から依頼されることもある。また、お客様の声は社内で共有し、サービス改善、展開につなげている。」との回答をいただいた。

第3章 聞き取り調査結果

2021年10月19日（火）と11月16日（火）の2日にわたり、以下の22名に対し聞き取り調査を実施した。奥川郵便局では午前9時30分から午後3時頃まで学生が常駐し、来店された方にアンケート調査票に基づきお話を伺った。利用者の方のほとんどは高齢のため、自記式ではなく、学生による聞き取りによって調査を行った。お一人15~20分程度と設定したが、お話が弾んで1時間以上対応して下さった方もいらっしゃった。加えて、郵便局員の方々にも業務の合間を縫ってお話を伺うことができた。

郵便局には、聞き取りを行う会場として、以前仕分け業務を行っていた空き部屋をご提供いただき、また、コロナ感染対策としてアクリル板と配布用マスクもご準備いただいた。

また、地域おこし協力隊へのインタビューは、奥川みらい交流館の会議室で、午前10時から午後3時頃まで行った。協力隊員1名あたり1時間30分程度の聞き取りを行った。こちらでもコロナ感染対策を十分に行っていただき、対面での聞き取りを実施することができた。

I 郵便局利用者 インフォーマントの概要

| 番号 | 仮名 | 年齢 | 性別 | 居住地 |
|----|-----|-----|----|------|
| ① | A夫妻 | 70代 | 夫婦 | 奥川地区 |
| ② | Bさん | 60代 | 女性 | 奥川地区 |
| ③ | Cさん | 70代 | 男性 | 奥川地区 |
| ④ | Dさん | 70代 | 男性 | 奥川地区 |
| ⑤ | Eさん | 60代 | 男性 | 奥川地区 |
| ⑥ | Fさん | 80代 | 男性 | 奥川地区 |
| ⑦ | Gさん | 60代 | 男性 | 奥川地区 |
| ⑧ | Hさん | 60代 | 男性 | 奥川地区 |
| ⑨ | Iさん | 40代 | 女性 | 奥川地区 |
| ⑩ | Jさん | 70代 | 女性 | 奥川地区 |

II 地域おこし協力隊員 インフォーマントの概要

| 番号 | 仮名 | 年齢 | 出身地 | 活動分野 |
|----|-----|-----|------|----------------|
| ① | Kさん | 20代 | 福島県 | 伝統工芸「会津張り子」の制作 |
| ② | Lさん | 20代 | 神奈川県 | アートプロジェクトの企画 |
| ③ | Mさん | 30代 | 神奈川県 | 製作工房・鞆・小物づくり |
| ④ | Nさん | 20代 | 埼玉県 | ICT教育兼地域協働学習推進 |
| ⑤ | Oさん | 20代 | 福島県 | 奥川地区の集落支援 |

| | | | | |
|---|-----|-----|-----|------------------|
| ⑥ | Pさん | 20代 | 宮城県 | ケーブルテレビ番組作成・情報発信 |
| ⑦ | Qさん | 20代 | 宮城県 | 伝統工芸「出ヶ原和紙」制作 |
| ⑧ | Rさん | 40代 | 東京都 | 有害鳥獣対策 |

Ⅲ郵便局員 インフォーマントの概要

| 番号 | 仮名 | 年齢 | 職業 |
|----|-----|-----|-------------------------|
| ① | Sさん | 30代 | 奥川郵便局 |
| ② | Tさん | 60代 | 元奥川郵便局長 |
| ③ | Uさん | - | 弥五島郵便局 福島県西部地区エリアマネージャー |
| ④ | Vさん | 60代 | 元旭田郵便局長 |

第1節 郵便局利用者への聞き取り調査結果

(1) 聞き取り調査より

以下では、郵便局利用者10名への聞き取り調査結果を、インフォーマントごとに紹介し、聞き取りを行った学生のコメント（感想や気づき等）を記載する。

①利用者 A夫妻

○プロフィール

70代のご夫婦である。奥川地区で2人暮らしであり、息子は近隣の喜多方市、娘は会津若松市に住んでいる。孫は8人。現在はシルバー人材センターに登録し掃除や草刈りをしている。また、畑と田んぼの農業をしており、農協に出荷している。子供に頼らないように、自分のことは自分でやるようにしているという。

○日頃の郵便局の利用について

郵便局へは、夫の運転で（妻は免許を返納したためデマンドバスを利用することもある）月に1回程度訪れる。利用目的は年金の記帳、保険の契約、孫の学資保険、贈り物の発送等である。保険は子どもに迷惑をかけないように加入しているという。郵便局員の方とは顔見知りであり事務的な用事以外にプライベートな話をすることもあり、他のお客さんと話をすることもあるという。奥川の郵便局については、「昔から知っているため身内みたいな感じでなじみやすく、頼りになる場所」だと話す。

○地区の方との交流について

夏は週に2回程度、冬は農業が忙しくないためほぼ毎日、料理を持ち寄りたりしてお茶のみをする。1人暮らしが多いため安否確認も兼ねて集まっているという。80代以上が多いため、70代は若く、みんな元気で認知症の方もいない。

○奥川地区・西会津町のいいところ、不安なところ

いいところは、「穏やかで親しみやすくいい人ばかりで、犯罪がないところだ」という。一方で不安なこととして、近くに大きい病院がないため病気になった時は会津若松まで行かなければならないこと、大雪が降ったときのこと、子どもが同居していないことを挙げた。

○奥川地区・西会津町をよりよくするには

空き家が多いため、若い人に住んでもらって活性化できたらいいのではないかという。

○郵便局の余剰スペースの活用方法

ゲートボールなど趣味的な活動や、お茶のみをする交流スペースになったらいいという。
買い物や出荷については、夫が車を持っているため特に困っていないと話した。

○郵便局に対する感想・大学生の活動に対する意見

郵便局のサービスは「最高」と評価し、「親しみやすく入りやすい、親切にアドバイスをくれる、頼りになる」という。

大学生の活動に対しては、「若い人が来ると明るくなり、活気が出るため良いと思う」と話された。また、「人足の手が足りないから来てほしい」という要望もあった。

○調査学生のコメント

とても元気なお母様と温かいお父様で、生き生きとしており、子どもを頼らず自分のことは自分でやるという姿勢が表れていた。局員の方と気軽に、楽しそうに会話する様子が見受けられ、日頃から様々なお話をしているからこそ、このような良い関係が築かれているのだと思った。奥川の郵便局は事務的なサービスだけでなく住民の生活の頼りになっていることがわかり、そのような場で望んでいた趣味的な活動やお茶のみの交流ができれば人が集まりより活発になることが期待できると思った。

②利用者 Bさん

○プロフィール

Bさんは60代の女性である。夫が亡くなって3年目で、亡くなる前はご自身は会社員として働いていた。今はお一人で住んでいて、田んぼでお米を栽培、畑で大根や白菜などを少し育てている。田んぼで作ったお米は、少し出荷するほか、子ども達にも送っている。

息子が3人おり、長男が須賀川市、次男が本宮市、三男が会津若松市に家を建てて西会津消防署で働いているという。現在お一人で管理している田んぼについては、田植えや稲刈りは息子が手伝いをしてくれるという。「今日は田植えだ」って言うと三男が来てくれたり、休み明けや非番の時に来てくれたりする。コロナが流行してから申通りの方も感染者が増えてきたため、一番近くにいる三男がよく来るという。1人だと大変だが、たまに孫も来てくれるため助かっている。

お米の出荷方法については、お米を出荷している業者さんが野沢にいるのだが、そこに電話すると家に来てくれてモニタリング検査をしてもらい出荷という形になるという。

現在は奥川地区に住んでいるが、生まれは高郷で、高郷から奥川に嫁に来て40年以上になる。奥川に来て初めて抱いた印象については、生まれた高郷の方も山間地なので、たいし

た抵抗はなく、「山から山に来た」という印象を抱いたという。

40年前の奥川と比較し変化したと思うことは、「人口が減ったこと」だと語る。中学校が近くにあったが、なくなってしまった。小学校もなくなったが、今は町民達の交流の場や、役場支所という形で利用している。

また、西会津町にはケーブルテレビが入っており、野沢からアナウンサーが来て、「米は取れましたか」、「どうのお米ですか」といった家庭の情報を流しているという。そのほか、西会津町議会議員の「西会津をこうの方がいい」といった案やローカルなニュースを流している。他には小学校とか幼稚園の運動会の様子、いろいろなイベントがある度にケーブルテレビで流れている。

○郵便局に来た目的、頻度について

猫を2匹飼っていて、その猫の餌やトイレ用品を買いに野沢の方へ行っていた。その帰り道に郵便局に寄ったという。

郵便局までの交通手段は、自家用車である。やはり、車がないと大変であるという。ただ、8人程度乗れる小さなバスではあるが、年配の方はデマンドバスを利用できるという。

家から郵便局までの移動時間は10分程度かかるが、特に冬場だと道が滑るので、「なんぼ近いとは言え大変である」とのことである。

郵便局の利用頻度については、月に2~3回程度利用し、ATMを利用することが多い。具体的には、稲刈り機や田植え機といったものの修繕費を振り込みに来たりすることが多い。これからお歳暮関係で郵便局から出しているパンフレットがあるが、毎年お歳暮とお中元の送り先をパンフレットに書いて郵便局に持ってきている。それを郵便局さんの方で出してもらったりしているため、郵便局を利用することが多いという。

○郵便局員さん、住民との交流について

郵便局員さんとの交流は頻度的には少ないが、顔見知りだから「稲刈り終わったのがよ」とか、「寒くなつたない」といった世間話をすることもある。

郵便局で会う住民の方とは顔見知りだから、「あ~しばらく~！」など挨拶を交わすことがある。郵便局もそうだが、スーパーやコンビニで会ったときもよく話すという。ご近所の方とは毎日お会いして、畑でとれた野菜を持っていったり、家で仕事をしていると「お茶飲みきっせ」と言われたりなどといった交流がある。

○あなたにとっての郵便局とはどのような場所か

だんだん過疎化が進んでいくと、郵便局がなくなってしまうのではないかと心配になる。郵便局や農協さんがなくなったら野沢の方に行かなければならなくなるといったこともあり、「なくなったら困る存在」だという。

○暮らしの中で感じる地区の良いところと改善点について

良いところばかりである。改善して欲しいと思うところも、特にないという。

小さなお店はあるし移動販売車は来るけど、そこで買えない物があるため、その時は野沢の方に行って買いに行く。一人暮らしのお年寄りの方は、皆さん移動スーパーを利用しているという。

実際に、郵便局の隣にある「まるみや」さんというお店では、お菓子やアイスが販売されている。もう少し下ったところにある「ながしま」さんには、お菓子やお酒といったものが販売されており、上の方にあがると「福島屋商店」さんがあり、魚やお酒、食料品が販売されている。トイレットペーパーやティッシュも販売されており特に不自由はないが、やはり野沢に出かけたときにまとめて買ってしまうという。

家から野沢までの移動については、「30分もかからないくらい」だという。ただ冬はすごく大変で、10分は多く時間がかかる。除雪はきれいにされているがかなり滑るし、山をのぼらないといけないためこの辺に住む人の車はほぼ四駆でタイヤはスタッドレスの人が多。それでも、「スタッドレスでも滑る」と笑って語っていた。

○奥川の食べ物、歴史、お祭りについて

以前は祭りが多く開催されていたが、コロナになって中止になったものが多い。毎年町民体育祭というイベントを行っていたが4年以上開催されておらず、自粛という形で行わなくなつたものも多い。

地区ごとに若者が減り、高齢化になって参加できない地区がでてきた。自分たちが住んでいる地区も例外ではない。以前は参加できる地区だけ出て町民体育祭を開催していたが、それも難しくなつてしまったという。

○奥川地区を持続させるためにどういう取り組みが必要かについて

空き家が多くなり、人口も当然減って寂しくなっている。「空き家を使って何かやっている地区もあるし、リフォームしてよその方が移住してくるような取り組みがよいのではないか」という。

○郵便局の空きスペースの活用について

以前は郵便局からお米を送った時に、元の集配スペースまで入ったことがあったかもしれない。道の駅などにも、このように空いているスペースがある。ただ、郵便局に空きスペースがあっても活用したいという人がどれだけいるかは分からない。郵便局で買い物をしたりするのもあまりイメージがつかないから難しいが、他の地域で「郵便局×地域」の取り組みなどをやっているのはいいことだという。

○郵便局のサービスに関する感想、要望。私たち大学生に対するご意見等について

郵便局の方とお話しすることやコーヒーをいただくこともあり、身近な郵便局だと考えている。「金融関係だからフラットくるって感じではないけど、ここの局長さんはお隣に住んでいる人ということもあり、繋がりがある」という。

○調査学生のコメント

地域に対しての想いを伺う中で、「不満に感じていることはない」とお話しされていたのが印象深かった。個人的なイメージとして、買い物に困っているという課題が挙げられると考えていたのだが、予想していたよりも多くのお店の名前が挙がり、それらが地域住民にとってとても重要な場所になっているようだ。近場に買い物ができる場所があるというのは、運転免許証を返納した高齢の方や、その他の移動手段で生活されている方にとって、心の拠り所となり生活の質を上げる重要な存在であると考えます。

また、ご家族のことや住民との交流について笑顔でお話しされていたのが印象深く、その時に出るちょっとした方言が、より一層みなさんと素敵なお関係を築かれているということが分かる印象的な部分だと感じた。

③利用者 Cさん

○プロフィール

Cさんは70代の男性で、西会津町奥川地区出戸集落で米作りを行っている農家である。出戸米は国内最大の米のコンクール「米・食味分析鑑定コンクール国際大会」第16回の国際総合部門で最高賞の金賞を受賞したこともある、その美味しさを認められた米である。Cさん自身も作った米で数々の受賞歴がある。

現在は奥様と2人暮らしである。お子さんが3人おり、それぞれ神奈川県・東京都・会津若松市で暮らしている。また、神奈川県にいた甥っ子はUターンで出戸に戻ってきている。

○郵便局を訪れた目的

この日は、米を配送するために郵便局を訪れたそう。Cさんが運転する軽トラックが郵便局に着くと、局員の方が台車を持って行き、米を運ぶのを手伝っていた。局員の方が地域の利用者のことを把握し、このような細かいニーズに応えることができるのは、コミュニティの密度が高い過疎地域の郵便局ならではの特性の一つである。

米の送り先は横浜市で暮らす奥様の兄弟と大阪府のCさんファンの消費者である。このファンの方は、Cさんの米を食べたときにその美味しさに感動したため、放射能検査のバーコードから生産者を特定し、Cさんに直接米を送ってもらうようになったとのことである。

○郵便局の使用頻度と印象

郵便局の使用頻度は多くて 3 か月に一度ほどで、米を送る以外には支払いや記帳のために訪れる。郵便局の場合、米を送るときに梱包する必要がないので便利だそうだ。また、郵便局の局員の方とは世間話を交わす。

局員の方に対しては、運搬の手伝いや両替をしてくれることなどから、とても親切な印象だと言う。また、局長と仲が良く、他の局員の方とも多くは顔見知りであるため、公共機関として安心・信頼できる場所だそうだ。

○奥川地区の良いところ

奥川（出戸）のいいところは、知り合いが多く、外を出歩けば大抵顔見知りと会うことができるところだそう。住み慣れていて暮らしやすく、また、食べ物が美味しいという。

ただし、住民同士の交流、とくに飲食を伴うものはコロナの影響もあり減少したそうだ。また、コロナの影響は関係なくとも、高齢化が進んでいるため、お年寄りは外に出るのがおっくうになり、隣の家などに遊びに行く機会も減少している。老人クラブもあるが女性のみが参加しているという。

○地区での暮らしにおける不安なこと

西会津での暮らしにおいて心配なことや不安なこととしては、獣害によって作物が荒らされてしまうこと、高齢化が進んでいること、自分自身の健康、子どもたちや若い世代が西会津に戻ってこないこと、集落の共同作業や行事が維持できない可能性があること、農業の後継者がいないことなどを挙げていた。とくに、農業の後継者問題については、遠くに個人の顧客ができるほどの美味しい出戸米を絶やささないようにするために、早急に対策を練らなければならない問題である。

○調査学生のコメント

農業従事者支援といえば、住まいや農地の用意や補助金の給付、技術や知識を身に付けるための講習などを自治体が行う場合が多い。西会津でも「新規就農者あんしんサポート事業」として補助金の交付を行う制度などがあるが、より農業従事と西会津でのくらしをまるまるサポートできるような体制が整えられたら良いのではないかと考える。

また、地域住民同士の交流について、そもそも年を重ねることで体力的にも気力的にも気軽に歩くこと自体が減っているというのは盲点だった。家から出づらいのであれば、学生などが訪問させていただくという交流方法もあるが、誰かを家に招くとなるとおもてなし精神が働いてしまい、そのもてなすという行為が負担になってしまうそうだ。外部からの人という印象を少しでも和らげ、おもてなし度を下げていただき、少人数から徐々に受け入れてもらうなど、負担の少ないように交流する方法を模索する必要があるのではないかと考える。

④利用者 Dさん

○プロフィール

Dさんは70代の男性で、元役場職員、次期区長の方である。現在は自家用のお米と野菜を作る程度の農業をしている。今は妻と二人暮らしで、奥川地区に住んで50年になる。

○日頃の郵便局の利用について

郵便局へは自家用車で訪れ、この日は年賀はがきの購入のためであった。普段は荷物の発送（お米や季節の野菜を親戚や知人に送る）、記念硬貨の購入、趣味の1つである切手収集のために訪れるという。また、男性の局員の方と同じ集落に住んでおり、局長とは同じ山登りの会に入っていることもあり、様々な会話をするという。「郵便局はなくなったら困る場所」であり、「なくなると20km先までいかなければいけない、公共機関としてここに残ってほしい」という。

○奥川地区・西会津町のいいところ、不安なところ

いいところは人が素直、優しいところ。人が来たときは、知らない人に対しても親切にすることで、良いところだ、また来たいと思ってもらえるような態勢をとっている。

暮らしで不安なことは、病院などがなくなってしまったため、車がないと不便であることだという。健康であればいいが、医者にかからなければいけなくなった時に大変だという。

○地区の方との交流

月1回地区の方と趣味の麻雀をする際に交流があるという。コロナの影響もあり、集落のグループが集まる機会が減っていたため、次期区長としてそのような機会を増やしたいと考えている。また、高齢者が多いため、高齢者が楽しめるようなものを考えたい、みんなで協力してみまもりをしていきたいという。

○奥川地区・西会津町をよりよくするには

1つ目は、共同で草刈りをするなど環境美化に力を入れることで、田んぼや畑の動物対策になるのではないかという。2つ目は、空き家が増えているため、若い人を呼んで住んでもらうようにしたい。「人が中に入れば廃れることもない」とのことである。

○郵便局の余剰スペースの活用方法

郵便局の余剰スペースを活用した取り組みの要望として、「大変だと思うが可能ならば」と買い物支援について話された。車のないお年寄りが買い物に困っているため、ラクター

(電動カート)で移動できる範囲で、生活に必要なもの(食べ物だけではなく長持ちする日用品のようなもの)を置くといいのではという。遠くの店に行かなくてもここに来ることで生活に必要なものが揃えば、郵便局の存在価値が高まるのでは、という。

○郵便局に対する感想、大学生に対する意見

郵便局のサービスに対しては、局長や局員の方たちがアドバイスや情報をくれたりするなど、親切であるため不満はないという。

大学生に対しては、若い人と交流する中でアドバイスをもらったり、自分たちにはない新しい考えを参考にしたりしたいと述べた。

○調査学生のコメント

意見がハッキリしている方で自分の考えをおもちだった。例えば、イベントでの交流、空き家対策による野生動物対策に力を入れる、郵便局の空きスペースには生活用品の売買があるといい、大学生には新しい考えを参考にさせてほしいというご意見だった。今後大学生との関わりが増える方かもしれない。

また、お話からは、奥川地区に対する熱い思いを感じた。積極的に人と関わることを望んでおり、関わりが生きがいや衰えを阻止する力になっていることも感じる。これまで学んだように、過疎地域は若い人の力を必要としており、何かしらの形で他地域の人や学生と関わり、力にすることが必須だと思う。また、働く場がないことによって、自分の子どもが地区外に出たり住んだりしていることから、若い人の移住を進めるには働く場の拡充が欠かせないとのことであった。

空き家についてのお話もあり、関心があると同時に解決に対して意欲を持っていると感じた。また奥川に来てもらいたい(来てもらえるようにしたい)という思いもあることから、環境(生活)整備と魅力の発信が大切だと思う。興味→移住→定住へつなげていくことで、空き家問題も解消に向かうのではないかと。

さらに、郵便局はなくなったら困るという言葉や、余剰スペースを活用した買い物支援の案から、過疎地域にも郵便局が存在する意味や、過疎地域ならではの特性を生かすことで新たなものを生み出していけることに気づいた。集まる機会が減っているため増やしたい、大学生と交流をしたいという声があったため、私たちが地域に入り、少しでも奥川の力になればと思った。

⑤利用者 Eさん

○プロフィール

Eさんは60代の男性で、現在は自家用程度の農業をしている。妻と2人暮らしで奥川の小綱木地区にお住まい。子どもは3人で郡山市、名古屋、新潟にいるという。

○日頃の郵便局の利用について

郵便局へは自家用車を自分で運転して訪れ、月に3回程度利用する。利用目的は、ほぼATMの利用で、お金のやり取りはほとんど郵便局である。全国どこにでもあり、昔は振込料が安く子どもへの仕送り時に都合が良かったという。また、局長と仲が良く、相談事や問題の共有もするという。時には別室でプライベートな話をするということもあると楽しそうに語った。

○奥川地区・西会津町のいいところ、不安なところ

「いいところがなかなか見つからない」と話しながらも、「なんだかんだ気持ち的に安心するところ」だという。一方で、心配・不安なことは「人間関係」だという。Eさん自身「平らかに仲良くやることや楽しくやるのが苦手」だというが、「これからは高齢化で死んでしまっただけだから、みんなで仲良くやっていきたい」と話す。しかし、昔からの込み入った関係もあるため、なかなか難しいという。

○奥川地区・西会津町をよりよくするには

若い人に来て欲しい。年に1回でも、1人でもいい（本当はたくさん来てほしいが）、振り分けしないで誰でもいいから外の若い人に顔を出してもらいたいという。そうすることでこちらにも何か残るものがある。「思い出したときにまた来てくれたら」とのことである。

○郵便局の余剰スペースの活用方法

余剰スペースを活用した取り組みの要望として、地域住民の趣味教室や集う場づくりを挙げられたが、「一番は身近な情報が欲しい」という。集会が減っていることもあり情報交換ができる場を求めている。（マイナカードでポイントがつくとかそういうことがわからないからわかる人がいれば教えてもらいたいなど。）

○郵便局に対する感想、大学生に対する意見

郵便局についてはATMの利用、局長との会話に満足しているとのことだった。

大学生に対しては、堅いところではなく（郵便局ではいい加減なことはできないから）気楽なところでいろんな話ができたらいいという。誰とでもいいから、「やっぱりそうだな」と話をする必要がある。若い人とはお互いのバランス（時間など）が難しいものがあると思うが、これからもまた交流ができたらいいと話した。

○調査学生のコメント

Eさんの話を聞いて印象に残ったことは、とにかく若者に西会津に寄ってほしいと仰っていたこと。普段、私たちはゼミの一環としてしか西会津に来ないため、より訪れる回数を増やしていければと感じた。

コミュニケーションをよく取る方だったため、会話が弾んだ。会話をすることが生きがいにつながっている。郵便局のもつ余剰スペースで、身近な情報が得られるような交流会ができるといいのではとおっしゃっており、奥川のことだけでなく、広く世の中への関心を持っている方なんだと思った。

若い人に来てもらいたい、地域の方と情報交換するための交流の場が欲しいと強く求めているのが印象的で、人との交流を通して地域が元気になると感じたため、その拠点の一つに郵便局の余剰スペースが活用できればいいのではないかと思った。

⑥利用者 Fさん

○プロフィール

現在 80 歳で、生まれたときから奥川地区塩集落に住んでいる。現在は妻と、設備関係のお仕事をされている息子とのご家族 3 人で暮らしている。退職してから 2ha ほどのお米と、10a ほど野菜を栽培しており、花や花木を植えることが趣味である。今一番力を入れているのは、土地がたくさんあるためその場所の木を切って、そこに花や花木を植えて「福島市の花見山みたいな場所」を作ることだという。「もう 10 年くらいになってっけど、随分格好になったよ。これが今の目標だ」と笑って語った。

○郵便局に来るときの頻度や用事について

自家用車で移動することが多く、郵便局は月に 3~4 回利用している。主にゆうパックの関係や、書留の送付等の目的で利用することが多いという。こうした事務的な用事以外で郵便局を訪れることは少ないという。

○郵便局員さんとの交流について

この郵便局は「困ったことがあるとき、具体的には入院の保証等がどうなっているといったものの確認や相談をしに行ける場所である」という。局員との交流は、頻繁にある。地元だし、「お互い様」だからという。また、プライベートなお話等もするという。局員のみなさんが荷物も率先して運んでくれるし、「みんな真面目に手伝ってくれるからいいよ」と嬉しそうに語った。

○暮らしの中で、この場所のここが好きだと思うところ

まず、人柄がいいのが第一であり、全ての人が友達みたいだと語る。交流の頻度がどれくらいかは分からないが、付き合う人は結構多いという。月に5回から6回ほど交流して、1人につき30分から40分ほど会話を楽しんでいるという。内容としては、今一番困っていることの話や楽しかったことなど、あとはお互いに自慢話が多いと笑う。実際に交流する人は、30歳から70歳くらいまでととても年代の幅が広い。

また、この地区の自然等を利用して「観光地までとはいかなくても、何か売り物になればいいな」とも思っている。

○暮らしの中で困っていること、不安なことについて

農協の支店がなくなるという話を聞いたことが今一番不安なことであり、なんとかそれを阻止しようと努力しているという。そして、「この郵便局がなくなることはないと思うが」と不安そうに話された。

○この地区をよりよくするために、住民自身が思うこと

一番感じているのは、自身が花見山を作りたいと思って取り組んでいるように、自然を利用することであると語った。

また、農家をやっていて感じているのは、ここは食べ物が本当に美味しいという点である。一番美味しいと思うのはお米だが、その他全ての野菜も美味しい。この部分の魅力をなんとかみんなに知っていただけたらという。

○郵便局の空いているスペースの利用方法について

若者が集まる場所がないため、こういう場所を使って若者や住民の交流の場所にしたらいいのではないかとのことであった。

○大学生にやってほしいこと

人足についてもそうだが、人数が集まらないというのが一番の懸念事だと考えている。以前は10人くらいだったらなんとかできると考えていたが、集落全体を見ても高齢化が進んでいるため、人足を自らやると考える人は少ないという。しかし、若い人が率先的に何か行動を起こしてくれれば、その波に乗って住民達もなにかやるかもしれないとのことである。

○調査学生のコメント

Fさんにお話を伺う中で、まずとても人柄のよい素敵な方だという印象を抱いた。日頃から住民との交流を頻繁にされているとお話しされていたからなのか、私たちの質問にひとつひとつ丁寧に受け答えしていただき、とても会話がスムーズだと感じた。

お話の中で花見山のような場所を作ることが夢だと語っていたことが印象深かった。実際に花木を植えるなどといった行動に移されているということはもちろんのこと、この場

所が完成すれば観光地としてにぎやかになると思うので、Fさんの活動を応援すると同時に、自分自身も何かしらの形で携わりたいと感じた。

また郵便局に対する要望については、何も思い浮かばないとお話をされており、奥川郵便局が普段から素晴らしいサービスをされていると実感した部分でもあった。

⑦利用者 Gさん

○プロフィール

奥川地区中ノ沢集落にお一人で住まれているGさん(60代)へのインタビューを行った。高校を卒業してから、41年間郵便局に勤めていたという。東京に6年ばかり住んでいたこともある。最終的には、西会津町野沢の郵便局で退職された。現在はケーブルテレビのレポーターとして活動している。

ケーブルテレビのレポーターとして活動することになったきっかけは、退職をする前に東京で行われるケーブルテレビの研修に行かないかと誘われたことだという。その時勤めていた野沢の郵便局長さんに相談したところ、無報酬で行うなら大丈夫とのことで2回ほど研修に参加し現在に至っている。

奥川の行事やイベントに関してテレビを通じて情報発信を行っており、昨日は会津若松に行き、音楽隊の取材に行ってきたという。

イベントなどがあると「やりますから来てください」という連絡がきて、現場に行くこともある。これからの予定としては、除夜の鐘を撮る番組がある。せっかく鐘があるからということ、一昨年から行っているという。

他方、コロナの影響もあり、「去年や今年は敬老会や運動会といったイベントがなくなってしまった」と残念そうに語った。

○交通手段について

自家用車で移動している。レポーターの活動で、カメラバッグや照明、三脚などが必要になってくる場合もあるため、どこへ行くにも車が必須であるという。

○郵便局に来るときの用事や頻度、交流について

郵便局には、週2~3回と頻繁に訪れる。書道や絵画など、郵便局に飾られた作品を観に訪れることもある。このような郵便局で行っているイベントについては、「お、やってるな」と思いながら、何か撮るものがあればカメラに収めている。

郵便局員さんとの交流については、「ほとんどが顔馴染みのためよく話す」という。役場の支所や農協の方とも顔馴染みになっているし、防犯協会や喜多方の警察署に行って映像を撮ることもあるから、「顔は売れていると思う」と笑って語った。

○暮らしの中で感じる課題や不安について

年々人口も減っているし、お店も少なくなってしまった。買い物は自分で行っており、奥川地区内にある「福島屋」さんといったお店や、移動販売を利用しているという。

高齢化が進んでおり年配の方がとても増えているので、これからが大変になってくるといふ。特に買い物に関しては、「移動販売車がくるためよっぽどいいが、車の運転ができない人にとってはやはり不便である」と語った。

○大学生への期待

体力的な側面もあるが、今後集落活動を維持できるかが大変であると語った。今はコロナの影響もあり人足といった活動を大学生と一緒にすることが難しくなっているが、そういうものができればいいのではないかと考えている。

○調査学生のコメント

Gさんにお話を伺う中で、地域に対しての想いを強くお持ちの方であると感じた。

特に、暮らしの中で感じていることについては高齢化や買い物支援等、集落の衰退に危機感を持っている旨のお話をされていた。自分自身は特に不便だと感じていなくても、車の運転ができない人にとっては不便ではないか、高齢化が進んでいるため人足といった活動も大変になってきているから若者の力が必要だと感じているなど、自分ではなく「地域」の課題についてお話をされていたことが印象深かった。

郵便局に関しての調査でもあったため、長年郵便局でお勤めされていたというGさんのお話はどれも興味深いものであった。特に現在取り組んでいるケーブルテレビの活動についてのお話をされている時は、声色も明るく、昨日はここに行ってこういう活動をしてきたといったお話を笑顔で語っており、今の生活やこの活動をととても楽しんでいると感じた。

住民自身の想いや、生の声を聞くことができたというのはとても貴重なものであったと感じる。

⑧利用者 Hさん

○プロフィール

Hさんは、60代で仕事は引退しており、奥川地区新町集落で母と二人暮らしをしている。年金暮らしで、畑を営んでおり、大根や白菜、トマトなど、ご家庭で食べる分を作っているそうだ。

○交通手段

郵便局は家から 200 メートルくらいと近いため、徒歩で来ている。

○利用頻度

2 ヶ月に 1 回程度で、年金以外には、お米を送ったり小包を送ったりしている。

○郵便局はどんな存在か

「なくてはならない存在」だという。昔は奥川郵便局も配達していたが、今は配達していないから野沢に行かなければならず、不便にはなったそう。しかし、奥川郵便局がなければ、年金を下ろすにも野沢に行かなければならないので、やはり奥川郵便局は必要不可欠な存在だという。

○奥川の良いところ、好きなおところ

「のんびりしていて自然があるところ」だそう。

○奥川で不満に思うところ、困っているところ

「維持始末が大変だ」という。特に、年齢を重ねると、屋根から雪が落ちたときなどが大変。雪が降らなければ、年がら年中稼がなければいけないときもあるし、雪が積もれば、3 ヶ月雪片付けだけで終わるときもあるとのこと。

雪かきは、周りの家は、自分よりも年配のご家庭であるため、近所の住民と協力して行うことができず、個人でやっているそう。

○住民の方との交流頻度

近くの人とお茶飲みをしたり、人足の後にお茶を飲んだりという程度。同級生がたくさんいるため、会えば喋る。今はコロナのためなくなってしまったが、以前は、「旅行さ行んが」、「忘年会やるが」などと話すことも多かったという。

○暮らしで困っていること

今は、自分 1 人で何でもできているため、そこまで困っていないという。しかし、年を取って車が乗れなくなることが心配だと、胸の内を明かした。一応バスはあるが、車が運転できなくなると、1 人で何もできなくなってしまうという懸念があるそう。

○普段の買い物場所

野沢のスーパーやコメリに行く。コメリも喜多方に行ったり、津川に行ったりしているそう。ちょっとした日常的な物は奥川で買うこともある。

○生活の楽しみ

山のキノコや山菜取りが楽しみ。しかし、熊がでることもあるから、そこは大変なのだそう。

○より良くするために必要な取り組み

空き家の活用が必要だという。ただ、定年を迎え、地元に戻るということで奥川に来る人はいるが、若い人を呼ぶのは難しいだろうと、複雑な心境を語った。「熊やイノシシのお肉を売って有名になるしかないのか」と、冗談交じりに話す。捕まえる人がいないという課題もある。「雪は降る、熊は出るでは、企業だって来ないだろう。そこでしか取れないものなどがあれば良いのだが」という。

尾野本地区では、ワラビの取り放題のような事業をやっている人もいるそうだが、奥川には、「それができる人、やろうとする若い人がいない」という課題も述べていた。木を植えて切る取り組みをするにしても、植えてもいいが、薪を買う人がいないだろうという。薪にするのにもお金がかかり、利益は得られない。「製材会社に依頼されたら、電話1本ですぐに持って行くのに…」という切ない胸の内も明かした。

○郵便局の活用法

地区の集会を行う場所として、郵便局のスペースを使うのは厳しいと語る。もう既に各地区に集会所はあるし、その集会を郵便局でやるとなると、家から遠くて大変になる人が出てくるそうだ。「コンビニも採算が取れないだろうから難しい。人が多いと何でもできるが…」と、再び切ない心境を明かした。

○郵便局サービスへの感想や要望

野沢までは遠いため不在票が入ることが多いという。以前は、電話1本で「午後はいるから配達してける」と言えて楽だったが、今はフリーダイヤルなどで面倒くさい。「高齢の方は、使いこなせないのではないか」という懸念が挙げられた。とはいえ、「民営化前の方が良かったという想いもあるが、公共的な機関が残ってくれているだけでありがたい」という。

○農業の暮らしについて

農業はお金がかかるため、農業を辞めてしまう人が多いという課題点を挙げた。都会から来て、いざ米を作ろうとしても、動物が出るから、被害対策のために電気の線を張らないといけないため、これなら買って食べた方が早い、と大半の人は思ってしまうのが現状だそう。しかし、そんな中でも農業をやる人はいる。その理由は、「農地を荒らすことは簡単だが、それを元に戻すことはかなり大変」だからなのだそう。「先祖の土地を荒らすことはできない」という考えの方もいるという。また、農業のための機械もお金がかかるそうで、500

万円ぐらい払って買っても、結局使うのは3、4日だけという、コストパフォーマンスの悪さについても指摘された。

○大学生の活動についての意見

中町の「人足体験ツアー」の事例を真似て、大学生と人足をする活動をしたいという。お住まいの新町集落は、高齢化により、人足の全員参加はできないため、出る人が固定されているようだ。人足に出席する人は半分くらいに減ったが、仕事量は変わらないため、参加者の負担が大きいという地域の課題を挙げながら、学生の活動へのご提案を頂いた。

○調査学生のコメント

地域を活性化させるために何をすれば良いのか、様々なご意見を頂き、一番に求められることは、住民自身が「やりたい」ということを叶えられる環境を作ることや、住民が何かを始めようと思えるモチベーションづくりなのではないかと思った。Hさんは、様々なアイデアをお持ちだったが、全てにおいて課題点も挙げ、頭を悩ませていた。そのため、今後の大学生の活動には、その様々なアイデアを形にしたり、住民が自ら動ける力をつけるための手助けをしたりすることで、課題を克服させることが求められるのではないかと考えた。

⑨利用者 Iさん

○プロフィール

Iさんは、40代の主婦。夫とその両親、子供3人の7人で暮らしている。家が奥川にあるお寺で、ご主人とそのお父様が住職をされており、Iさんは、その手伝いをしているようだ。奥川地区には、結婚を機に来たという。

○日頃の郵便局の利用

頻度は、1ヶ月に1回か2ヶ月に1回程度。お金を積み立てたり、下ろしたりするために利用している。他には、年賀はがきや切手を買ったりしている。お寺の仕事関係では、暑中見舞いのはがきをたくさん買ったり、新年の記念品のようなものをゆうパックで送ったりするために利用しているようだ。

○交通手段

自家用車で来た。距離があるため、車は生活必需品である。

○局員と話すことは？

お金を下ろしに来たときなどに、同世代の女性の局員の方と話すことがある。その局員が親戚ということもあるが、お互い小さな子供がいるため、子供の話をするのが大きな目的だという。地域に若い人はおらず、高齢者が多いため、小さな子供を持つ方が少ない。そのため、同じ立場で子供の話ができる人は貴重な存在のようである。

○郵便局はどんな存在か

Iさんは、郵便局は、「道案内の時の目印となるような道標」だという。また、車が多い日は、「賑わっているな」と感じるそうだ。地域に人が少ないため、「人が常にいる場所」と感じることもある。「お店が少ない分、やはりあると便利」という。

○奥川の好きなおとこ・良いところ

1つめは、動物がいることであるそう。西会津ではない友人に、猿やキツネがいたことを話すと、「いいな」と言われるそうだ。農家で被害に遭っている方にとっては嫌みな話かもしれないが、農作物をそこまで作っていないため、鳥獣被害がないからそれが良さに思えるところであるという複雑な心境を明かした。

2つめは、子供の遊び場に困らないことである。お寺の境内など近隣住民に迷惑をかけずに遊ばせることができ、自然に触れさせながら子育てができる点は良い点だという。

○地区の方との交流頻度

檀家さんが出入りする時期は、お茶を飲むことはあるそう。ただ、住民の方とすれ違うということはあまりなく、何ヶ月ぶりに会うということもある。普段の交流は、子供のバスを待つときに、外仕事をしている方と話す程度だという。話す内容としては、子供や家の近況だそう。

○奥川の暮らしの心配なこと、不安なこと

「この先何十年後、どうなってるんだろう」と、人がいなくなることに対する不安があると明かした。人がいなくなれば空き家も増えるため、その懸念もあるそうだ。

○奥川を持続可能な地域にするためにはどんな取り組みが必要か

「たまに、『渋谷の人をいきなり奥川に連れてきたらどうなるんだろう』という話を冗談です」と、笑いながら語った。「狭いところで生活し、コロナで困っているのなら、こっちで生活してみたらいい」などと現実的ではないが、話すこともあるのだそう。大きな企業が空いている田んぼや畑を使って何か仕事を作ってくれば、ここで生活する人が増えるのではないかと考えている。

○現在の買い物について

車で30分かけて買い物に行ったり、近くの商店に行ったり、移動販売を利用したりしているそうだ。

○郵便局を活用した取り組みに関する要望

以前、購入した物を配達してくれる生協のサービスを利用したいと思い、生協に相談したところ、奥川は配達不可地域で断られた経験があるという。そのため、郵便局がその配達サービスを担ってくれたら便利だという期待を話された。移動販売は来ているが、欲しいものは完全にそろわず、食品だけになるそうだ。日用品は頼めば持ってきてくれるのだから、たくさんの種類がある中から自分で選びたいという思いも語った。

○大学生の活動について

地区にはいろんな人がいるため、「いろんな人と話してみるとおもしろいかもしれない」というご意見をいただいた。その一人として、自身の家の住職さんを挙げた。さらに、イベントを行っても、それに参加できないご老人もいるから、そういう方にお話を聞いてみても良いと思うという意見もいただいた。個人宅をいきなり訪ねることはできないため、集落支援員の方の力も借りて、もっといろんな方の話を聞いてみたら、今までは気づけなかった課題や思いに気づけるかもしれないし、おもしろいと思うという意見をいただいた。

○調査学生のコメント

大学生の活動について、「イベントに参加できない方のお話を聞いてみるとおもしろいのでは」という意見を頂き、私たち学生には欠けていた新しい視点であったので、非常に勉強になった。岩崎ゼミとして、イベントに参加させていただく機会は今までに複数あったが、基本的にその参加者の方としかお話はしてこなかったため、参加できない、もしくは参加しない方のお話を聞くことは、今まで気づけなかった課題を知ることにつながるのではないかと思った。

⑩利用者 Jさん

○プロフィール

Jさんは70代の女性で、現在奥川地区で一人暮らしをされている。元々は郡山市出身で、結婚をきっかけに西会津町に嫁いできたという。

○日頃の郵便局の利用について

ATMの利用や郵便物を出すために訪れるそうだ。交通手段は自家用車で、週に二、三回訪れるという。郵便局では局員の方と会話を楽しんだり、他のお客さんと話をしたりすることもある。奥川の郵便局に対する印象としては、「昔からなじみのある場所で、公共機関として安心・安全できる場所、局員や利用客とのコミュニケーションを楽しめる場所、全国で取引ができるため離れている子供達ともコミュニケーションがとれる場所」とのことだった。

○奥川地区・西会津町の良いところ、不安なところ

良いところは自然や景観、人が親切であるところ、集落の雰囲気が良いところ、自然が豊富で癒やされる場所とのことだった。また、郵便局長をはじめ、局員の方が気さくでとても話しやすいところが良いと話してくださった。反対に不安なところは高齢者だけの世帯が増えていることや、それによって集落の共同作業や行事が維持できないことである。また、サルやイノシシといった動物が増えていることも不安だとのことだった。

○地区の方との交流頻度

地区の方との交流に関しては、良く行き来し、親しく付き合っていると話していただき、「農作物の新鮮なお裾分けがあって、新鮮な野菜が手に入りとてもいいんです」と教えてくださった。また、集落で女性限定の集まりや、集会所での集まりなどを楽しんでいるとのことだった。

○今後必要な取り組み

今後必要な取り組みとしては、「高齢者や集落の歴史を伝承する活動をして欲しい」とのことだった。以前に公民館で歴史講習会があり、そこで発電所にある碑について知ったそうで、今まで講習を受けるまでそのようなものがあることは知らなかったのが驚いたそうだ。

○郵便局に期待するサービス

今後郵便局に期待するサービスとしては、一人暮らし高齢者のみまもり支援や観光情報の発信が挙げられた。

○大学生の活動に期待すること

今後大学生に期待することとしては、やはり雪が大変なので雪片付けを手伝って欲しいとのことだった。

○調査学生のコメント

すごく元気な女性の方で、年齢を聞いたときに驚いた。この地域に元々住んでいたというわけではないとのことだったけれど、この奥川での暮らしを楽しんでいる様子がとても伝

わってきた。郵便局に関しては、局員の方とのコミュニケーションを楽しんでいる様子だったので、郵便局は今でも地域の人とのつながりや親しみを持ってもらえやすい機関ではあるのかなと感じた。

(2) 郵便局利用者聞き取り調査の集計結果

ここでは上記で紹介した 11 名の方への聞き取り調査結果の集計を行い、全体的な傾向について検討する。

①年齢・性別

インフォマンの年齢は、60代が5名と最も多く、次に70代が3名、80代が2名、40代が1名であった。また、性別は、男性7名、女性4名であった。

②郵便局の利用頻度

利用頻度に関しては、「週2～3回」、「月2～3回」が3名ずつ、「月に1回」が2名、「月3～4回」、「2ヶ月に1回」、「3ヶ月に1回」が1名ずつであった。

③郵便局の利用目的

郵便局の利用目的としては、「ATM（記帳や振込など）の利用」が8名、「荷物の発送（米や野菜、贈答品など）」が7名と、この2つの項目が利用目的となっている方が多かった。

他には「年賀はがきや切手の購入」、「郵便物の送付」という方が2名ずつ、「郵便局内に展示されている書道や絵画作品を観る」ために訪れた方も1名いた。

④移動手段

移動手段は「自家用車」を運転して来られた方がほとんどで、「徒歩」で来た方が1名いた。また、「デマンドバスを利用することもある」という回答もあった。

⑤郵便局で用事以外に行うこと

用事以外では、「局長や局員の方と話をする」という方が6名、「他の利用者の方と話をする」という方も4名いた。また、「展示してある作品を観る」という方もいた。

⑥郵便局はどのような場所か

「頼りになる」「信頼できる場所」という方が5名と最も多く、他には、「なくなったら困

る場所、「局員や利用者の方と会話を楽しむ場所」という方が2名ずついた。また、「道案内の目印となる場所」という方もいた。

⑦地域の良い・好きなどころ

良いところは、「人が良い（穏やか、素直、親切など）」という方が5名と最も多く、他には「自然豊かである」という方が3名、「安心できる」という方が2名、「食べ物が美味しい」、「子どもの遊び場がある」、「暮らしやすい」という方もいた。

⑧住民同士の交流

住民同士の交流に関しては、「よく行き来する」、「ほぼ毎日お茶飲みをする（野菜や料理を持ち寄って）」という方が3名、「会ったらお話をする」という方が2名いた。他には、「月1回趣味の活動で集まる」という方や、「ケーブルテレビのレポーターとして地域の方と交流する」という方もいた。他方で、「コロナウイルスの影響により集会や交流が減っている」という声もあった。

⑨地域の暮らしの不安・不満

不安なこととしては、「車がないと不便（病院や買い物）」、「子どもや若い人がいない」という方が4名ずつ、「高齢化により集落の共同作業や行事が維持できない」という方が3名、「空き家の増加」、「作物の動物被害」が2名ずついた。他には、「雪かき」や、「農業の後継者がいない」こと、「人間関係」について不安を持つ方がいた。

⑩今後必要な地域の取り組み

今後の取り組みとして、「空き家を活用した取り組み」をあげる方が4名、それに関連して「若い人を呼び込みたい」という方が3名いた。他には、「動物対策のために環境美化に力を入れる」、「地域の食べ物の魅力発信」、「豊かな自然の利用」、「集落の歴史を伝承する活動」などがあげられた。

⑪郵便局への要望

郵便局の空きスペースの活用に関しては、「住民と関わりをもつ場（趣味的な活動やお茶飲み、情報交換、若者と交流、むらの保健室など）にしてほしい」という方が4名、「買い物支援サービスの場にしてほしい」という方と、「1人暮らしの高齢者のみまもり支援をしてほしい」という方が2名ずついた。他には、「観光情報の発信」、「真新しいイベントをしてほしい」という声があがった。

⑫郵便局のサービスの感想

郵便局のサービスについては、「施設の利用や局員の方との会話で「情報やアドバイスをも

らえることから満足という方が5名いた。「局員の方の対応が親切である」という方も2名いた。他方で、「不在票の対応がフリーダイヤルなどで面倒になった。高齢者は対応しづらいのでは」という声もあった。

⑬大学生の活動について

「人足作業が人手不足であるため一緒にできたら」という方が5名と最も多く、「若い人と交流したい」という方も2名いた。他には、「集落の維持・活性化のために若い人に行動を起こしてほしい」、「若い人が来ると明るくなるため良い」、「地域のイベントに参加してみてもいい」という声があがったが、他方で、「外から来る人にはおもてなしをするという義務感がありお年寄りに負担になる」という意見もあった。

第2節 地域おこし協力隊への聞き取り調査結果

本節では、地域おこし協力隊員8名への聞き取り調査結果を、インフォーマントごとに紹介し、合わせて聞き取りを行った学生のコメント（感想や気づき等）を記載する。

①地域おこし協力隊員 Kさん

○プロフィール

Kさんは、20歳代で福島県出身。赤べこや会津天神などの民芸品を製作している工房の『野沢民芸品製作企業組合』（以下、『民芸』と表記）で張り子を作っており、任期としてはもう2年半になる。

○地域おこし協力隊になった経緯

もともと美術が好きだったKさんは、美術を学ぶために、福島大学のスポーツ芸術創造専攻の美術分野（現在は芸術表現コース）に進学した。そこで、現在の人間発達文化学類にいらっしゃる渡辺先生に誘われ参加したアートプロジェクトが縁となり、会津に出会ったという。具体的には、会津でアートのイベントがあり、その手伝いをしていたそうだ。

卒業後、会津の印刷会社にデザイナーとして就職したが、やはり「物作りがしたい」という思いがあり、退職を決意。その後、ネットのポータルサイトで地域おこし協力隊の募集を見つけ、武士の副業であった張り子づくりが長い年月の中で形を変えながら残り続けている福島のものづくりに魅力を感じ、応募するに至ったそうだ。また、この募集は職人枠で、立体をつくる技術が必要であったが、Kさんは大学で彫刻のゼミに入っていたため、その経験が応募の後押しになったようだ。

○協力隊と正社員のメリット

Kさんは、協力隊になってから2年半が経つため、もうすぐで任期満了となる。任期満了後は、『民芸』に就職するそうだ。協力隊の期間は、仕事を覚える期間で、正式に就職した際には、会社ともっと深く関わっていくことになる。協力隊として関わることと社員として関わることの違いをもう少し詳しくお聞きしたところ、協力隊として勤務するということは、公務員、つまり部外者として『民芸』にいるということになるため、会社と一定の距離があるのだそう。そのため、社員になることには、会社の構成員として、会社をよくするための意見を言えるようになるというメリットがあると語った。しかし、協力隊の名前が助けになることもあるという。「協力隊です」と言えば、「外から来て何かしている人なのね」という認識を持ってもらうことができ、地域に入りやすくなるのだそうだ。

○協力隊の課題

ただ、「協力隊」と言ったところで、必ずしも住民から理解を得られるわけではないのだそう。よそから来て、住民の税金から支払われる給料だけもらい、大して成果を残さずに帰る人もいる。また、協力隊の仕事は、住民と関わる仕事ばかりではない。住民の目につかない仕事だと、「あの人が何やってるの?」と思われ、本当に仕事をしているのか疑われることもあるそうだ。このように、住民から見て、協力隊が何をやっているのかわからないという、「協力隊の活動の不透明性が一番の課題」だと述べた。また、協力隊自身の目標と自治体のニーズがずれていたり、住民が置いてきぼりになったりすることもあり、このような「両者の溝」も課題なのだそう。

○住民とのコミュニケーションについて

Kさんは、このような溝をなくすため、互いの考え方や想いを擦り合わせるための、コミュニケーションの重要性を指摘した。都会から来た協力隊員の中には、「何も悪いことをしていないのに悪く言われることが辛い」と言う方もいるのだそう。

しかし、Kさん曰く、この冷たい視線は、「住民の町に対する誇りの裏返し」で、自分たちでつくってきた町という自負があるからだという。そのため、話し合いの場を設けてみると、誤解が解ける場合もあるのだという。「あれ、お前意外といいやつだな」とわかり合えた経験をした人も実際にいるそうだ。

コミュニケーションの場に関しては、自分で作るか、人に作ってもらうかのどちらかで、協力隊としてのミッションにもよるといえる。そもそも人と関わる仕事の方もいるが、Kさんのようにずっと工房におり、全く関わらない人もいる。

Kさんは、「何をしているのかわからない」と言われることを危惧し、仕事では関われないような人と接点を持つために、絵の活動を始めたそうだ。具体的には、協力隊の先輩が営む、ゲストハウス『ひととき』での個展の開催。そこで、絵はがきやポストカードを売っているのだそう。奥川郵便局にも風景画を展示している。絵が、地元のおばあちゃんと話をするきっかけになることもあるという。

また、以前、印刷会社にいた経験を活かし、商工会のポスターのデザインも手がけたり、人足などの住民活動に積極的に参加したりすることで、人との関わりを少しでも多く持つようにしているそうだ。さらに、地道にお店を回ったり、声かけをしたりするようにしている。「足で稼ぐ」というような、そういう姿勢を見ることで向こうの考えが変わることもあるという。

○商工会のポスターのデザインを手がけたきっかけ

ポスターのデザインを手がけたきっかけとなったのは、今も道の駅に掲示している大きな看板だという。この看板に絵を描いてくれという依頼が、商工会から『民芸』の社長を通してKさんのもとにあったのだそう。それを引き受け、描いたところ、それを見た商工会の

青年部が、「ぜひ、うちも」と言ってポスターのデザインを手がけるに至った。Kさんは、口コミの力でこの仕事につながったのだという。口コミの力が強いという特徴は、噂が広まりやすいという田舎特有の課題の裏返しでもあるが、良い方面で利用させてもらったと笑いながら語った。

○協力隊活動のやりがい

Kさんが感じるやりがいは2つあるようだ。

1つは、「ものづくりの流れや、お客さんとしてだったら普段見えなかった製造のネットワークが見られること」だという。1か所で全てやっているわけではなく、いろんな所が連動している。例えば、張り子を入れる専用の箱があるが、それは『民芸』で作っているわけではなく、違う場所で作っているのだそう。そういったつながりを見られることがおもしろいという。

もう1つは、「関わった人の可能性を広げる一助になれること」だという。地域住民との距離を縮めたり、活動への理解を深めたりすることは非常に難しい。しかし、自身の様々な活動によって、上手くコミュニケーションを取り、人脈を増やすことが、その方たちの可能性を広げる手助けになることが嬉しいと語った。

○協力隊になって良かったこと

やりがいに関連して、協力隊になって良かったと感じることについて伺ったところ、行政に支援してもらえることのありがたみが挙げられた。生活の面では、住むところを紹介してもらえたり、生活状況で困ったことがあれば支援してもらえたりするのだそう。また、視野が広がったことも、良かった点の1つだと語った。住む場所は違うが、この地域と関わっている人（関係人口）はけっこう多いのだそう。例えば、協力隊後に東京に戻ったが、仕事でこの町と関わるプロジェクトをやるなど、地域とつながりを持ったり、活気づけたりする方法は多種多様だと気付いてよかったという。

○協力隊が抱える不満

協力隊に関する様々なメリットを伺ってきたが、中でも、やはり不満はあるようであった。その不満は大きく2点。

1点目は噂である。Kさんは役場に恵まれたそうだが、自分がやりたいことと役場の言っていることがうまく合致しない協力隊もいっぱいいるという。西会津町は、比較的面倒を見てくれるが、役場や住民ともめながらやっている自治体もあり、そういう地域では出てしまった協力隊もいるそう。コミュニケーションを取り、互いに理解しあうという部分が必要だという。

2点目は資金。ものづくりを一から行っても、必ずしも売れるわけではないため、赤字になってしまう人もいるのだそう。限られた条件の中で活動しなくてはいけない人は、思い通

りの活動ができず、苦しむそうだ。

○地域活性化に関する K さんの思い

活性化に対する住民の考え方は様々だという現状を踏まえ、K さんは、町の状態に沿った盛り上げ方をしたいと語った。突拍子もないイベントを行っても、結局住民の方が置いてけぼりになってしまい、外から人が来るだけで町の人に来ないという状況になってしまう。そのため、町の人が気軽に参加でき、昔の賑わっていた頃を思い出せるような盛り上げ方が必要で、そういうことがイベントなどでできたら理想だという。町民の方の望みと摺り合わせることが大切で、「自分勝手にやらないのが一番大事」と語った。

○関係人口の重要性

賑わいもなく、死んでいくばかりの町になっていくのは厳しいという心境を明かした。その上で K さんは、内側と外側の力どちらも必要だと語る。その比率は町の状態によっても違うのだろうが、どっちかが 0 でも悲惨なことになるだろうと述べた。

○大学生の連携事業に対する思い

「本当に来てくれ！と思う」という熱い思いを語った。K さん自身が大学生時代に地域とかわるプロジェクトをきっかけに、会津に興味を持った 1 人であるため、今の学生たちにも、「できるだけ脳みそが柔らかいうちに色んなものを見てほしい」という。さらに、「若い人が来ると、孫が帰ってきたようで、じっちゃんばっちゃんが活気づく！」と語った。

○郵便局の活用について

空いているスペースを物置として使うにはもったいないため、「お茶飲みなどのサロンスペースにすることで、地域住民の憩いの場にするのはどうか」という意見をいただいた。

○今後の展望

K さんは、福島のものづくりに一生貢献していきたいという。万が一、この地域を離れることがあったとしても、ここで学んだことは絶対についてくるため、それを別の福島の産業に活かすこともできる。そのため、福島のものづくりに、何かしらの形で貢献することは、死ぬまで貫きたいという思いがあるのだそう。

もともと、東日本大震災をきっかけに、「福島から絶対に出ない」という思いが確立された K さんであったが、会津での協力隊の活動を経て、その思いがより強固になったそうだ。直近の目標としては、『民芸』になるべく長く勤めることを掲げていた。いずれは地元に戻りたいという気持ちもあるそうだが、「今はここでやれることを精一杯やる！」という意気込みを見せた。

○調査学生のコメント

今回のインタビューを通して、地域活性化において重要なことが2点あると感じた。

1点目は、住民とのコミュニケーションである。Kさんのお話にもあったように、外部の人間が動くだけで、住民の思いがついてこなければ、地域の衰退という課題を根本から解決することはできない。その地域を今まで支え、作り上げてきたのは住民であるため、その住民たちの意思を尊重しながら、いかに互いに歩み寄るかが、今後の地域活性化のカギとなると思った。

2点目は、一見デメリットに見えることもメリットに変える視点である。Kさんのお話で、協力隊や地域の暮らし、それぞれの特徴は一長一短であることを知った。その中で印象的だったのは、短所で終わらせないKさんの取り組みである。例えば、人足は、一見負担とも捉えられるが、Kさんは住民とのコミュニケーションの場としてポジティブに捉え、自分の活動に活かしていた。また、噂が広まりやすいという田舎特有の特徴も、自分の活動の口コミとして活用していた。このような、悪い条件も良い方向に変える視点は、地域が抱える課題を活性化するための材料として生かすという取り組みにおいて、必要な視点だと思った。

②地域おこし協力隊員 Lさん

○プロフィール

Lさんは20歳代で神奈川県川崎市出身。東京藝術大学で修士課程まで学ぶ。大学在学時から、地域に入ってからアートプロジェクトに取り組み、その可能性を感じていた。協力隊については事前にネットで調べていたそうで、芸術系の協力隊を探していた時に見つかったのが西会津町であったという。茨城や瀬戸内などの他の地域にも芸術系の協力隊はいたが、当時は募集していなかったため、西会津の協力隊に応募した。

○協力隊員としての活動

協力隊としての仕事内容は大きく2つに分かれる。

1つめは、「アーティスト・イン・スクール」。西会津の中学校で、同じような活動をしているアーティストを呼んで、中学校の中で作品を作らせてもらったり、地域の中をリサーチして面白い点をトピックに作品を作って中学校で発表したりするなど、教育現場の中にアートをユニークな形で普及する活動である。

2つめは会津ゆかりの作家の「古川利意」さんのプライベートギャラリーの設立。奥川地区の方と共に蔵を活用しての設立を目指し、クラウドファンディングも行った。

○西会津に住んで感じた魅力（プラス点）

会津ならではの行事や暮らし方のような古き良きものが残っていること。それが都市出身の自分にとっては面白いと感じる。具体的にはお米に対する信仰心や農業に関するお祭りに興味を持っている。Lさんが特に興味を持った行事は、「道具の年取り」というもので、大々的には行わないが、1年使った農具や生活の道具などに感謝してお休みさせる日のことである。また、家の造りが面白いと感じたそう。部屋がたくさんあるなかで、訪ねてくる人の親密度によって通す部屋が違うことが面白いという。さらに集落のコミュニケーションが密で温かみのある関係であることも魅力として挙げられた。

○困ったこと、変えた方が良かったことなど（マイナス点）

移住者としては、会津弁など言葉が分からずに困ることはあったという。また、良い点の裏返しではあるが、外の人にはコミュニケーションが密なコミュニティに入りにくいと感じることもある。しかし現在はよそ者だから距離を置かれているのか、コロナのため距離を置かれているのか分からない部分はある。また、情報の発信に関しても、もっと外部に発信できると良いと感じる。観光地でもなく閉鎖的になってしまいがちになるため、SNSも含めて外部への発信を行えると良いのではないかと述べていた。

○協力隊員になったきっかけ

大学時代から研究室で、地域に入ってアートプロジェクトを行ってきた。自分たちで協賛をとったり助成をもらったりして、地域に入り取材を行い、滞在制作をおこなって作品発表などを何回か行うものである。地域に入って、その「人」の暮らしや生活に寄り添って作品を作る面白さや、関わりながらアートプロジェクトをやる可能性を感じたことなどがきっかけであるという。

場所にこだわりはなかったが、たまたま西会津国際芸術村の取り組みを知ったこと、その期間に協力隊でアート担当を募集していたので、「勉強しに行こう」、「自分のプロジェクトをやってみよう」と思い西会津奥川地区に来た。また、コロナにより予定されていた計画がキャンセルとなり、都市での作品づくりのモチベーションが低下し、田舎の方が自由に作品をつくれるのではないかと考えたのも一因である。

○協力隊になって感じること

実際に地域に住んで地域の人々と協力して何かを行うことができるのは、協力隊員としてここにいる利点だと感じる。しかし業務としての活動に時間をとられてしまう面もあり、自分自身作品や映像を作ってきたが、協力隊としてこの町で自由に創作活動ができるわけではないということは感じるという。

さらに、地域の暮らしに入っている分、恐縮してしまって、俯瞰して直接的に地域を作品にしづらいことがある。例えば、限界集落のような地域の問題点を取り上げたとして、その問題点を強調する作品を作るのは躊躇ってしまう。また、根深い問題として芸術という分野

でいうと、働き方がすごく狭く、作家として一人前に稼ぐことがとても難しいため、田舎に入って企画を打ったり、作品を作ったりするのは収益を伴わないことが多い。そのため、協力隊のように固定収入などの暮らしのサポートがあるのはありがたく、芸術家をサポートする制度はとても大事だと感じている。

○協力隊員として活動をするうえでのやりがい

都市と比べると田舎での活動の方が自由にやりたいことを突き詰められるため、協力隊員として田舎の地域に入って活動を行えることはやりがいがある。また、お金や暮らしのサポートがあったり、他の協力隊員の方々と助言し合いながら活動できたりすることも魅力であるという。

○協力隊員制度の課題や問題点

協力隊員制度に関して課題などはあまり感じない。西会津の協力隊に関しては、各々の分野で能力を発揮することができる。

ただ、協力隊には様々な分野があるが、サポートの金額が一律のため、本来お金がかかる分野なのにお金がかかる企画ができないことがある。Lさん自身は、自分で助成金をとったりして、外から資金を集める努力をしているという。

○協力隊員の視点から、地域の将来について思うこと

少子高齢化が著しい集落なので、2、30年後にこの地域が残っているかと言われると考える面がある。自然な流れでいくと無くなってしまふことは仕方がないが、魅力的な文化や暮らしが残っているので、何かしらのかたちでその文化を残していくべきである。

自身の業務に関していうと、会津ゆかりの作家さんの書かれた絵に、年中行事や子どもの頃にあった会津らしい取り組みなどが絵として残されているため、それをいかに保存して守っていくのが個人的な課題となっている。自分自身、ずっと西会津に関わっていけるかはわからないため、地元の人が、知識がなくてもきれいに保管できるシステムをつくらうとしている。

○地区の人との付き合い方、関わり方

協力隊の活動の1つである、会津ゆかりの作家の「古川利意」さんのプライベートギャラリーをつくる活動の発起人の方を中心にコミュニケーションをとっている。まんべんなくコミュニケーションをとっているというよりは、発起人の方を訪ねてきた方とお話をして、その方をきっかけにコミュニケーションが広がっている感じ。

野菜や手作りのものなどの物々交換が、コミュニケーションとして当たり前に行われていることには驚いたという。

○移住者視点からの必要な支援

地域おこし協力隊、そして西会津への移住者からの目線として欲しかった支援としては、移住する前に十分な説明があることだという。なぜなら、移住して一年目の西会津の豪雪はとて大変であり、水道の凍結や雪かきといった地域ならではのトラブルは移住前に自分が調べていても知ることが難しいと感じたからである。ご自身は移住前にネットで情報収集を行っていたというが、西会津町のように小さな町の情報は少なく、現地の人から得る情報が最も役に立つ情報源になったという。

○今後の西会津町の活性化

今後ずっと移住者を増やしていくことは難しいと感じている。なぜなら、協力隊の制度が充実することで若者が西会津に来ることはあると思うが、それ以外で西会津に移住することはあまり無いと考えられるからである。そこで、関係人口を維持することが大切なのではないかという。そのために、宿泊施設や飲食店、観光情報の増加等などにより関係人口を受け入れる敷居を下げる必要があるのではないかと述べている。西会津を訪れる敷居を下げるにも、東京など首都圏とは距離の問題もあるため、福島県内や新潟などからの客足を増やすことの方が現実的ではないかという。

次に、魅力の発信については、直接現地を訪れないと魅力を外部に伝えにくいと感じているという。Lさん自身は外部から移住してきた身として感じた魅力の一つに、西会津の野菜がとてもおいしいことを挙げていた。特にトマトがおいしかったという。しかし、この野菜も地域の中でのみ消費しているものが多く、一般的には市場に出回らない。そのため、こうした魅力は現地を訪れないと分からないと述べていた。こうした魅力を発信する手段としてSNSがあるが、SNSでの発信にも限界があるという。今回の場合であると、西会津の魅力をSNSで発信しても、元から田舎に興味がある人には情報が届きやすいが、そうではない人々に情報を届けるのは困難であると述べていた。

そのうえで大事なことはブランディングではないかと述べていた。L氏は以前かかわりのあった西会津以外の農家の方の例を挙げてくれた。その方は、トマトを育てており、パッケージデザインの独創性やトマトを使ったオリジナル商品の開発などを通して、テレビ出演や海外への出店などを果たしていたという。つまり、やり方や宣伝の仕方次第で可能性が広がるのである。しかし、西会津ではそのようなブランディングして魅力を発信する例が出ていないという。また、農家の人々自身も外部に商品を積極的に売り出しておらず、道の駅やふるさと納税で売り出す程度にとどまっている。さらに、魅力の発信の仕方を広める専門の協力隊もないと述べていた。

○今後の目指すものや自身の夢

Lさん自身の夢や今後目指すことについて質問したところ、現段階ではまだ迷っているが、地域に眠っている資源を見つけ出し、芸術と掛け合わせて発信する企画や作品作りのよ

うなことを将来的にやりたいとのことだった。また、発信する場所を作ることに興味を持っており、実際に、会津ゆかりの作家の「古川利意」さんのプライベートギャラリーを作る計画はそれに当てはまると述べていた。

将来的には、美術館のような多くの人に見てもらえる展示会場で作品を展示することが目標だそうである。そして、すでに西会津でおこなうギャラリーの計画の連携事業として、東京芸術美術館で行う企画が決定している。内容としては会津地域に関係する展示会を、現代アーティストを巻き込んで行うものだそうである。この東京芸術美術館での企画の後は、福島県博物館などの県内の各施設を巡回することが今後の目標の一つである。こうした企画の規模や開催の規模は、協力隊員自身が企画したり、応募したりするため、その地域にいる協力隊の活動次第で変わるという。

○学生との域学連携について

学生と域学連携についての考えをうかがってみたところ、集落支援だけでなく、協力隊とも協働して行うことも良いのではないかとの意見をいただいた。実際に、L氏自身が行っているプロジェクトに大学生が協力者として参加する余地があるため、協力隊と一緒に関わっていくことは可能であると実感しているそうである。また、協力隊だけでなく他の人々と共に行うこともできるのではないかと意見もいただいた。例としては、教育の一環として高校生や中学生と共に活動を行ったり、対話したりすることができるのではないかと。地域の子供にとって大学生は自分たちの近い将来であるため、地域の子供たちが大学生と関わることは重要なのではないかと述べていた。

次に今後の西会津への関わり方に関して質問したところ、協力隊の任期満了後も関わっていきたいと述べていた。しかし、その関わり方は移住者としてではなく、拠点を別の場所に移した関係人口としての関わり方になるだろうとのことである。

○郵便局のイメージについて

次に郵便局へのイメージを質問したところ、「インフラのように大事な存在ではないか」と述べていた。集落や自治体ごとに郵便局は設置されており、コンビニのように地域にとって当たり前であって、地域に溶け込んでいるものであるイメージがあるという。しかし、地域の方と郵便局員がとても仲良くしている場面をあまり見かけたことがなく、郵便局側から地域のために何かを行うよりも、現状維持の方が地域の方々に望まれている印象があるという。郵便局の配達などに関しては、安否確認の面やコミュニケーション創出の役割も持っているのではないかという。

そして、郵便局は地域の人が集まる場所であるため、郵便局で何か行うことができれば面白い取り組みになるのではないかと述べていた。L氏自身も企画の宣伝の際には必ず郵便局に掲示物や宣伝を置くそうであり、郵便局が企画のきっかけの場になりやすいのではないかと述べていた。また、西会津の場合だと、人が集まるところが郵便局や公民館と限られ

てくるため、郵便局は人を集めやすいのではないかと述べていた。そして、郵便局を使った企画の例としては、郵便局の空きスペースを使った芸術品の展示などを行えるのではないかと述べていた。具体的には、入金や郵送のついでに作品を見て、そこから芸術作品を通して交流のきっかけを作る場所となったら理想的であるという。

○交友関係について

次に交友関係について質問を行った。現在、西会津に同年代の友人がいるかどうか質問したところ、協力隊の人々は同年代が多いためそのつながりでできることが多いが、地域には実際のところ同年代の若者自体が少ないため、友人作りは難しいと述べていた。そこで、L氏は地元の関東のつながりを使って関東圏の人を西会津に呼ぶことがあるという。そうして、西会津に来てもらった人を通して、また新たに西会津に来る人が出てくる。このようなPRの仕方が最も楽で、説得力のある魅力発信になるのではないかと述べていた。

○ほかの協力隊について

会津内で行っている他の協力隊の活動の中で、最も魅力的な企画は何か質問を行ったところ、喜多方市の協力隊の例が挙げられた。喜多方市の協力隊の人数も多く、エリアごとに分かれているという。そして、その中で蔵の活用を斡旋している協力隊の活動に興味があると述べていた。喜多方市の場合であると蔵の改装の助成金があり、そのおかげで活動がしやすくなっているという。そして、西会津町においても活用できそうな蔵が多くあるため、同じように蔵を活用することができれば地域活性化に役立てるのではないかと述べていた。

○調査学生のコメント

都市部から来た人にとっても、西会津町は魅力的に見えるものがあることを再認識することができた。しかしその魅力が実際に訪れないと伝わりにくいということもあり、そのような魅力をいかに発信していくのが今後の大きな課題であると感じた。魅力発信を行なうには魅力を持つ地域とその魅力を発見することができる外からの人材との連携が必要になると考えるため、その両者をつなぐ役割として、地域の多くの方が利用する郵便局はその橋渡しとなる可能性を秘めていると感じた。

③地域おこし協力隊員 Mさん

○プロフィール

Mさんは30歳代で神奈川県出身。地域おこし協力隊員になる前は、東京の鞆製作所に勤めていた。鞆職人は普通、仕入れた革や生地で一本鞆をつくったり、量産したりするため、

基本的に自分で生き物に触ることはない。しかし、西会津に移住してきてからは住民の革の再利用の期待に応えるため、独学で勉強し、現在はイノシシや鹿、熊などの肉片や脂肪分を取るなどの細かい作業や加工をしているという。

福島県は、原発事故の影響で獣害の肉の再利用ができず、狩った生き物はただ捨てることしかできないため、住民は生き物の再利用に対して強い思いがあり、靴職人として移住してきたMさんに期待していたようだという。靴職人は動物に触れる機会はないが、移住してきて初めて触れるようになったという。現在熊 2 頭の革が自宅にあり、ミョウバンに漬けている状態だという。しかし忙しく、手をつけられない状態だと笑っていた。

その他、東京で勤めていた靴制作会社に業務委託という形で仕事をもらったり、その他の靴制作会社からの下請けの仕事してもらったりしている。また、地域おこし協力隊として自分で商品開発もしなければならない。住民から靴の修理やオーダーの依頼もあって、すごくありがたいことだが、「たくさんやるのがあって忙しい」と苦笑いをしていた。

○靴をつくろうと思ったきっかけ

Mさんはデザインの専門学校に通い、デザインの会社に就職して、グラフィックデザイナーとして働いていた。高校生のときから靴という仕事に興味を持っていたが、仕事にするイメージがつかず稼げる仕事かと思いきや、グラフィックデザイナーになったという。しかし働いているうちに、手を動かしてものを作りたいという気持ちがふつふつと蘇ってきた。また、自然豊かな地方に移住し、自然とともにある暮らしをしながらお金を稼げるようになりたいと思うようになった。興味があった靴は技術があれば場所を選ばずに仕事ができ、自然とともに仕事や生活をするというライフスタイルも実現できるという考えもあって、手に職という意味で靴職人に就いたという。

○西会津に来た理由

Mさんは、神奈川出身のため、東京や千葉、山梨、神奈川などの自然豊かなところがいいと考えていた。西会津に来たきっかけは地球の仕事大学という社会人や大学生などいろいろな人が受けられるスクールに入り、西会津国際芸術村の運営をされている矢部さんの講義を聞いたことだという。地球の仕事大学は、全国各地の酪農や農業、林業を営んでいる人や、様々な仕事の最先端の人、サステナブルな仕事をしている人たちを訪問するという学校である。その矢部さんの講義では、Mさんが望んでいる暮らしのビジョンを体系化してわかりやすく説明され、共感したという。また、矢部さんの美的センスや取り組み、ビジョンがかっこよく、この人から吸収したいと思ったという。

移住するには西会津は遠いと思いつつも、チャレンジライフという職業体験プログラムを通して会津に惹かれ通っているうちに、起業型地域おこし協力隊の存在を知った。西会津では起業型地域おこし協力隊として、起業すると、3年間月々給与をもらいながら起業の準備ができ、起業後も補助が出るため、東京で起業するよりもハードルが低いのだという。

他の地域の起業型地域おこし協力隊は、この仕事で起業する、とテーマが設定されているが、西会津は自由に設定でき、靴職人として起業すると決めていたMさんにはぴったりの制度だったと笑顔で述べていた。

東京で働いていたときは自分のブランドを作るということに興味はなかったという。しかしチャレンジライフを通じて西会津を訪れたとき、草木編みや古布、害獣の革など、まだ生かせそうな文化や材料と、自分の製造技術を組み合わせたら、新しいタイプの商品ができそうだと感じた。それを生かしたら今までに無いものができ、ここに移住してやる意味が見つかったと思い、そのとき初めて自分でブランドを作り商品を作りたいと思ったという。

また、コロナ前は海外の人も多く出入りしていて、自分よりも広い視野がある人が近くにいることで、自分自身も向上できると思ったという。最先端の東京から離れることで向上できなくなることが怖かったが、西会津には自分よりも広い世界や視野を持っている人がいて、東京にも負けない環境であるため、自分自身も向上できるという点が魅力的に見えたという。

○西会津のデメリット

今のところは協力隊 1 年目でまだ感じていないが、「地方だからということはあると思うが、あの人とこの人は仲が悪いとか、人間関係に巻き込まれないように気をつけて、フラットでいるようにしている」と笑って述べていた。

○起業をする上で大変だったこと

最初に大変だったことは、賃貸で借りることになった工房の物件に、前の持ち主のものがそのままの状態に残っていたため、残置物の処理や掃除を自分でしなければならなかったことだと苦笑いしていた。しかし、そこにあった什器や食器、引き戸のタンス、古いミシンなどは、大家さんと前の持ち主の許可をもらって、いただいたと嬉しそうに話していた。

工房として使うための工事もしたという。その間は、移住者お試し住宅に住んでいたが、半年間の期限が来たため、工事中に引っ越さなければならなくなった。しかし靴の製作はある程度の設備がなければ作業ができないため、西会津に設備がないうちは、東京の前の職場で働き、ホテル暮らしをしていたという。その当時は、Go to キャンペーンをやっていたため、「運が良かったんだか悪かったんだか、安く泊まれたことは嬉しかった」と笑っていた。

工房は自分で壁をペンキで塗るなどをしてリノベーションをしているという。

○革について

革産業がもともと発達しているイタリアでは、革の質は全体的に良いとされるため、イタリアンレザーは良いものという風に言われているという。オイルがしっかり染みている、経年変化を楽しめる、何枚買っても同じ品質に仕上がってくるなどの技術的なものはイタリアが優れている。それに対して、日本では、革産業はもともと被差別部落と関連して語られ

ることが多く、あまりいい仕事というイメージはなかった。また、薬品を使っていたため長持ちしないし、きつくて、汚くて、賃金が安いというイメージが強かったという。

○活動における課題

3年後には仕事として安定し、地域おこし協力隊の給料がなくなっても生活できる状況を作り出すのが一番のミッションだと述べ、ちゃんとお金を取れる職人でいなければならないのが今の課題である。製品を安売りするのはいくらでも簡単だが、職人として高いお金ももらって仕事をするのは難しい。それができるよう成長しなければならないという。

○地域の人との付き合い

Mさんご自身、人間関係で嫌な思いをしたことはないという。鞆という仕事が分かりやすく、イメージがしやすいため、「鞆の人」と認知されているのと、西会津に住んでいるということで、すごく信頼されているのか、地域の人が鞆の修理とかオーダーを頼んでくれると述べている。

人足も頻繁に行っているという。野沢地区での人足は、まちの中老年男性が中心で作業が進み、女性は簡単な掃き掃除などで済んだため、人足をしている感じはあまりなかったが、そこに参加していることが大事だという。例年は人足後に交流会があったが、コロナの影響でなくなってしまった。コロナ禍ではまちの人と話す機会が少なく、認知してもらうことに少し不安を感じているが、近隣の人とは良い関係を築けているという。また、地域おこし協力隊が多い地域であるため、地域の人が移住者とか地域おこし協力隊に対して耐性があるのかもしれないとも述べている。

○地域おこし協力隊同士の付き合い

地域おこし協力隊は多いときで18人いたが、今は14人ほど。起業型とミッション型の2種類がある。もともとミーティングが月1回で開催されていたが、コロナ禍で全員が集まる機会が減ってしまったという。そのため、Mさんの工房で新卒の方を中心にお茶会を始めた。それでも、参加者は10人くらいになり結構な人数になったという。

○地域おこし協力隊として受け入れてもらうために

Mさんは、地域の人と触れ合う機会を作っていくべきだと述べている。やはり地域おこし協力隊が何をやっているのか分からないという声がよく聞こえるため、それが移住者への批判につながる。地域おこし協力隊として自分が何をやっているかを発表する機会や、地域の人と触れ合う機会は必要。町の人に受け入れてもらわないと仕事をしていて楽しくないという。Mさんご自身も、意識的に町の人に活動内容を伝えるようにしている。

また、「『何』を言うかより、『誰』が言うかがすごく大事」だという。新しいイベントのために地域の人に協力を呼び掛けるために、一戸一戸に説明しているが、移住者が説明す

のと、西会津に代々住んでいる人が説明するのではわけが違う。移住者がどんなに説明しても頭に入らないことが、代々西会津に住んでいる人が言うと一気に信頼され、理解されるという。

移住者の味方にそのような人がいることがとても大事。地方の人はコミュニティで生きているから、何をしているかよりも誰というところで判断しているイメージが強い。何かMさんに質問があっても、Mさん本人ではなく知っている人に電話するような方も多いことから、そのような地域に根付いている人が味方になってくれることで、警戒心が解けて物事がやりやすくなると述べている。

○西会津のお宝

毎日思うことは、景色がすごく良いこと。外に出ると、キャンプで感じる森の香りが感じられる。毎日がレジャーな気分。それから、ヒロロ編みや縄文土器の修復ができる人がいて、そういうモノづくりの文化が当たり前にあること。Mさんは、今、町の人からヒロロ編み¹を勉強している。今度、たまたま知り合った縄文土器の修復をしている方に、縄文土器の作り方を教えてもらおうという。

また、そのような昔からの文化は丁重に扱わなくてはいけないが、ヒロロ編みなどが人の目につくような商品を作るというのも、地域おこし協力隊としてできることの一つなのかもしれないとも述べている。Mさんの現在の目標は、会津で取れたもので鞆ブランドを作り、全国でポップアップストアにより販売し、ブランドを知ってもらうことで、西会津に興味を持ってもらい、触れてもらうこと。興味を持った人が西会津に来た時に、西会津の思い出とともに鞆を買ってもらうことが夢。西会津には面白い移住者とかお店が増えてきているから、新たな移住者が来たらいいいし、西会津の魅力を知ってもらう機会になったらとても嬉しいと笑う。

○西会津で学生ができること

Mさんは、自分の家に泊まりに来てもらい、暮らしを一緒にするのが一番いいと思うと話す。泊まりに来た学生に興味のあることを聞き、それに関係する人を紹介してあげる。学生自身が連絡を取って依頼するより、まちの人の紹介でつながる方がスムーズだからである。

西会津はやりたいことや目標が明確な人がおり、やりたいことを言えば周りがサポートしてくれる環境であるため、やりたいことを実現しやすい。その経験がきっかけでその後も西会津に通ってくれたり、良い印象を持ってくれたりしたら嬉しいと話す。まちでは、人手不足もあり労働力を求めているため、学生がやりたいことで労働力を発揮してくれるのが一番助かるという。Mさんは、学生のやりたいこととまちの人がやりたいことをマッチング

¹ ヒロロ（ミヤマカンスゲ）を使い、細い縄に縋って、シナの木の新皮を編み糸にして作る古くから伝わる民具づくりの技

してもらえそうなことができれば嬉しいとも述べている。

○郵便局のイメージ

「郵便局は公的な場であるためおとなしくする場」というイメージがあるという。Mさんは、普段の利用でも、局員の方との会話は必要最低限のものと述べていたが、奥川の郵便局では利用者の方と局員の方がプライベートな話をするということもあると伝えると驚いていた。

同時に東京での仕事は効率性が重視されるためそれは無駄話とされるが、逆にこっちではそれが必要で、これからは会話できるコミュニティの方が大事なかもしれない、時間の捉え方・働き方の価値観の転換期にいるのではないかと指摘する。

○郵便局に期待すること

みんなが利用し、信頼を寄せる場であるため、地域のいいもの・人を郵便局で紹介してくれたら説得力が増し、いいのではないかと述べている。

○調査学生のコメント

Mさんは、田舎ならではの人の関わり方や態度、考え方などについて、自身との違いを感じていて、田舎で何かを成し遂げるときや協力してもらいたいときに、移住者が「何を言うかではなく誰が言うか（誰に言ってもらうか）」が大事だと言っていたのが印象的だった。

これは、人と人の繋がりを大事にする田舎ならではの大切なところだが、見方を変えると、よそものを受け付けられないという風にも捉えられると思った。また、Mさんは自分のことを知ってもらうために地域の方と触れ合う機会を求めていたのと、学生には西会津に来て興味のあることで力を発揮してほしいと話されていたため、協力隊の方・地域の方・学生が協力して活発な活動ができればいいなと思った。

④地域おこし協力隊員 Nさん

○プロフィール

Nさんは20歳代で埼玉県出身。西会津で地域おこし協力隊を2年行っており、勤務年数は残り1年間となっている。教育委員会の学校教育課に勤務しており、小中学校を担当している。協力隊に着任してから2年くらい奥川の山浦という集落にあるグリーン奥川という農家民宿に住んでいて、そこに下宿しながら80代の女性SMさんと一緒に暮らしている。

○西会津に赴任するに至るまでの流れ

Nさんは、仕事の関係で広野町にあるふたば未来学園にNPO職員として勤務しており、

そこからの縁で西会津に来た。ふたば未来学園に勤務していた時は車も持っておらず、住居も NPO からの借り受けであったため西会津に来た時はほとんど何も持っていなかった。そのため、役場の人に、マンションやアパートに住むか古民家を借りるかという話をされたが、その際に地域に関わりたいたいと思っていたため、できるなら地域の人と一緒に住みたいという話をしたという。

そこで、たまたま農家民泊グリーン奥川を運営している元議員さんで中学校の先生だった SM さんの家に、1 ヶ月くらいであれば住ませてあげるといふ話になり、住むこととなった。そして、お互いに助け合う関係ができてきてそのまま住み続けることとなったという。

実際に一緒に住んだところ、N さんは SM さんの洗濯や掃除、買い物を手伝い、SM さんからは地域協力隊で活動していくための情報を得ることができて、互いに助け合う WINWIN の関係性が築けているという。

○実際に住んでいて感じること

SM さんと住んでいて良かったこととして、地元のことを教えてもらえて助かるということや、一緒に住んでいる人が地域でも有名な人なので、それを通じて名前を覚えてもらえたり、人とつながりが増えたりしたことがあるという。

反対に悪いこととしては、一緒に住んでいる人ありきの自分になることや、田舎特有の人間関係が自分自身の地域での人間関係にも影響するということがあるという。また、普段気をつけていることとして、家事の割り振りとしては料理や洗濯をしているが、全て自分がやってしまうと SM さんのやる事がなくなってしまうので、全部はやらないようにしているという。

○西会津の魅力について

N さんが考える西会津の魅力として、都市部にいたら人間関係が希薄で、できれば近所付き合いをしたくなかったり、反対に人間関係が濃すぎると、人間関係の薄い、自分の知り合いのいないところにいきたくなったりするが、そういう面では西会津はちょうど良く、新潟にも郡山にも 1 時間ほどで行くことができ、ないものはないがあるものはあるという感じですごく暮らしやすいところだと語ってくれた。

○西会津のアクセスについて

西会津は東京に出るにしてもバスで往復 8,000 円で行くことができ、新幹線で郡山から 2 万円ほどなのでそこまで不自由はないという。また、今はネットもあるので、Amazon でも注文することが可能で、友達に会うとしてもテレビ電話をすれば良い。また、N さんは、西会津内での買い物に関してはリオンドールやかわち屋があるが、個人商店がなくならないように個人商店の福島屋でできる限り買うようにしているという。

○西会津の自然

Nさんは西会津に住んでいると、1年を通して田植えなどの色々な行事があり、そのような光景を見ているだけで今が何月ということを感じられ、例えば、肌寒く感じていけば雪が降るといったような、原始的な感覚に戻れるという。

また、自然を使ったレジャー施設やサービスを作れないのかという質問に対しては、そのような施設を作りましょうという人はいるという。実際に、ゲストハウス「ひととき」の佐々木祐子さんという方は観光の分野で以前協力隊に入っていたこともあり、テントサウナで雪にダイブするイベントをやっている。このように、やりたい人はいるし、やれる場所もある一方で、地域に住んでいる人も高齢化し、もしもやるなら自分たちで運営していかなければならず、また、一度始めると継続してやらなければならない状況にあるという。そのため、ここに住んで一生ずっとここで暮らしてその活動をしていくと考えると、なかなか難しい部分もあるという。

このような活動を行って行くために必要な人材としては、若い人をつないでくれるパイプ役の人、外部から来て知見やノウハウを持っている人、移住してきたコーディネーター的な立場の人の三者だ。地域の中だけで稼ぐということは難しく、外部にも働きかけないといけないので都会で商売をするよりも難易度が高い。さらに、事業を作るだけでも大変なのに、事業を作った先に顧客を生みだして人を呼ばないといけない。来る人も若い人で、そういうモノに興味がある人だから、いかにして西会津周辺や都市部の人を連れてくるかを考えていかなければいけない。そのための資源もあるという。

最近の仕事しながらバケーションをするということの意味する「ワーケーション」という動きがあるという。Nさんとしては、ネット環境もあるし、1ヶ月くらい企業を誘致して仕事をするのが可能なので、第三のふるさとや気軽に帰ってこられるふるさとというイメージ、自分にとっての第三の場所というイメージづくりが良いと思うとのことだった。

○西会津の仕事事情

西会津は、起業支援として創業支援補助金を出しており、就職先に関しては、商工観光課が紹介するけれど、地方の田舎だとどうしても限られる。そのため、若い人が個々に来て自分のやりたい仕事を見つけるのは難しい面もあるという。地方に移住するときは仕事と住む場所、子育ての環境という3つのことが重要であって、西会津はその住居の面に偏っているかもしれないとのことだった。

Nさんは、地元に住むのと並行して職につくという形ができないか考え、それを教育の分野でやりたいと考えている。それは自分のように、地域のおじいちゃんやおばあちゃんのところちょっと下宿をしながら通うという形で行うことで、都市部で住んでいた子に田舎を知る機会を提供するというものだ。

Nさん自身は、最初は起業家支援コーディネーターとして来ていて、元々人を育てる、育むということにも興味があったという。今は、西会津へと人が来て、その人がやりたいこと

を発信し続けることで、地元の人がそれに呼応して地元の人と一緒に成長するということ
を教育でやっていきたいと思っている。それは、例えば、子供たちが地元の人と活動するこ
とが、子供のためになるだけではなくて大人のためにもなるということであって、それがや
りたくて西会津で起業家支援をしており、今は ICT 教育と、その地域協働の推進をやって
いるという。

他方でそのような思いを持ち続けてはいるものの、どこに行っても悩むことは大体一緒
だという。それは、町の間人間関係や行政、民間などの中でその調整をやるが、それをやるこ
とによって自分が疲弊してしまうことだという。Nさんは、一時期は地域の人と関わりたく
ないなと思ったこともあり、根も葉もない噂を言いふらされたりもしたが、でも結局みんな
各々に興味があって、関心があるからそういう風に対立しているだけなので仕方が無いこ
とであり、今は自分のやりたいことを自分がやりたいようにやっていて、そこに関わりたい
と思う人がいれば受け入れたいと思っている。地域のためとか、誰かのためという気持
ちは慈善になってしまうので持たないようにしている。自分に意思がない状態でやり続け
ることはあまり意味が無いし、どこかでだめになる。地域でやり続けるためには、自分がや
りたいことを最初に考えてそこを地域に掛け合わせないといけないという。

また、上手くいっている人は「地域貢献5割」という感じだという。協力隊で来る際、地
域のためと思うのは大事なことだが、思いすぎるが故に自分が何をしたかったのかとい
うことで悩んでしまうことがよくある。そのため、まずは自分がどうしたいのかというこ
とや、自分は何でこういうことをしているのかという確認が大切なので、自分の思いもぶれず
にやっていきたいと教えてくれた。

○地域の活性化について

Nさんは、「活性化」という言葉は個人的には変だと思っているという。活性化には地域
が賑わうというイメージがあるけれど、地方の限界集落は活性化よりは沈静化した方が良
いと思うからである。活性化させるといずれ終わりが見えてくるので、今のこの西会津がベ
ストな状態であって、今あるものを残して、ある一定の西会津は残すといった沈静化がで
きれば理想だという。

また、今の日本は人の少ない場所に移住して人口を分散させようということが流行っ
ているが、適正人口やどれぐらいの地域活性化活動ができれば理想かということを考えてい
けると良いのではないかと、地域の中にはそっとしてほしいという人がいることもある
かもしれないのではないかと。そして、そんな中で大切なのは、次世代と今いる人たち
の間でどこがベストな理想なのかを考えた先の沈静化するポイントを考えることではない
かという。個人的には今の奥川の状態が理想なのではないかと思っているという。

また、もし定住人口が増えて自治体への税金が増えたとしても、交付金のような住民に直
接還元されるものがあるわけではない。地元で生まれ育ったから地元で暮らしたい、不便は
あるけれど自給自足はできるから問題ないという人もいる。

○西会津での子供の話

地域の子供に関しては、比較する対象がないと、田舎に対してのイメージが何もなく、面白くないというだけになって都市に行くという選択になるので、比較する対象を作ることが大切だという。そのため都市的なものが西会津に入ってくるのはとても良いと思うとのことだった。また N さんが現在関わっている教育の分野でいうと、地方の一番の課題は選択肢がかなり少な過ぎること、教育機会が圧倒的に少ないことだという。塾に行くにしても会津若松までは行かないといけない。

他には、子供に求められる色々なモノが多すぎるという。本来であれば、いろいろな人たちがいるからこういう職業もある、こういうものもあるということが出歩けば分かるが、田舎にはそれがないと教えてくれた。現在、西会津中学校には 100 名弱、小学校は約 200 名の児童がいる。そのうち、卒業生が 30 名くらいいるとして、毎年 3~4 人くらいの生徒は私立に通わせたりする。そこにはやっぱり外をみて視野を広げてほしいということがあるのではないかと N さんは考えている。

最近のコロナ禍によってオンライン化が進んだことによって、助かる部分もあり、最近では武蔵野大学のアントレプレナーシップ学科と、西会津のアントレプレナーシップ教育をしている子達をオンラインでつなぐことで、東京の学生にメンターとして関わってもらうことを考えているという。また、「都市部でしか得られない教育機会は自分たちでオンラインにより取り入れ、田舎でしか得ることができないような自然環境などは田舎に越すことで取り入れるような、ハイスペックな家族がこれから増えるのではないか」とのことだった。

○子育ての場としての田舎

小中学校は先生が子供達の面倒は見るので、それ以外の時間は山の自然もあるし、自分たちで思い思いに教育を考えて行きましょうという形になるのではないかとのことだった。

田舎の小さな世界しか知らないままで突如大学に行き世界が広がっても、4 年間はあっという間に過ぎてしまう。西会津は学歴社会があるのかどうかもよく分からない状態であるが、都市部にいながら西会津のような場所に二拠点的に関わって教えて行くのか、西会津に住みながら都市部の方にも行かせて学歴社会を教えていくのかというどちらかのことをしなければ、子供は広い世界を知らないままに大学まで進学してしまうので、子供が不幸になってしまうのではないかと N さんは考えているという。最近、デュアルスクールという一年間だけ都市部の学校に通わせて残りは自分の地元で通うという動きがあり、田舎では都市部ではできないような、「出る杭をそのまま伸ばしてあげるような教育」ができれば良いのではないかとのことだった。

○郵便局について

郵便局は田舎にとっては大きい存在だという。埼玉や東京に比べて銀行がないので、金融

機関としての役割が大きいという。ただ、地域の人のたまり場になるかどうかということに関しては疑問があるので、住民へのヒアリングを今後やってみて考えた方が良くないかという。田舎で郵便局が核になるには、商店やカフェの併設が必要になるのではないかとのことだった。

○調査学生のコメント

地域の子供、教育についての話がとても印象に残った。自分自身も子供が少ない田舎の生まれなので、田舎の中で学歴社会についての関心があまりないこと、あまり様々な進路に関心をもつきっかけが少ないこと、色々とやらなければいけないことが多すぎることなど共感する部分が数多くあった。その中で N さんが新たな田舎の地域での教育を模索していた部分が今までの自分の中にはないものだったので、他の地域でもそのような新しい田舎での教育の事例があるのかどうか気になった。

また、郵便局については、例えば、郵便局でもっと観光についての情報を発信するなどといった新しい郵便局としてのサービスをすることができないかということを考えて行く中で、郵便局がコミュニティの中心である必要性など、今までにはない視点からの意見を得ることができたので良かった。また、自分自身が他に地元の郵便局の方のお話も聞いた上で、郵便局員の方と地域おこし協力隊の方が互いにどのような活動をしているのか具体的には知らないように感じた。せっかく西会津町には地域おこし協力隊の方々が多いので、その二者間での対話もすると面白いのではないかと感じた。

⑤地域おこし協力隊員 O さん

○プロフィール

O さんは 20 歳代で二本松市の出身。地域おこし協力隊としては 3 年目であり、2022 年 3 月末で任期満了となる。中町集落にできた集落支援拠点施設「結」の管理人としてそこに住んでいる。地域おこし協力隊の仕事としては、奥川地区の集落支援が主な仕事である。仕事の基本は事務所でのワーク作業になるが、その他にも安否確認も含めた集落の見回りや、大学生の受け入れのようなサポート事業等も行っている。協力隊の任務の 1 つとして人足体験ツアーの運営があったが、本年はコロナウイルスの影響で断念したとそうである。任期満了後のキャリアとしてはまだ決めかねているそうだが、個人事業主などの形で西会津に住み続けていきたいと述べていた。西会津の協力隊の年齢層は 20 代から 50 代まで幅広いが、20 代が多いそうである。

○協力隊になったきっかけ

協力隊員になったきっかけについて伺った。Oさんは福島大学の岩崎ゼミの卒業生であり、元々公務員志望であった。大学卒業後は宮城県の民間企業の営業職に就職したが、毎日の移動に時間を取られる日々には疲弊し、福島大学OBOGの集まりの際に会った岩崎先生の助言もあり、西会津に行くことを決意した。

西会津に移住する前は、大学在学時に西会津町と交流があったという。交流の始まりとしては、西会津町でゲストハウスを運営する佐々木祐子さんに「農都交流」というイベントに誘われてかかわりを持つようになったのがきっかけだと述べていた。また、在学時には卒論合宿と称して西会津に泊まり込みで訪れていたという。こうした体験の中で、西会津の人々の受け入れてくれる雰囲気が好きになり、将来またこの地域に戻ってきたいと漠然と思っていたという。また、そもそも実家も二本松市の農村地帯であったため、西会津はある程度馴染みやすい場所であったという。

○西会津に住んでいて思うこと

西会津に住んでいて思うことについてはメリットとデメリットを述べていただいた。メリットとしては集落の人々との交流が楽しいことや、土地自体に様々な魅力があることを挙げていた。反対にデメリットとしては西会津ならではの豪雪が大変な点であると述べていた。

○集落拠点施設『結』について

Oさんが管理人として住んでいる「結」という集落支援拠点施設について伺った。この集落支援拠点施設ができたのは、Oさんが地域おこし協力隊の任期1年目の11月頃であったという。そして、当時その場所の管理人がいなかったため、Oさんが任期2年目の4月から居住する形で管理人となった。「結」の収容人数は一回最大15人ほどで、多い月でひと月20人ほどが利用していたが、コロナ禍に入ってから利用がほぼなくなったという。

○協力隊になって思うこと

協力隊員になって思うことについて伺った。Oさんが当初抱いていた協力隊のイメージは、地域の人々との交流を持って地域のために様々な活動を行い、協力隊員同士も協力して地域全体で地域活性化を行うものであった。しかし、西会津の協力隊は様々な分野で分かれており、協力隊員の連携がバラバラであるように感じるそうである。また、住んでいる地域ごとで協力隊が固まっている印象を持っていると述べていた。集落支援活動はオールマイティであるが、それゆえ町民の方々は協力隊がどのような活動をしているのかイメージがしにくいと述べていた。また、町議会の方々も地域おこし協力隊が行っている活動に関して熟知している感じでもないという。そのため、情報発信を回覧板から広報誌発行に変更して、認知拡大を図ったという。

他には地域おこし協力隊着任1年目の頃は覚えることが多く、自分のしたい活動等に手が回らなかったと述べていた。自分が活動しやすくするためには、地域や集落の人々に認知してもらうことや協力者を増やすことが大事だという。また、最大任期を終える3年目以降のキャリアビジョンを考えながら活動することも重要であるという。任期3年目の隊員には、定住のために使う時間として週に1日業務時間を自分の時間として使うことができるそうである。この時間を利用してOさんは将来的にフードロス関係事業を行えるように、勉強を行っているという。

他の協力隊の任期満了後の進退については、Oさんが知る限りでは3年勤め上げた人は5人中4人が西会津に残っているという。また、任期途中でやめた人は4人中2人が西会津に残っているという。残っている人は結婚や事業を始めたことなど様々な理由であるが、最近ではお店を始める人が増えたように感じると述べていた。

○地域おこし協力隊のやりがいについて

地域おこし協力隊のやりがいについて伺った。地域おこし協力隊はあくまでも地域に入るための手段であると考えており、地域に入り自分の手で地域活性化を行えることが一番のやりがいであると述べていた。

○地域おこし協力隊の課題について

地域おこし協力隊の課題として挙げたのはモチベーションの管理である。活動を行っても行っていないでも固定収入があるため、一人一人のモチベーションの大きさや向いている方向が異なりがちである。また、隊員ごとに扱う分野が違うためうまく連携できないという。そのため、組織としてのまとまりが欲しいと述べていた。Oさん自身は協力隊になったことでよりモチベーションは向上したそうである。この理由としては、以前から知る人物が職場に多く、任期1年目の大変な時期でもやりやすい職場関係ができていたことを挙げている。

○地域の将来について

地域の将来について伺った。これに関しては、住民のやる気や主体性が関係してくるのではないかと述べていた。具体的には地域の人々が主体性を持って大学生等の外部と交流を図ることでこれからも地域が続いていく可能性はあるのではないかとのことである。しかし、集落の将来性に関しては高齢化もあり、どうしようもない部分が存在するのも事実だという。そのため、地域の愛着を尊重しつつも、いわゆる「集落の看取り」を考えていく必要もあると述べていた。

また、西会津の5地区の知識の偏りに関しても心配しているようであった。どの地区においてもその土地について詳しい人物がいる。しかし、その知識はそれぞれの地区同士で十分に共有されていない。そのため、Oさん自身も、協力隊として赴任当初は自分が担当して

いる奥川地区以外の土地については詳しく知らなかったそうである。そして、協力隊の仕事を行ううえでは、地区全体のことを知らないと難しい部分もある。また、土地について詳しい人がいても、その人がいなくなってしまう可能性もあるため、知識は永続的ではない。そのため、そうした個人や土地に関する知識を引き継ぐことや共有することが重要であると述べていた。

○地域住民との交流について

地域住民との交流について伺った。基本的には、運転や歩いているときに住民の方と会ったらしゃべる程度には付き合いがあるという。また、こうした挨拶から発展してお茶会に参加することもあるそうである。他にも野菜をもらうなど、地域住民と交流する機会は比較的多いという。

○移住者に向けた支援について

移住者に向けた支援について伺った。まず、居住に関しては、Oさんの場合だと移住前に西会津町の方から指定された住居に住むことになった。そして、引っ越し費用としては7～8万円の補助金が出る。

仕事については働き口が少ないのが現状である。Oさん自身の考えでは、相談できる場所があると良いと述べていた。移住する人の多くは「何かをやりたい！」と考えている人が多い。しかし、実際に移住した際に現実とのギャップを感じてしまうことがあるため、そのような人のためにも、悩みを打ち明けられるよりどころとなる場所が必要ではないかと述べていた。また、役場職員の方は地域の制度などに精通しているため、そのような人々と仲良くなる機会があると良いのではないかと述べていた。

○地域のお宝について

将来守っていききたいような地域の「お宝」について伺った。西会津町の「お宝」はモノではないものだと述べていた。具体的にはこの土地で生きた人々の歴史や証、そしてこの土地自体が「お宝」ではないかと述べていた。集落全体の歴史ではなく、住民一人一人に焦点を当てたお話などを後世に伝えることが大事なのではないかとのことである。なぜなら、こうすることで住民の想いを鮮明に反映できるからである。

○西会津町がこれからも活性化するために必要なことについて

西会津町がこれからも活性化するために必要なことについて伺った。活性化するための活動をするにも地域おこし協力隊では限りがあるため、今後は大学生を含め様々な主体が活性化事業に関わる未来になっていくことができれば、より活性化が進むのではないかと述べていた。

○今後の夢や目指すものについて

今後の夢や目指すものについて伺った。今後の目標としては自分の事業で稼いだお金で生活することと述べていた。そのためにも、集落や地域の人々をどうやって巻き込んでいくかが課題であると述べていた。また、人々を巻き込むためにも、自分の人脈を広げていくことも課題だそうである。

○学生との域学連携について

学生との域学連携について伺った。課題として挙げたのは、学生を受け入れる場所が限定的であることである。また、学生の行う域学連携事業には、学生の卒業という期限がある。そのため、長期的な連携事業を行うためにも、しっかりとした学生同士の連携事業の引継ぎが重要であると述べていた。また、学びという形で地域に入るとどうしても堅苦しくなってしまうため、一度遊び感覚で地域に入ることが学生にとっても良い体験になるのではないかと述べていた。

○郵便局のイメージについて

郵便局のイメージについて伺った。Oさん自身は、お金を下すときや書類を出す際に郵便局を利用するそうである。中町集落では、お金を下せるのが農協か郵便局となる。そのため、これらの施設が無くなった場合、交通手段を持たない人は野沢地区に行くしかなくなってしまう。従って、日常生活を続けるうえで郵便局は大事な施設であると述べていた。

他には、郵便局に学生が関わることで、話題性が生まれ、郵便局に新たな地域おこしの可能性を広げることができるのではないかと述べていた。例えば、奥川郵便局に協力隊員のKさんの絵画を飾った際に、近隣から郵便局を訪れる人が増えた例があるという。

○地域のコミュニティ拠点としての郵便局に対して期待すること

最後に地域のコミュニティ拠点としての郵便局に対して期待することについて伺った。まず、郵便局への入りやすさや行きやすさがあるとよいのではないかと述べていた。特に西会津町の中では、郵便局員も顔見知りであることが多い。そのため、郵便局員が情報発信することで、多くの人々に情報が届きやすく、また、顔見知りの人物からの情報のため信頼しやすい。このような、情報発信の場としての可能性は大いにあるのではないかと述べていた。また、郵便局が学生の地域連携事業の場として関わるのは目新しいため、学生にとっても良い経験を得る場になるのではないかと述べていた。

○調査学生のコメント

Oさんへインタビューをしてみて、郵便局などの施設はなくなってしまうと、交通手段がない人は野沢地区に行くしかないということから、地域の人にとって重要な施設になってくると感じた。また、地域のみまもり活動などは、地域の中で、郵便局との協力なども考

えられるのではないかと感じた。地域に関することでは、地域の人が暮らしてきた声がお宝であるとおっしゃっていたので、昨年（2020）行ったような聞き書きを行って、暮らしを残していくことが重要になってくるのではないのかと感じた。

また、学生間の引継ぎという面では、先輩と後輩の連携を密にしてどんな活動をしてきたのか、どんな関わり方をしてきたのかを、その地域に関することも含めて伝えていくことが重要になってくると感じた。

地域おこし協力隊が3年目ということで、西会津町を見る視点がほかの1年目の方々と比べて厚いと感じた。また、3年後を見据えて活動する難しさも感じた。分野によって課題と感じる点が異なることも知った。特に集落支援ということもあり、域学連携の大切さを説いてくださった。学生には卒業という期限があり、人も学年で変わってしまうことについて、私たちがゼミ活動でどう引き継ぐかを考える必要があると改めて実感した。

○さんとは岩崎ゼミとして前任の地域おこし協力隊員の方から引き継がれたところからの付き合いで、これまでもお世話になってきた。着任3年目を迎え、地域おこし協力隊としての活動を終えるにあたり、自身が西会津にかかわりを続けていくのか、地域を大切にされていくのかがよく伝わってきた。地域おこし協力隊の中で各隊員の温度差を感じているというお話は、多くの協力隊を抱える西会津町だからこそ発生する問題であり、隊員それぞれのミッションによっても何にたいして熱意を注げるか変わってくるため、全員が同じ方向を向くことは確かに難しいと思う。その多様性を生かした地域づくりの可能性を考えていきたい。

⑥地域おこし協力隊員 Pさん

○プロフィール

Pさんは20代で、現在協力隊1年目である。出身は宮城県仙台市である。学生時代には美術系の大学でアニメーションを専門に学んでいた。2021年5月に西会津町の地域おこし協力隊として着任した。本当は新卒として4月に着任したかったそうだが、同期となる方と同じタイミングで着任しなくてはならなかったため、1か月遅れてしまった。現在は協力隊ケーブルテレビ職として西会津町ケーブルテレビに配属されている。

○業務内容について

普段の業務としては、西会津町ケーブルテレビの取材・編集などの仕事のほか、町の公式Facebook「なじよな町西会津」の運営も行っている。取材は土日も多く、その場合には平日に振替休日を取得している。Facebookについては、週に2本記事を投稿するというノルマや、年内にビジネスページの「いいね」数を2000件達成するというミッションもあり、配

属する前に言われていたケーブルテレビの業務に加えて、「情報発信」も主な業務内容の一つとなっている。

業務時間のうち、ケーブルテレビでの仕事と地域おこし協力隊としての活動との線引きが大変だそうだ。ケーブルテレビ職員の方々に、自分が地域おこし協力隊として、どのような活動のためにどこに何をしに行くのか、そのため何日の何時からケーブルテレビの仕事ができなくなるのかを分かってもらえるように説明するのも難しいのだという。

○西会津町での暮らしの魅力と課題

Pさんが思う西会津町の魅力は、「風通しの良いところ」である。人を受け入れる体制ができており、拠点のひとつとして使う選択肢になれる町である。また、西会津国際芸術村があることもあり、奈良美智さんなどの多くのアーティストが滞在することもあり、人との出会いも面白いのだそうだ。さらに、西会津で暮らしていると、地域住民の方から野菜をいただく機会が多いのだそう。副業として猟師や農家をされている方も多く、その産品をいただく機会も多い。このような西会津独自のコミュニケーションに触れることで、初めての体験をたくさんしているそうだ。

また、Pさんが考える西会津町の地域のお宝としては、次の2つを挙げていた。1つは田園風景である。家の近くの田んぼとSLの姿がお気に入りだそうだ。もう1つは民俗芸能や祭りの類である。Pさん自身、ダンスもやっているため思うところがあり、今はコロナでできていないがいずれはやりたいと考えている。比較的都会である仙台市から移住してきたPさんにとっては、西会津町に暮らす人々にとって生活のなかで当たり前になっていることでも、新鮮で面白く感じるようである。

反対に、西会津の課題は、イベントや企画への地域住民の参加率の悪さだという。もちろん告知不足のせいということもあるが、地域おこし協力隊や外部から来たアーティストの方々などがやっていることと実際に地域に暮らしている人たちが結びついておらず、乖離を感じている。作品づくりの段階から地域の方と関わりを持たなければ来てもらえないのだそう。地域おこし協力隊などの移住者が、どのような企画をしようとしているのかを地域住民に理解してもらい、一緒に携わってもらったり関わりを持ってもらったりすることが重要になるとのことだ。

○協力隊員になったきっかけと実際に活動をしてみて

Pさんが協力隊員になったきっかけは、「仕事を自分でつくって生きていきたい」と考えていたことである。都会と比べて資源・物資が少ない西会津のような田舎の地域で、何か課題を見つけ、それを解決するために活動に取り組む、というプロセスがPさんのやりたいことに近かったという。

実際に活動をしてきたなかでは、協力隊員として、学生時代に携わっていた映像制作ができることや、自分の制作物をほめてもらえることが嬉しいという。また、ケーブルテレビと

いう場所も、出会いのきっかけを作ってくれたりシェルターとなったりしてくれる大切な自分のよりどころになったそうだ。移住者にとって、Pさんにとってのケーブルテレビのような心のよりどころを作るとは、地域に打ち解けるために大切なことであり、それをサポートしてくれる人材もまた必要なのではないだろうか。Pさん自身も移住支援関係の委員をやっており、助けてほしい人と手伝う人とのマッチングがしたいため、そのような人材や仕組みが欲しいそうだ。

○協力隊員として大変なこと

協力隊員として大変なことは、まず仕事の内容を説明する先が多いことだそう。ケーブルテレビ職員の方々や役場の職員方に、今自分がどのような仕事をしていて、これからどのようなことをしたい状態で何をやっているのかを適宜説明する必要がある。(前述のケーブルテレビと地域おこし協力隊の)仕事の時間配分も大変である。地域おこし協力隊は、既卒や社会人経験者を前提としているような制度であり、そこに新卒で入ったため、着任したばかりのころは覚えることでいっぱいだった。そういった人たちへの支援はして欲しいという。

また、実際に協力隊員として活動していくなかで、自分の時間が思ったよりもとれていないことにギャップも感じているそう。Pさんの場合は、フルタイムで会社員と同じような勤務体制になることが多く、自分の個人的な活動や協力隊としての活動にもう少し時間を使いたいようだ。

さらには、隊員としての任期が終わる3年先を考えると、3年で何を成すか、何を得るかを考えなくてはならない。3年で何か武器を身に付けなければ、放り出されるかたちで職探しになってしまう可能性があり、それについては「残酷だ」とも思うそうだ。しかし、Pさん自身は3年というひとつの区切り、ゴールがあることで、次の目標を定めやすいとも考えている。Pさんの目標は、映像制作者として西会津町内にアトリエを持つことだそう。また、専門で映像を学びたい気持ちも強く、協力隊の任期後には大学院への進学も考えている。作品性の強いものをつくり、それを生業にする作家になりたいのだという。

○西会津町の将来

地域の将来については、定期的に西会津を訪れる関係人口を増やしていかななくてはならないと考えている。定住人口は増やそうとしてもやはりどうしても減ってしまう。そこで、西会津ならではの風通しの良さを生かして、コミュニティに簡単に入っていけるイベントや気軽に滞在できる場所などを刷新することで、関係人口の創出をしていく必要がある。

また、Pさん自身も、作家として映像を作り続け、作家としてのバリューを高めて作品で地域外の人目を引くことで貢献したいそうだ。今はまだ、地域住民の目とPさんが地域おこし協力隊としてやっていることとの乖離を感じている段階であるという。

さらに、地域の祭りの復活や文化の継承を通して、地域にもっと「にぎわい」が欲しいそ

うだ。これらは地域住民が直接関わった方がよりディープなイベントになり、そこでやる意味が生まれる。そして、移住者と地域住民と一緒に復活させていくことで、より「にぎわい」を創出できるのではないかと考えている。

○郵便局に対するイメージ

Pさんの郵便局に対するイメージは、週に一度利用するゆうちょ銀行のATMと、協力隊員のKさんが隣の空きスペースで個展をやっていたことくらいの印象である。遅くまでATMが稼働しているのは助かるそうだ。西会津で暮らす方は、ヤマト運輸を利用するためには会津坂下町まで行かないといけないため、郵便局の手続きがもっと簡単になったりしたら利用されやすくなるかもしれないと感じている。

また、郵便局の地域コミュニティの場としての側面については、人の集まるイベントを行うことで、住民の目と地域おこし協力隊などが行っている活動との乖離の解決につながることを期待していた。

○地域住民との関わり

普段は、地区の方とは、すれ違ったら挨拶をしたり、イベントがあったときにそこで関わったことのある方とお話をしたりする程度だそう。地区のイベントとしては、「早乙女踊り」や人足に参加したことがある。この「早乙女踊り」とは、西会津に伝わる郷土芸能の一つで、昔の田植スタイルをした女性が踊るというものである。

○域学連携について

現代では、世の中の情報・イベント・コンテンツに飽和（供給過多）が見られるが、そのなかで、学生との域学連携を図ることは、西会津やそのような地域について知ることやつながりを得るきっかけとなり得るため、とても良いと考えている。

○調査学生のコメント

Pさんの言う「住民の目と地域おこし協力隊などが行っている活動との乖離」が生まれてしまっている要因として、地域おこし協力隊などがどのような活動を行っているのかを地域住民があまり認知していないということがあるのではないかと感じた。そして、この乖離をなくすために、地域住民と地域おこし協力隊などの移住者が集まり、コミュニケーションをとる拠点として、誰もが訪れたことのある郵便局を利用することは有効かもしれない。しかし、郵便局には用事があるときにしか行かない人もいるため、郵便局に集まってもらうためのアクションを起こす必要があると考えられる。

また、Pさんは、ケーブルテレビや協力隊の活動、イベントへの参加以外ではあまり地域住民と深く関わることはないようだが、田舎に慣れていない移住者の目線で考えると、それを寂しいと思う人もいれば、そのくらいの距離感が丁度よいという人もいるのではないか

と感じた。

域学連携については、私は地域への影響という面でしか考えたことがなかったが、Pさんが考えているような学生側への良い影響が広く知られることで、域学連携の取り組みがより推進されるようになるのではないかと感じた。

⑦地域おこし協力隊員 Qさん

○プロフィール

Qさんは、20歳代で宮城県出身。西会津町出ヶ原地区を中心に漉かれていたが途絶えてしまった出ヶ原和紙の再生のために2021年の5月から地域おこし協力隊として活動している。西会津に来る前は東京で暮らしていた。

○西会津に来たきっかけ

Qさんはまちづくりや和紙づくりなどの芸術の技術に興味があって移住を決め、大学卒業と同時に西会津に移住した。美術系の大学に通っていて、自分が作った紙で絵を描きたいと思っていた。なぜなら、Qさんは職人さんが作った手すき和紙を使っていたが、それに絵を描こうと思ったときに、「その和紙がきれい過ぎて、できあがっているように見えた」からである。「その和紙はもう作品だから、これに手を加えるのは嫌だと思い、自分で作ろうと思った」という。自分で作った和紙だったら、絵を描く前の和紙の価値が落ちることはないのではと考えた。そして卒業制作の時に西会津で和紙を作っている人がいることを知り、福島県が行っているクリエイター育成インターンに参加し、2020年10月に10日間ほど西会津を訪れたことがきっかけであるという。

○現在の活動

現在Qさんは、公民館で出ヶ原和紙講座を開いている。受講者は出ヶ原の住民がほとんど。出ヶ原和紙は、昭和30年代頃に一度途絶えたという歴史があり、それを再度なくさないためにと活動を始めている。元気な若者が和紙を作っている状態ではなく、お年寄りが多いという。

また、美術家として版画も製作していて、東京での個展や国際芸術村でグループ展示を開いたこともある。版画の講座も開いていて、今の季節（11月）だと年賀状を作る講座を開いて、版画を通して和紙について興味を持ってもらえたら、和紙を使うきっかけをつくれたらよいと考えている。

出ヶ原和紙はもともと会津藩の御用紙として使われるほど有名であったが、水害で和紙

の材料となる楮の葉が流されたため、途絶えてしまった。しかし、その葉は野生化して今も道に生えていて、運転していても道路からわかるという。その楮の葉を取る許可をもらい、刈り取って和紙を漉いている。出ヶ原和紙は途中で途絶えたものもあるが、江戸時代から続いている制作方法、制作技術で、機械を使わずに全て手作業で行っている。大変な作業のため和紙づくりをしている人も少ないという面もあるとのことである。

○協力隊員になって感じたこと

Qさんが地域おこし協力隊として出ヶ原和紙を作っていく中で、自分の制作に和紙を生かすという、自分がやりたかったことを、仕事としてできているということがやりがいと述べていた。

また西会津の人たちは、Qさんが言い出せないこと、やろうと思ってもなかなか行動できないことを、地域住民のほうから聞いてくれたり、相談にのってくれたりするなど、率先して自分たちで動いてくれる人が多いという。Qさんから進んで行動を起こすよりも住民が意欲的に行動してくれることが多いのだと述べる。

他方でそれは一部の人が協力してくれているだけで、住民の熱量には差があり、関わりのある人が一生懸命頑張ってくれている。Qさんは西会津に来る前、和紙づくりは町全体で行われていると思っていたが、実際には、和紙づくりのために最初に入った和紙職人の元協力隊員である方と公民館の数名のみで動いていることを知ったという。

○西会津での生活について

Qさんは今まで東京に住んでいて雪を経験してこなかったため、雪道の中の運転や水道管など、雪国での暮らしに不安がある。買い物についてはネットスーパーも利用でき、必要なものもスーパーまで車で行けるので、不便には感じていないという。

地域の人たちとのつながりは、野菜や料理をQさんの家に届けてくれるほど。この間はおこわをいただいたという。

人足は、年に3、4回地域の人と側溝の掃除をするという。何キロ分もの長さの側溝を掃除し、しかも朝6時に集合して活動するので大変だと述べていた。

○地域おこし協力隊の任期後について

和紙づくりの再生はQさんの前任の協力隊員の方から始まった活動で、2人で活動しているのでたくさん作ることはできないし、高い価格で販売するためたくさん売れるわけでもなく、まだビジネスにはなっていないという厳しい状況である。そのため地域おこし協力隊として活動が終わる3年後に支援が途切れてしまうと、Qさんが西会津に残る方法が難しい。前任の方も現在無職の状態で、その姿も見ているため不安だという。西会津は奥まった地域のため、生活が不便な上に仕事もしなければどうしても残って定住することができないという問題がある。他の協力隊員も西会津に残らずに他の地域に移ることが多いと不安

を感じている。

○将来について

Qさんは和紙や和紙の材料を守っていきたいと強く述べた。お年寄りが多いため、聞いた話を記録しておかないとどんどんなくなってしまう。その人たちが暮らした記憶を伝える人がいなくなるのはすごく寂しいという。

Qさんは出ヶ原和紙の今後について、和紙づくりを体験やワークショップという形で観光資源としてどうにかできないかと考えている。今は1回のワークショップについて、何度も打ち合わせをしてやっと実行するという状況。3年後までに少しでもお金になれば、と思っている。

和紙づくりは材料の加工から全て手作業で行い、2人で作っているので数枚作るのに何日もかかるという。和紙を使う人口は多くなく、高い和紙を買う人もほとんどいないので、年に何枚かしか売れないということでは何にもならない。今は生産力が全然ない状態だという。

和紙自体の販売ではなく、一緒に和紙を作って持ち帰ってもらうという形でお金が取れないか。工程や作り方を覚えてもらって記憶に残してほしい。そして自分で使うのではなく贈り物として使ってもらえたらいいな、とQさんは述べる。

日本には意外と和紙があり、その中で出ヶ原の和紙を選んでもらうのは厳しい。そのため本当は、海外に向けて出ヶ原和紙を発信できたらいいと思うという。また、和紙を使った絵を描くためにアーティストが作りに来て広めてくれればいいなと思っている。それを通して交流人口を生み出したいと述べる。

Qさんは自分が作ったもので人の気持ちを動かして、印象に残せばいいなと思っている。和紙を使った名刺でも、一枚の紙が相手にインパクトや緊張感などを与えて心を動かす力がある。

Qさんは、「自分が漉いた和紙よりも、昔から作っている町の人が漉いた和紙のほうがありがたさが違うと思う」という。本当は体験なども町の人にやってほしい。昔和紙を漉いていた現在95歳のおばあちゃんが50年ぶりに和紙を漉いている姿が、すごくカッコいい。作り方も覚えているし、ちゃんと漉けていて、力が必要な工程もとても力強い。このような姿を外の人に見せられたらきっと他の人も元気になるのではと述べる。Qさんからの直接の提案には応えてくれなかったが、町の人に協力してもらって、その交渉のおかげで実現したとき、そのおばあちゃんはとても楽しそうだったという。西会津以外にもこのような人は他にもいると思う。そのため、昔はあったが今はやっていない和紙の再生を通して、柳津や会津と協力しながらその土地の記憶を残していければ、と希望を述べた。

○学生との交流について

若い人が積極的に町に入り、講座に参加したり話を聞いたりすることで、住民が自分たち

が作っている和紙に誇りを持てるようになる。そして若い人が和紙を覚えて伝えてほしい。

○郵便局の活用について

母に西会津の米を送るためにけっこうな頻度で郵便局を利用しているが、住所を書くのがすごく面倒くさい。書かずに送れたらと思う。ヤマト運輸、ゆうパックなど、スマートフォンのアプリに送付状をあらかじめ登録しておけば簡単にできるが、「自分もわからないシステムならお年寄りもわからないのでは、スマホも持っていないし」と述べた。また、雪の中で運転するのが大変なので「買い物サポートがあるといい」という。

○調査学生のコメント

出ヶ原和紙の再生のために活動しているQさんが、地域おこし協力隊の任期が終了した後の自分の今後や出ヶ原和紙について不安を抱えているということを知った。新しい活動を始め、継続させ、その地域に根付かせるためには確かに3年で成し遂げるのはかなり難しいと思った。3年後の支援がなくなったときにそれまでの活動をどのように維持していくのか、自分の分野を生業として生活していけるのかなど、多くの不安や課題に向き合いながら活動するのは大変だと思う。また地域おこし協力隊がいなくなっても地域住民だけで続けられるような体制と活動の住民のポジティブな意識を形成する必要があり、地域が自立して活動できるようにしなければならないと思った。

⑧地域おこし協力隊員 Rさん

○プロフィール

地域おこし協力隊1年目で年齢は49歳。2021年8月末までは会社員として働いていたが奮起して9月1日から地域おこし協力隊としての活動を開始。出身は東京であるが会津若松に両親が住んでいた縁や狩猟関係の協力隊の募集でたまたま見つかったことから、西会津の地域おこし協力隊に就任した。

地域おこし協力隊としての活動分野は鳥獣対策でイノシシやサル、クマなどの被害対策を担当している。応募のきっかけとしては、元々の職場でSBI大学院大学というビジネススクールに所属していた際に、同じグループの中で有害鳥獣に関与するビジネスというのがテーマとして提示され興味を持ったのがはじまりである。福井県での活動があると知り軽い気持ちで銃と狩猟の免許を取得した。地域の狩猟会と行動をしていく中で、深刻な被害や少子高齢化により今後ますますひどくなるであろう狩猟の課題を理屈ではなく本能的に感じ取り、今後のことを考えて取り組みを探していたところ、地域おこし協力隊の有害鳥獣対策に出会う。

全くのゼロベースから始めるよりも行政をはじめとした様々なパイプを得られ、かついくらか給与も出るというメリットに注目し、サラリーマンから一念発起して地域おこし協力隊の募集に応募したという。

○地域活性化に対する考え

Rさんは地域活性化のゴールは地方交付金の割合を減らすことであると述べた。地域おこしを通して関係人口が増加することはお金を地域に落としてもらうことに繋がる。外部から情報を持って来た人が地域リソースを外に向けて売り出すことでお金が流動し、生活基盤が向上していき関係人口の増加や半定住、定住への移行が進む一方で、その分税収が増え地方交付金の負担割合が減る。中央からの補助に頼らずとも成立するような環境づくりをしていくことこそが地域活性化であると言う。

○協力隊になって思うこと

・ やりがい

元々協力隊での鳥獣対策活動をビジネスへと展開したいという打算的な目標を掲げて始めたものの、協力隊の活動の中でコネクションづくりなど得られる部分もあり、活動を通して集落などを回りながら話を聞いていく中で、最初の動機付けであった本能的な有害鳥獣被害に対する危機感などの裏付けをすることができ、今後鳥獣対策をビジネスとして展開していくことへの自分なりの根拠を得られたとのことである。

・ 課題

問題点としてはまず協力隊の報酬やミッションの話が挙がった。Rさん自身は元々民間企業で働いており、予算や自らの収益の創出が無い限りは事業の維持は難しいわけで、協力隊は任期が切れたらその先の保障が無い。事業費に対して助成金が出たとしてそれはその期間の活動に対する一時金でしかない為、普通に金融機関から融資を受けた方が将来的な投資をして貰える。専門職としての確立や委託事業として民間へ委託するなど、安心して3年の任期の中で見極められるような内容を協力隊の募集に練りこむ必要があるという。

詳しいミッションの内容が一切無かったというのも問題としてあるようだ。自身である程度の情報は調べてきてから入ってきたものの、何も知らない人が入ってきて活動するのは厳しいものがある。ボランティアを目的に来る人ばかりではなく生業にするために来る人もいるので、地域おこし協力隊の募集を受けてくる人に対して事前のビジョンの提示が不足しているという。

地域おこし協力隊の活動内容に対しての報酬が割に合っていない人もいるらしい。逆にいえば、その金額で果たして求めるスペックの人がやって来るのかという問題であるという。

○活動におけるスタンス

自身の最終的な目標として有害鳥獣対策のビジネス展開を考えていたように、Rさんは商業面に高い関心を持ちながら活動している。例えば他の協力隊の方が和紙の販売について厳しい状況にあると話すと、海外に向けた取り組みを提案し、外国の方を自身のコネクションを活用して紹介していた。単なる市場としてだけではなく、一度体験したモノをリピートしようとする手間や面倒なプロセスを楽しもうとする傾向にあると、外国の方と和紙作り体験との相性の良さに言及している。

また、ビジネスライクな思考に基づいて活動をしている様子も窺え、住民とのやり取りの中で個人的な不満はあれど活動とは切り離し、効率的に作業を進められるようにリサーチをし、協力隊の制度に対する問題点等の活動をしていく上で納得できない部分を突き詰めていくという一歩引いた視点を持っている。

○地域の人との付き合い

有害鳥獣から守るべき耕作地の把握など地域の人とのやり取りをしており、罨一つをかけるにしてもどの山にどんな風にと色々な人の問題が絡んでくるといふ。お年寄りが多い中で、自分の伝えたことや自分についての情報を覚えておいてもらうことが難しいと感じている。

狩猟会の方々は山をよく知っている。中には外部から来た協力隊に対して偏ったイメージを持つ人もいれば、逆にその立場を理解して接してきてくれる人もおり、失礼のないようにコミュニケーションを取りながら活動に必要な有益な情報を得ている。個人の狩場ではなく町全体の課題としての狩場という意識があり、狩猟会の協力なしでは鳥獣対策は難しいらしく、円滑な活動のために狩猟会とのコミュニケーションやリスペクトは必要なものであるという。

○地域の宝物

ケーブルテレビのインタビューで、95歳のおばあちゃんが泣きながら和紙作りの復活を喜んでいたので見て、それがどれだけ当地人たちにとって大切なものなのかを知った。今後定年が伸び、老後得られるお金が少なくなっていく中で、活動の原動力となるのは心に当たる部分であり、地域住民の魂を揺さぶるような取り組みはこれからも尊重されていくべきという。

○学生との域学連携に関連して(地域おこし協力隊について)

新卒で協力隊として地域に飛び込むのはどうなのかという問いに対して、若いうちにいろんなことに積極的に挑戦するという意味ではいいかも知れないが、外部に対して市場を求めるものであれば、一度外のことを知ることから始めた方がいいという。あくまで求める市場がどちらにあるのか、内側にあるのであれば内部で完結、成長させたいうえで外を知り範

圏をどんどん広げていくように、外側にあるのであれば外を知ったうえで範囲を絞っていくようになるのがいいのだと経験をもとに話していた。

そのうえで本当に地域に貢献したいというのであれば、外の世界を知ることから始めた方がよいとのこと。地域内だけでは比較しづらいことがあったとしてその中に留まるのではなく、正しいかどうかを見極めるためにも外に出るべきだという。

○地域コミュニティにおける郵便局

Rさん自身、ビジネススクールでの卒業テーマとして離島の活性化を扱っており、その中の一つのモデルとして簡易郵便局の有効活用について調査していたことがある。自身は日常的に郵便局を利用はするものの、ものを送るとき利用する程度らしい。

何かしら併設している郵便局があれば地元の人たちがもっと利用するのではないかという。中山間地域はキャッシュレスではなくキャッシュの世界である為、お金を持ってくる、もしくは下した人たちがそのまま落とせるような仕組みがあれば郵便局も助かるのではないかという。要は副業で収益を上げることで郵便局としての機能の維持を目指すという方向性を提示された。

○学生のコメント

Rさんは、地域おこし協力隊という枠組み以前に、地域で起きていることや自分がすべきこと、したいことに対してかなり考えて来ている人なのだと感じられた。それまでの自身の役職や生活を投げうってまで協力隊の募集に応募するようなどころがある一方で、行き当たりばったりというわけではなく、活動の計画にしる、協力隊のシステムやお金の問題にしる、とても一年目とは思えないほど多くの事柄に対して真摯に向き合っている。情熱や奉仕の精神だけでは成り立たない現実の地域おこし協力隊の一面を知ることができた。

第3節 郵便局員への聞き取り調査結果

以下では、郵便局員4名への聞き取り調査結果を、インフォーマントごとに紹介し、聞き取りを行った学生のコメント（感想や気づき等）を記載する。

①郵便局員 Sさん

○プロフィール

Sさんは30歳代で、祖父の代から奥川に住んでいる。奥川郵便局には2019年11月に赴任してきた。前職の方が退職することになって、普通は4月の所をイレギュラーな形で赴任されたという。以前は三島町の郵便局に勤めていた。

○奥川地域に住んでいて感じること

Sさんは10年くらい前にも奥川郵便局に勤めていたが、そのときに比べると人がだいぶ減ったように感じるという。また、65歳を過ぎると国民年金があり、お年寄りの人が農協さんと郵便局で自分の年金を下ろしに来るときは、金融機関に取っては繁忙期になるのだが、そのお年寄りの数は、以前務めていたときに比べたら、やっぱり減ったなど感じるという。

○若者が減っているなど感じるかどうか

Sさんは奥川小学校（現みらい交流館）が母校になるが、そのときは同級生が4人くらいしかいなかったという。その後もそのくらいの人数が続いており、最終的には学年一人になったとのことだった。また、町の郵便局にいたときはお母さん達が学資保険に加入したりもしたが、そのようなことも無くなったという。

○住民とのコミュニケーションで意識していることはありますか

方言があるので、なるべく似たような言葉使いをするようにした方が良い。また、この地域の人はみんな農家の人たちなので、共通の話題として田んぼの話をすることなどがコミュニケーションになるとのことだった。局長も奥川の人なので、お客さんによってはお茶を飲んで帰ろうという人もいるが、今のコロナ禍のご時世だと難しいこともあるとのことだった。また、今の時期（10月）だと米を送る人や、年金の支給でお客さんは訪れるとのことだった。また、ツーリングのお客さんも来ることがあり、風景印を目当てに来る人もいるとのことだった。

○風景印を集めているお客さんについて

色々な郵便局を回ってくる人もいて、御朱印帳のように集めている人もいるし、はがきを買っていく人もいる。少しだけ預金して行って通帳に記帳していく人もいる。新潟や喜多方や山形から来る人もいるとのことだった。年間では10人ほど来ているらしい。ただ、最近ではコロナがあって来ていないとのことだった。

○冬場に雪が降ったときは郵便局に来る人はいるのか

冬でも自分の作った野菜を送りたい人がやって来るとのことだった。特に奥川だとおじいちゃん、おばあちゃんが多いので、孫へのお年玉用に下ろしていく人や、年賀状のサービスを利用していく人もいるとのことだった。

○郵便局でのやりがいについて

郵便局に入ったのは、今の郵便局長さんに誘ってもらえたことがきっかけだという。貯金が満期になって下ろしに来たお客さんが、「車を買えるなー」とか言っているのを見たり、お年寄りの人たちと話せたりとか、お米を運ぶことを手伝ったりすることなどでやりがいを感じるという。やはり田舎の郵便局だと「何でも屋」みたいなところがあり、田舎だと不便なところがあるが、そのような面で助けになったり、単に話し相手になるだけでも助けになっていると思うとのことだった。

○郵便局自体が持つ強み

一番大きいのは社員がたくさんいることで、全国に40万人くらいいて、それだけ人がいることは強みになっており、難しい業務があってもすぐに確認できる点だという。また、最近では女性の社員さんが入社したことで自分の業務に余裕ができたこともあり、そのときは地域のみまもりも行っていると教えていただいた。

○みまもりで得た情報の共有について

郵便局内では共有するが、よっぽど介護の状態が必要な情報とかは町役場支所と共有したりするものの、それ以上だと情報漏洩になってしまうから、あらかじめ町と協定を結んでおく必要があり、そこが今後の課題とのことだった。

○どのような役割を郵便局は担っていけるのか

高齢化で今後外に出て行けなくなることも出てくるため、郵便配達してもらう人にみまもりをしてもらうことや、住民の人たちとコミュニケーションをとっていくことが集落支局員の役割として挙げられた。

また、人が減ること自体は郵便局ではどうしようもないので、集落支援員の岩橋さん達がやっているような地域活動に協力をできるのであればしていきたいということや、例えば今は局内のスペースが余まっているので、そこを活用して、何かをできたら良いと考えてい

るということを教えてください。

○郵便局と地域社会の新たな連携、取り組みについて

奥川郵便局にあるスペースを貸し出して何かできそうならば、販売活動などもできたら良いかなと感じるとのことだった。また、情報発信に関しては、窓口を使って何かしらの情報をお客さんに発信していくこともできるということ、出荷支援は奥川の郵便局や郵便配達を担当している野沢の郵便局の活動になるが、お客さんから荷物を預かって郵便局で梱包して出すような活動になるということ、また、お客さんがオンラインのお店を持っていて、それが売れたら郵便局で発送するという方法もある。奥川に住んでいる人たちがオンラインショップを作るのは難しいけど、そういうことをできる体制をもっておくことも大切なのではないかと感じるという。

どうしても郵便局の人間は郵便局の考え方しかできないため、他の会社の人や大学生の意見もほしいとのことだった。大学生との活動については、なにかしらつながって話を聞ける場所がほしいということや、春以降にすぐに大学生と活動をするができる場所を作っていくことが大切だと考えているとのことだった。

○地域の人との交流について

みらい交流館で交流会等を開いたりするが、全ての地区の人が集まるのは難しいので、奥川の郵便局を使えるとよいと思う。奥川は広くて集落同士が離れているから、集落同士で集まれる拠点が欲しいとのことだった。また、奥川の人の移動手段についてはバスが一日に2本あり、あとはデマンドバスやラクタータを使用しているとのことだった。

○郵便局のリソースのキャパを超えないためには

2021年10月より郵便局のサービスレベルが変化し、土曜日に配達をしなくなった。今まではほぼ翌日配達で、福島県内、茨城、栃木、東京23区位までは翌日配達にしていたが、そのサービスで使っていたリソースを別の分野に割けるようにはなったとのことだった。

また、郡山東郵便局などでは、深夜勤務があり、夜の間は配達物を振り分けていくことがあったが、郵便物の物流が減っているので、段々荷物の方に労力を割こうという話になっていて、そこが今DXの活用などで始まっているとのことだった。そして、そういう流れで、自分たちの仕事も次第に変わっていくと思うが、ただ、業務の変化のわかりやすさとしては、やっぱり町の大きな所の方が多いと感じるとのことだった。

○郵便局同士の情報のやりとりについて

各郵便局は地域ごとの部会に所属していて、奥川を併せて13局が所属しており、ここに野沢や三島町も入っている。一番遠い所だと昭和村も入っていて、この部会の中で情報の町内の共有をしているという。また、これより大きい範囲だと、連絡会があり、西部地区連絡

会に部会が 7 つあって、それが西会津のあたりでは一番大きな集まりで、会津地方の郵便局の集まりだという。

部会会議みたいなものがある、部会としての取り組みについて決定することがあり、連絡会と部会は福島県の他の地域にもいろいろと存在している。

ゆうちょの担当、保険の担当、その他の担当などでリーダーが決まっており、頻りに法改正があるため、その人達を通じてメールで共有したりすることが横のつながりとしてあるという。また、コロナの前だと、対面での業務研修もあった。

他の郵便局との連携を行っていろいろな活動を行うことができるかという質問に対しては、例えば、もしお客さんが育てている野菜などを他の店舗で販売したいときには、奥川郵便局と、近くにある笹川郵便局にタブレットを置いて、二つの郵便局で出品しているものの情報を共有し、その情報を頼りに他の地域の野菜を買ったりすることができたら良いとのことだった。

○郵便局でのデジタル化の支援について

以前タブレット教室を開いたらしい。そのときに、地域の人たちは教えてもらった結構使うと言っていたという。多分、今まで使ってなかったから活用できていないということであって、もしかしたら、使う場面をこっちで提供できれば地域の人でも使うようになる。それでも難しい時は、こちらで支援することになると思うとのことだった。

○調査学生のコメント

郵便局員の方とお話させていただくことは初めてだったが、自分が想定していたよりも奥川郵便局として多くの活動をすることが可能であるということが分かった。また、自分はずっと田舎に住んでいたの気づかなかったが、田舎の郵便局には田舎の郵便局ならではの良さが有り、その良さを奥川郵便局はもっているなと思った。他にも郵便局自体に関しても、その仕組みや歴史、現在行っている活動について今まで知らなかったことが分かり、貴重な情報をいただくことができた。特に、デジタル化という面で、地域にとって郵便局は価値のある機関になる可能性を秘めているのではないだろうかと感じた。

② (元) 郵便局員 Tさん

○プロフィール

Tさんは 60 歳代で元奥川郵便局長である。4 人家族で、西会津町山口に住んでいる。定年後は、自分たちで食べるほどの畑と田んぼを営んでいる。

○郵便局の利用と西会津町・奥川地区について

郵便局には自家用車で訪れ、月に2、3回利用しているという。

奥川地区は、人柄がよくて協力的な人が多く、自然が豊かでのどかな住みやすい地域だが、病院が遠く、車が無いと不便だと心配していた。また、年を取ると動くのが大変で、まちおこしについては地元の住民がついていけていないと不安そうに述べていたが、集落支援員の岩橋義平さんのように頑張ってくれている人がいるのはとても心強いと述べた。

奥川地区、西会津をよりよくするためには、まずは交流人口と定住人口を増やすことが必要だという。移住推進に関しては町として体制は取っているという。また郵便局で真新しいイベントや魅力的な策を展開、企画して若い人にも参加してほしいと期待を述べていた。郵便局の外にあるステージを利用したイベント、一人暮らしの高齢者のみまもり訪問、むらの保健室などにも、取り組んでいけたらいいという。それらを通して住民との関わりをもつ場にできたらいいと述べた。大学生の活動については、ボランティア活動が盛り上がるので、季節ごとに来てもらい、山菜採りや田植え、雪かきなどをしてもらえるといいなと笑っていた。

○奥川郵便局について

Tさんが最初に勤めたのは福島中央郵便局で、郵便物の整理で夜中まで働き、4日に1回は郵便局に泊まり作業をするという忙しさであったという。

奥川郵便局は都市部の郵便局よりも住民との交流が多く、用事がなくともふらっと高齢者が来たり郵便局内でお茶のみをしたりするという。Tさんは、郵便局は人と人との交流や心と心をつなぐ、暖かみのある場所だと述べた。そんな奥川郵便局は、地域の中でも存在感が大きく、地域の拠点となっているため、住民同士のつながりを意識していたという。そして辺鄙な場所の郵便局だからこそできることがあるのではないかと奥川郵便局の強みを述べた。昔から局長の意向で、郵便局で待ち時間がある人にはお茶を出し、また、コロナ禍でマスクをし忘れた人にはマスクを渡しているという。

自身が局長の時も、Tさんは、利用しやすく親しみやすい機関であるように、住民のお話を聞いたり、家庭などのプライベートな内容のものでも相談にのったりして、限りはあるけれどもお客さんの要望に応えることを心がけていたという。このように用事なく郵便局に来る人はたくさんいたが、現在は10年前よりも郵便局に来る人が減ったという。それは、亡くなった人が多いこと、コロナウイルスの影響でATMを使う人が多くなったためだと考えている。

Tさんは交流人口を増やす必要があると述べ、外部の人がとりあえず来てみようと思ってもらえるように、新しいイベントを開いたり、町をあげた取り組みをしたりするべきだという。郵便局単独で活動することは難しいが、奥川地区の70歳前後の人たちは熱い思いを持ち、積極的な姿勢なのできっと参加してくれると考えている。

○調査学生のコメント

郵便局での仕事を、人と人とのつながりや交流、心と心をつなぐあたたかいものと捉えていて、郵便局が親しみやすい施設になるように心がけていたことが印象的だった。郵便局利用者と何気ない会話をしたりプライベートな相談を受けたり、利用者の待ち時間にお茶を出したりと、このような住民に寄り添った郵便局の姿勢が、住民にとって親しみやすく居心地のいい空間へとつながっているのだと感じた。

③郵便局員 Uさん

○プロフィール

弥五島郵便局員。福島県西部地区のエリアマネージャー。

○Uさんの役職について

東北には25の連絡会があり、地区統括局長が25人いる。Uさんは統括局長の仕事をサポートする仕事をしており、福島県西部地区のエリアマネージャーである。

対お客さまの仕事ではなく、郵便局の社員や局長の仕事をサポートする仕事である。研修や会議などの事前準備や、社員の頑張りに対してそれを情報誌にして配信を行い、こんなふうに施策してますよとか、頑張ってますよっていう情報を伝える社員の『ほめ活』に取り組んでいる。内容としては郵便局員の方の資格取得や、そのための勉強の紹介や賞状を使っての推奨などを行なっている。

社員の喜ぶ笑顔や作成した情報誌に載った写真に対し、「皆さん笑顔でよかったね」と言ってもらえることが、自身のモチベーションになる。笑顔で撮ることなどを意識して社員のやる気につながったり、コミュニティが広がるきっかけになったりすることを期待している。

○郵便局の空きスペースについて

郵便局の空きスペースはどこにでも必ずあるわけではなく、配達業務がなくなった場合にできることがある。猪苗代や喜多方では、一般の方に会議や打ち合わせ、休憩の場所として貸し出ししている。また、子供の絵や習字の作品を飾り、お年寄りの方が見に来るということもある。その場合、郵便局としてはセキュリティをしっかりと行う必要がある。

○地域との連携

特産品など地域の商品をタイアップしつつ、郵便局の商品を使っていただきながらPRしていくことを行っている。例として喜多方のレンジ麺、秋田のきりたんぼ鍋セット、薄造りジャーキーなどがある。また地域の乾杯条例などにならった地域に溶け込みながらの歓迎

会、情報交換会を行なっていることもあるという。さらに包括連携協定として道路の損傷を報告する、徘徊している高齢者の方がいたら報告するなど、そういった取り組みを一括して行政と協定を結んでいる。これを行うには社員だけでなく局長の役割も大きいという。

空きスペースの活用も含めた活動については、新しいことを行うことも重要であるが、それらの継続を考えることも重要であると語っていた。

○郵便局同士の連携、部会の連携について

ポータルサイトやUさんが作成する情報誌で情報を得ることができる。

東北では、25の地区統括局長が仙台に集まって会議する地区統括局長会議があり、それを落とし込むかたちで、10~15の郵便局が集まった部会、連絡会がある。上から下におろすパターンや下から吸い上げをして横展開を行うパターン等様々である。コンプライアンスなど絶対にやらないといけないことはあるが、お客様感謝デーなど地域ごとに配る景品を変えたり、施策を変えたりするなど、地域ごとに柔軟に対応し、それぞれの特色を生かした活動を共有している。

各事業のリーダーを集めて会議をやったり研修をやったりして、横のつながりをつくるツールにもなっている。福島県西部地区においても四半期に1回行っている。

○奥川郵便局の特色

社員さんが若い。若い社員は近隣の高齢のお客さまや局員から、かわいがられているという感じを受ける。年配のお客さまに溶け込もうとして、今まで得た知識をフル活用しながらお客さまにサービスしていると感じる。局長さんも地域に根ざして、お客さま、企業や役場など、そういったところにも入り込んでいって郵便局をPRしている。

社員を育てる、会社を大きくする上で、局長さんの役割は大きいと思っている。

○郵便局の人手不足について

局長1人で配達、窓口を見ている郵便局は負担が大きい。そういった意見を集約する会議の開催や、時間短縮のためのマニュアルの作成といった面で局長が楽になるようなサポートをUさん自身が行っている。

○郵便局のデジタル対応や業務の特徴について

郵便局もタブレットが1局1台以上配備されていて、各種研修もコロナ関係もあって、タブレットで受講したりするケースが多くなっているが、勤務時間の関係や、お客さまがいると中断したりするため、今は大変である。新しいシステムに戸惑っている部分はある。個人情報取り扱いについても利便性と安全性の間をとる必要がある。

組織が大きいため休暇など制度が充実しているが、一方で文書主義のためスピード感が減少するという場合もある。また、職種によっては、打ち合わせの時間を調整して地域の食

事を楽しむなど地域とのかかわりをつくれるという面もある。

○郵便局と大学生の連携について

郵便局に就職してほしい。物流においても e コマースのような年配の人が比較的苦手な部分で、若い方が柔軟な発想とかで器用にやってもらえると良い。

○調査学生のコメント

今回のお話をお聞きして、郵便局内でのつながりや地域との連携可能性を感じた。地域の郵便局においては、その地域にあわせた取り組みや連携が行なわれているが、それらが行なわれるにはその郵便局の局長が地域に溶け込んでいることが大切なのではないかと感じた。そのため、局長や郵便局がどのようなことをしているかなどの情報交換・共有を郵便局同士のネットワークでつないでいくことが、地域と郵便局をつなぐきっかけになるのではないかと感じた。

④郵便局員 Vさん

○プロフィール

昨年まで下郷町の旭田郵便局に郵便局長として勤めていた V さんにお話を伺った。V さんは 60 歳代で、南会津郡下郷町に住んでいる。東京の郵便局に 24 歳で入り、その後 30 歳で下郷町の旭田郵便局の郵便局長になったので、郵便局に勤めて 42 年、郵便局長になって 36 年間になるとのことだった。

○住民の方と関わっていく時に意識していたことについて

30 歳で郵便局長になってしまい、ほとんどが V さんよりも年上の人であって、また小学生の頃から知っているような人たちだったので、住民の人たちとの関わりについての意識というよりも、そもそもとして地元に戻ってきたというような感覚だったという。

○業務内容以外での住民との関わり

かつては、春や秋にお祭りがあって、自宅に親戚や知り合いを招くのが慣わしだった。そのときに、郵便局長として呼ばれることがあったという。他には、集落の総会や老人会、村の運動会、小学校の入学式、卒業式、文化祭があり、そこには行くのが当たり前だった。郵便局にいるよりもその時間は長かったとのことだった。

○郵便局に勤めていて大変だったこと

金融から物流までどんな小さなものまで取り扱うのが郵便局だが、特に民営化になってから顧客情報などの色々な情報がマニュアル一冊くらいになっており、これが当たり前なことになっているという。また、外国郵便も取り扱っているので、国ごとにルールが違ったりする。このときに、田舎のおじいちゃん、おばあちゃんは外国語で書いたりとかもできないので、郵便局側で直したりもしないといけない。もし、それが間違っていたりすると届かないという場合もある。そのようなこともあるので、やっぱりそこは神経を使っていけないといけないとのことだった。

○郵便局の民営化について

国営の頃は郵政省として貯金も保険も同じ屋根の下でやっていたが、民営化になって分業化した。現在郵便局で行っているゆうちょ銀行の仕事などは委託されて行っている。民営化により、こちら側で仕事を新しく作るなどができなくなったので、働く人のなかでは、意思決定というものが複雑になったのではないかとのことだった。

○地域活性化につながる、郵便局に期待されている役割について

IT やデジタル化は国も進めており、これからもどんどん進められていくだろうが、仕組みが分からない世代も出てくる。そんな中でVさんが考えるデジタル化というのは、「デジタル化に対応できない人のためのデジタル化」だという。例えば、会津若松市はスマート IT ということで会津大学とも協力して有名だが、実際に活用している人というのは10何万人のうちの1万人にも満たないほどであり、デジタル化が進んでも全ての人が活用できていく訳ではなく、特に過疎地ではそれが顕著になっているという。

そのときに、Vさんは、そういった政策を進める場合に聞ける場所というのが郵便局の役割だと考える。それこそデジタル化が進んで、役場の仕事が効率化されていって人が少なくなっていった時に、金融や物流だけでなく、住民の疑問に応えられる場所というのが郵便局だと思うとのことだった。

また、それに関連して、デジタル化が進んでいくなかでの地域の人とのコミュニケーションについてはどう思うかという質問に対しては、会話ということが100%なくなる時代は無いと思うが、そのためには話す場がないといけない。そういったものがコミュニティとして残っていくと思うし、Vさんはそのコミュニティのステーションが郵便局であり、そしてそこには、信頼があって利便性があるのだと思うと教えてくださった。

○郵便局の持つ強みについて

全国2万4千もの店舗があり、効率化で減らすことは簡単だが、全国の地域で減らすことは不可能だと思うとのことだった。また、コンビニも同じくらいの店舗数はあるけれど、コンビニは全国に張り巡らされているとは言えず、都会でも田舎でも全く同じサービスを受けられるというところはなかなか無いので、「どこでも同じサービスを提供することがで

きるのはやはり強み」とのことだった。

○他の地域との連携について

Vさんは、「これからの商品は全国で違っていい」と考えている。日本郵便としても、地方創生の新たな分野ができて5年になるが、現在総務省や経産省の地方創生企画に日本郵便も一緒に入って取り組んでいて、年間3カ所くらいで、モデルをつくっており、その中で高齢者の買い物サービス、みまもりやスマートスピーカーを使った介護ができないか試行錯誤されているという。

例えば、2020年に東松島市では空き家情報がリアルタイムで把握しきれなくなってきた中で、郵便の配達をしながら確認してもらい、昨日までと何か変化がないか役場に報告をするという仕組みを作り、その空き家を新たに模様替えして外の人に売るという活動をしており、各自治体と各郵便局が新たな取り組みを行っているとのことだった。

また、浪江町あたりでやっていたこととしては、日産自動車と協力して無人の自動車を役場や郵便局からスーパーマーケットまで自由に乗り降りができるような取り組みを日本郵便も行っているとのことだった。郵便車を利用して、ゆうパックがないときは住民の人を乗せるというサービスを、現在一つのアイデアとしてやっているが、貨物用の車に人を乗せてはいけない法律があり、そのような法律に関しても一つ一つクリアしながら行っているとのことだった。

○みまもりサービスを行うようになったきっかけについて

郵便局が民営化されたことで、新しい業務をすることができるようになったことがきっかけだという。みまもりは過疎地の問題だが、みまもりをしてほしい人は都会にいる。都会にいる人たちが田舎のおばあちゃん、おじいちゃんを心配している。それを郵便局で月に一回か2回回ってもらってみまもりをできないかという話になったという。また、今までは役場の職員さん達が確認していたが、人数の減少などでそれが難しくなったこともきっかけの一つとのことだった。

○これからの郵便局と行政との関わり

Vさんは、自治体だけで全ての事務をまかなうということは難しくなっていると感じるという。長野県泰阜村から、郵便局の方で行政サービスの方もやってくれという願いがあったものの、役場の仕事というのは、一つ一つが監督官庁の方から許可をもらわないとできないので、郵便局が行政のサービスをできるようになるまでに5年かかったという。現在ようやく法律が緩和され、全ての業務を郵便局に委託するということが全国5、6カ所で行えるようになってきたというのが現状とのことだった。Vさんによれば、「住民の皆さんから言えば、野沢の町役場に行くよりは、近くの郵便局でサービスを受けられた方が楽なのは」とのことだった。

○調査学生のコメント

Vさんのお話によって、今の郵便局全体がどんな取り組みを行っているのかということ、どんな郵便局を目指しているのかということ、自分たちが調べても分からないであろう範囲まで知ることができたので良かった。Vさんから色々な考えや事例を教えていただいたおかげで、例えば、Mさんとのインタビューのときに出た郵便局をこれからどのように活用して行くことができるのかということについて、さらに踏み込んで考えることができるようになったと感じた。IT・デジタル社会での郵便局でのあり方についても知ることができたと思う。

第4章 まとめと提言

第1節 郵便局利用者への聞き取り調査まとめ

本章では、以上の聞き取り調査結果に基づき、まとめと提言を行う。まず、郵便局利用者（地域住民）から見た地域課題とその解決策を整理した（図表4）。

図表4 郵便局利用者（地域住民）から見た地域課題と解決策

| 課題 | 解決策 |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・車がないと不便 →出かけるのが大変、近くに病院がない →移動販売もあるがレパトリーに限界がある ・高齢化 →集落の共同作業や行事が維持できない →雪かきが大変 →祭りに参加できない地区の増加 →農業の後継者がいない ・獣害被害 ・人口減少 →少子化、人口流出 →移住者が来ない →子どもたちや若い世代が西会津に戻ってこない ・新しいことを始めようとする、できる人材が少ない ・空き家が多い ・住民同士の交流不足 →コロナの影響 →年を重ねるにつれ外に出ることがおっくうになっている | <ul style="list-style-type: none"> ・送迎サービス ・高齢者支援 →郵便局員によるみまもり、声かけ支援 →空きスペースで「むらの保健室」 →買い物代行サービスの支援 ・新規就農者と地域の農家がマッチングできる場を設ける ・外部への情報提供、仲介（「関係案内所」） →地域外から若い人材を呼び込むための情報提供 (人足体験などのイベントの周知) →実際に来てくれた人と地域住民を仲介 ⇒関係人口の増加へ →空き家のリノベーション企画を立案、情報提供と利用者希望者の募集を行う ⇒移住者増加へ ・地域住民が趣味として参加できるような講座をひらく →協力隊員や外部講師によるサポート →いずれは住民が主体となって新しい活動が行えるようになることを目指す |

| | |
|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・地域交流の促進 →移住を検討している方向けの説明会を開催 →地域住民に移住者や協力隊の情報を発信 →地域内での出来事を共有 ⇒移住者と地域住民、地域住民同士の交流のための架け橋へ |
|--|--|

地域住民の視点からの地域課題は大きく2つに分けることができる。1つ目は生活インフラの問題である。特に挙げられたのが、車がないと不便という意見である。車が基本的な移動手段でありその他の交通インフラも不十分であるため、車を持っていない・高齢化で運転できない場合は出かけるのが困難であり、集まりへの参加や買い物、通院なども行いづらいという状況にあるという。また、買い物も、移動販売車は利用できるがレパトリーは限りがある、近くに病院がないといった生活に必要なインフラに課題があるという意見があげられた。

2つ目は高齢化と過疎化の進行である。高齢化により、雪かきなどの作業が大変になったり、外に出ることがおっくうになったりすることで、これまでの生活の変化を感じているという。また、高齢化に加えて、移住者の少なさや少子化、若い世代の都市部への人口流出が進み、過疎化が進行しているという。さらにこの高齢化と過疎化が進行したことにより、集落の共同作業や行事に参加する人が減ることで維持ができない、農業の後継者がいない、コロナの影響も加わり、住民同士の交流機会の減少などの課題に発展していると考えられる。

関連して、空き家の増加や新しいことを始めようとする、そして実現できる人材が少ないという課題も挙げられた。他方で、多くの住民の方々は、高齢者だけの暮らしになっても子どもたちに迷惑をかけないように、いつまでも元気に、自立して暮らし続けたいという強い希望をもっていらっしゃった。

この2つの大きな課題に共通している点としては、地域住民の生活やコミュニティの維持に関するものであり、地域住民の方々は、自分たちの生活の持続性に直結する課題を重要視していると考えられる。

これらの課題に対しての郵便局が行える解決策としては大きく3つ考えることができる。

1つめは高齢者支援の拠点となることである。過疎地域では、交通、買い物、病院などの生活インフラが整っていない現状が存在する。そこに対して、住民が利用する機会がある郵

便局が送迎サービスや買い物代行サービスの拠点となることで、住民が利用しやすくなり、生活の利便性の向上につながると考えられる。また、郵便局の空きスペースを利用して、「むらの保健室」などを導入することで、日頃のちょっとした健康管理や保健師との相談活動等も支援することができる。「むらの保健室」活動では、例えば、医大生を招いて大学生との交流活動と健康管理活動を合わせて実施することも可能となるだろう。

既に奥川地区では、集落支援の一環として健康づくり活動やサロン活動が展開しているが、これらの活動に郵便局も連携し、活動の発信等を行う体制が構築されれば、さらに多くの住民に周知されるのではないだろうか。

また、現在取り組まれている郵便局員によるみまもりサービスも、住民の健康把握や遠くに住む家族の安心感につなげることができる取り組みであると高い評価を受けている。この取り組みをさらに発展させる方向として、例えば、協力隊員の渡辺氏が取り組んでいるZOOMを用いた遠隔交流活動をヒントとして考えてみる。コロナ禍により帰省が制限され孫たちにもなかなか会うことができない地域住民のために、従来のみまもりサービスにオンラインを導入して、住民と子ども・孫たちが同時双方向に交流できるようなサービスの提供も可能なのではないだろうか。高齢の地域住民は、パソコンや端末の操作に慣れていない方が多いと思われるが、そこは郵便局員が端末の貸出や操作のサポートを行う。それによりみまもりサービスがリアルタイムな映像として届けられ、顧客の満足度の向上も図れるように思われる。

2つめは住民同士の交流の場となることである。今回の聞き取り調査では、地域のことをよく考えている住民の方と多く出会うことができた。大学生との交流に関心のある方もいたし、また、花見山のようなスポットをつくりたいと花木を植え始めている住民の方もいらっしやう。遠方に自分の作る米のファンがいて毎年送っている米作りの名人の方もいらっしやう。ゲートボールや麻雀などの趣味を楽しんでいる方もいらっしやう。高齢化が進んでいるとはいえ、近所の方とはよくお茶飲みをしたり話をしたりするなど、地域コミュニティはしっかりと住民の暮らしの根幹に息づいていることがわかった。

こうした地域住民の思いや知恵、技術、コミュニティのつながりを再度結び合うために、郵便局に期待されることを考えてみたい。奥川地区ではカタクリ観賞会等集落単位での小さなイベントや、広域の七観音ウォーク、奥川健康マラソン、新そば祭り等の数々のイベントに取り組んできた。こうした取り組みは、地域の歴史や伝統を守るだけでなく、地域内の世代間交流、外部の若者と集落間交流も図ることができる重要なものである。ここ数年は、コロナの影響で外部から多くの人を招いての交流が困難であったが、これらの取り組みを郵便局からも発信することで、コロナ後の再開に向けた気運を高めていくことが必要なのではないだろうか。

例えば、他の地域では、地域づくりのイベントがコロナ禍で一度途絶えてしまうとなかなか再開が難しくなるという話も聞く。そこで、奥川地区でこれまで取り組んできた小さなイベントや人足交流の思い出、楽しかったエピソード、地域のお宝マップ、住民の小さな取り

組み（例えばFさんの花見山づくりのチャレンジやCさんの米作り等）を追う「名人列伝」などを、大学生がニューズレターや壁新聞等にまとめ、それを郵便局の室内に掲載したり、利用者に配布したりするような取り組みを行うことで、アフターコロナの交流再開につながるような取り組みも必要となろう。こうした活動を通して、住民自身や他出子が地域について考えたり、共同で準備を進めたりすることにより、地域住民同士の交流や関係性を深める役割を担うことができる可能性があると考える。

また、現在はコロナ禍で難しいが、コロナ後には、かつて集配作業所だった空きスペースを利用した「一日カフェ」などの交流会を開催することで、地域住民同士の交流の機会となることが期待される。例えば、聞き取り調査でたびたび名前が出てきたカフェ「ひととき」では、大学生がインターンシップとして一日コーヒー店長となり、こだわりのコーヒーでもてなすような取り組みをしている。その出張カフェを郵便局のスペースで行い、同時に大学生との交流などもできるとよいのではないだろうか。もちろん、地域おこし協力隊の方や移住者との交流活動なども可能であろう。

3つめは、地域おこし協力隊・大学生のような外部人材と地域住民をつなぐ機能を果たすことである。外部人材による企画立案や情報発信のサポートを行うことにより、地域と外部とをつなぐ役割を果たすことができると考える。地域おこし協力隊や外部人材を講師として、地域住民への趣味講座などを行うことも、地域住民の交流だけでなく、外部人材との関係をつくるものになる（次節でも後述）。この講座などを通して、地域住民や外部人材との関係が構築され、ゆくゆくは住民たちが主体となり新しい取り組みなどを行うきっかけとなることも期待される。

例えば、空き家や農業継続といった課題に対しては、外部人材と協力し、例えば空き家のリノベーションを企画し情報提供と利用者の募集を行うリノベーション企画、新規就農希望者と地域の農家とのマッチングや食に関するイベント、人足体験ツアーの周知と参加者募集など、地域ならではの行事や地域でのイベントに関する情報発信を行い、地域を訪れた人と地域住民との仲介を行うなどして、双方が自分自身で地域の魅力や面白さを再発見できるような活動に結びつけていくことなどが挙げられる。

加えて、風景印を目当てに奥川郵便局を訪れた観光客等に対しては、ただ風景印をもらったら帰ってしまうのではなく、奥川の魅力マップやニューズレターを同時にお渡しすることで、奥川に関心をもってもらい、少しずつ関係を深めていけるような窓口としての役割も、郵便局には期待される。

このように郵便局のネットワークを活用した情報提供とその仲介を行うことは、関係人口の創出につながる可能性がある。奥川地区にとって、定住人口や移住者増はハードルが高いが、これまで様々な地域との交流により関係を積み重ねてきた奥川地区にとって、関係人口の創出と拡大というテーマに関しては、他地区と比べても一日の長があるといえよう。

こうした関係人口の創出拡大に向けては、これまでのようなありきたりの「観光案内所」ではなく、多様な人々の「縁」をつなぎ、個々人が自ら地域の魅力やおもしろさを発見でき

るように導く「関係案内所」の存在が重要視されている。

郵便局は、明治時代以来の長い歴史をもち、地域の確固たるランドマークであり、地域住民からの信頼も厚い。今回の調査でも利用者の多くは、郵便局に対し、「なくなったら困る場所」「身近な存在」「親切」「気軽に相談できる」「公共機関として安心・信頼できる」と高い評価をしている。このことから、奥川郵便局は、奥川地区の「関係案内所」の一つとしての機能を存分に発揮することが可能であると考えられる。

以上の解決策を実行するにあたって課題も存在する。まず挙げられるのがこれらの取り組みに関して、どこまでを郵便局側が負担できるのかという問題である。取り組みにかかわる費用、人材、業務内容など、どこまでを郵便局が行い、どこまでを地域住民や行政が行うかという確認は必要になってくる。また、その確認ができたとした場合でも、郵便局がその負担を実際に担うことができるかということも問題になってくる。さらに地域住民、外部人材の興味や関心、協力をどのように得ていくかを考えることも課題としてあげることができる。

第2節 地域おこし協力隊への聞き取り調査まとめ

図表5は、地域おこし協力隊員への聞き取りから明らかになった地域課題とその解決策を整理したものである。

図表5 地域おこし協力隊から見た地域課題と解決策

| 地域の課題 | 郵便局ができること |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・住民との人間関係、溝、ズレ ・移住者が相談できる場が少ない ・関係人口の創出 | <ul style="list-style-type: none"> ・空きスペースの活用 ①雑談、相談、談話室をイメージ ②教室や講座の開催（地域おこし協力隊が講師） ③野菜を販売するマルシェやバザーの開催 ④昔の写真や地域の歴史を伝えるような常設展示会を実施 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・外部発信が少ない ・地域活性化に対する住民間の熱量の差がある | <ul style="list-style-type: none"> ・情報発信 ①配達 地域おこし協力隊の情報と空きスペース等で行うイベントの情報発信 ②ケーブルテレビの活用 ③他の郵便局と連携して、奥川のできごと・イベントを知ってもらう |

地域おこし協力隊員の視点からは、主に地域の課題が二点挙げられた。まず、一つ目としては地域のコミュニティに関する課題である。具体的には、外部からの人間が地域のコミュニティ内に入りにくい空気感があったり、交流が少ないことから協力隊と住民間での人間関係の隔たりや溝ができてしまったりすることである。二つ目は外部に対する情報発信に関する課題である。具体的には外部や住民への情報発信が少ないために、移住者の増加が見込めなかったり、地域住民に地域活性化の取り組みが伝わらなかったりすることから生まれる住民間の意識の差である。

まず、上記に挙げた一つ目の問題を解決する案としては、郵便局の空きスペースの活用が挙げられる。具体的には、移住者や住民が自由に使える相談や雑談ができる談話室を設けることや、地域おこし協力隊が主体として行う絵はがき教室やジビエ教室などが考えられる。

特に、西会津町の地域おこし協力隊の人々の多くは様々な分野を担当しているため、多くの種類のイベントを開催できるはずである。芸術系のアーティストの方が多いため、例えば、和紙を使った絵はがき教室を開き、都会で暮らす孫宛にその場で切手を貼って投函したり、都会の子どもや孫に送る米の袋に奥川の絵を描いてオリジナルの米袋を作ったりすることも可能なのではないかと考える。

また、空きスペースを使うイベントに外部講師を招くことで、関係人口を創出できるのではないだろうか。歴史に対して興味を持っている住民が一定数いるため、昔の写真や地域の歴史を学ぶことができる展示会の開催なども有効であると考えられる。さらに、空きスペースや駐車場を活用して、地域住民の野菜を販売するマルシェやバザーなどを開催することで住民も積極的に関わることができるはずである。以上のような空きスペースの有効活用をすることで、住民間の交流や相談所、関係人口を創出できるのではないかと考える。

次に二つ目の問題を解決する案としては、三つ挙げられた。一つ目は、郵便局員が外部人材の取り組みの情報を利用者や配達先の各家庭に届けることである。具体的にはイベントの情報や地域おこし協力隊の行っている活動内容などをまとめた広告を各家庭に配達することで、住民の方々にイベントの有無や地域おこし協力隊の活動内容を認知してもらうという狙いである。二つ目は、ケーブルテレビの活用である。ケーブルテレビは奥川地区の住民がよく視聴しているため、ケーブルテレビでイベントなどの情報を発信することで効率的に住民に情報を認知することができるのではないかと考えた。三つ目は、他の郵便局と連携して情報発信をすることである。具体的には、部会連絡会などを介して郵便局同士の連携を図り、情報を共有することである。そして、共有した情報をお互いの郵便局から発信することで、地域外の人々にイベントなどを認知してもらうことが狙いである。以上のような方法を活用することで多くの住民及び外部の方々へ情報を発信できると考えた。

しかし、上記で挙げた解決策を実行する上で課題が存在する。まずは空きスペースに関する課題である。郵便局に空きスペースは存在するが、空きスペースの大きさに限度があるため、行えるイベントの規模に制限ができてしまう。また、交通の便が悪いことや元々の郵便局利用者が少ないことから、イベントの参加率が低くなってしまう恐れがある。さらに、郵

便局員が配達やケーブルテレビを活用した情報発信を行うにも、労働力や人件費、財源不足等の問題が考えられる。

第3節 提言

ここまで、地域おこし協力隊と住民それぞれの視点から見た地域の課題と、それに対して郵便局ができる解決策を論じてきた。その中で、二つを比較した結果、それぞれの特徴や共通点が見えてきた。

まず、地域の課題に関しては、住民目線の特徴として、地域内部ならではの課題が多いと言える。車がないと不便だったり、集落の活動やイベントに参加できる人が少なくなったりするなど、地域住民の生活やコミュニティの維持に関する課題が多く挙げられ、地域住民は、自分たちの生活に直結している課題を重要視する傾向があると考えられる。次に、地域おこし協力隊目線の特徴としては、内部からだけではわからない、外部から見た課題が多いことが挙げられる。地域コミュニティに入りにくいという悩みや、交流の少なさから生まれる人間関係の溝は、外部の人間だからこそ感じるもので、住民目線だけでは気づくことができなかった課題だと言える。

郵便局ができる解決策としては、住民目線特有のものとして、生活インフラを支える役割を果たすことが挙げられた。その一方で、住民目線と地域おこし協力隊の目線とで共通して挙げられた役割もあった。それは、外部人材と住民をつなげる「架け橋」となることである。郵便局が両者の「架け橋」となることで、地域おこし協力隊の活動をはじめとした地域活性化を推進できる。また、移住者や関係人口の増加を実現でき、それが地域住民の生活の維持にもつながると考えられる。

ただ、様々な取り組みに関して、郵便局側の負担が大きくなってしまふことや、財源や人材の確保に関する懸念はある。実際に、取り組みをしていくのであれば、郵便局側の負担にも十分に配慮し、実現可能性を考えていく必要がある。しかしながら、地域住民からの信頼が厚く、住民にとっての地域の拠点的な役割を果たしている奥川郵便局であれば、きっと、外部人材と住民をつなぐ「架け橋」になることができると、私たちは考えている。そのため、今後も、私たち大学生が西会津に関わり、活動や調査を継続していくことで、奥川郵便局が「架け橋」となる一助となっていきたい。

第5章 調査参加学生の感想

3年生 熊田雄斗

過疎中山間地域における活性化や地域の在り方を探る上で、直接現地の声を聞き自分の目で現状を知るのは必要なことであるもののどうしても感染症が流行している中では厳しかった為、今回の西会津奥川郵便局での聞き取り調査は私たちにとって待望の現地調査であった。

郵便局での職員の方々や来訪客の方々への聞き取りは本当に多くの発見を得られることができた。職員の方々からの聞き取りからは過疎地域における郵便局ならではの特徴や問題点を知り、地域住民へのアンケート調査では郵便局がどのようなカタチで地域に迎え入れられているのか分かり、加えて地域の課題や要求の発見も叶った。これらは書面上のやり取りや画面越しの調査では十分に知り得なかったものである。また、住民にとって郵便局という施設が生活の一部として溶け込んでいる状態を目の当たりにし、他の地域には見られない特徴であった。今回の奥川の郵便局での聞き取り調査は、今後の私たちの活動における大きな基礎となった。

3年生 佐藤紀香

10月19日に岩崎ゼミの現地調査としてお邪魔した奥川地区の郵便局。この日は岩崎ゼミの3年生が郵便局の調査に入らせていただいたわけだが、私にとっても初めて訪れる場所ということもあり、緊張半分地域の方との交流にわくわくする気持ち半分で調査に望んだ。時間帯等もあり、私自身は直接地域の方へのインタビューをすることはできなかったが、後日実際にインタビューを行った人の音声を聞きながら、色々感じたことがある。

まず、住民の方と郵便局員の方々の交流やつながりがあること、そして郵便局員の方の働きぶりを褒めている人が多いことから、素敵なコミュニティが形成されているなど感じた。

郵便局に対する感想や意見はありますか？との質問に「よく荷物運んでくれるんだよ」「みんな真面目で改善するところはない！」と皆さん笑顔でお話しされていることから、郵便局に訪れる人々との”つながり”が垣間見えたと感じた。

郵便局員の方とそこに訪れる人との交流、郵便局に訪れた人同士の交流、やはり交流できる場所があるというのは住民の方にとっても嬉しいものであり、だからこその郵便局はなくてはならない存在であり、暮らしの中で必要とされている存在になっていると調査を通じて感じた。

3年生 高野さくら

奥川に初めて入って大変貴重な経験をさせていただきました。まず、郵便局に対するイメージが変わりました。自分はこれまで、郵便局で局員の方とプライベートな話をしたり、他の住民の方と話したりすることがなかったので、奥川郵便局では局員の方と住民の方が親しそうに話していて新鮮でした。人と人の距離が遠くなっているこの時代に、郵便局が人と人をつなげる存在になりうる可能性を感じました。利用者の方々も用事がなくふらっと郵便局に寄ったり、プライベートな相談をしに来たりすると仰っていて、奥川郵便局は、人と人をつなぐ温かみのある場所で、住民の方々にとって憩いの場所なのだと感じました。そのような奥川郵便局には地域活性化における可能性をまだ秘めていると思います。地域の拠点として郵便局ができること、そして、それに対して大学生はどのようにかかわっていけるのかを考えていく必要があると考えます。大変貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

3年生 玉根駆留

今回の西会津でのフィールドワークは、改めて地域の可能性を感じる事ができたものとなった。まずは地域おこし協力隊の方のお話である。都会から来た若い世代の方が、自分たちが行いたいことと地域の課題や魅力をうまく掛け合わせることで、地域の新たな活力になる可能性があるのではないかと感じた。また、郵便局への調査では郵便局が郵便や窓口としての役割だけではなく、地域のつながりをつくる場としての可能性があることを感じた。お米を送る際に台車を使い郵便局員がサポートするなど、都会ではできない1人1人に対する細かい対応やそれに伴う住民と郵便局員との信頼関係など、地域ならではのつながりができているのではないかと感じた。上述した外からの若い世代の活力と地域ならではの1人1人のつながり、これらを郵便局やその空きスペースなどを活用することでうまく組み合わせることができれば、郵便局や地域、住民、移住者などにとって良い地域の流れというものをつくるきっかけとなるのではないかと感じる事ができた。

3年生 早瀬瑞蘭

今回の西会津奥川FWでは、私は、午前中に地域おこし協力隊のLさん、午後は郵便局の利用者の方に聞き取り調査を行いました。

Lさんのお話のなかでとくに興味深かったことは、地域おこし協力隊の芸術担当としての役割のなかでも、西会津独特の文化や空気に触れることで、自身の創作活動にもさらなる可能性を見出しているということと、集落の子どもと年齢の近い大学生が関わりを持つと子どもたちにとって良い刺激になるのではないかとということです。後者は、例えば、子どもたちと大学生がLさん監修のもと一緒に工作をするなど、何らかのかたちで実現できれば良いなと思いました。

郵便局では、午後は 1 人しか利用者の方にお会いできず、午後の方がお客様が少ないと聞いてはいたものの利用者の少なさに驚きました。お話を伺った方も、3 か月に 1 回お米を送るときくらいしか郵便局には来ないとおっしゃっていたので、集落の方にとって郵便局は、当たり前にある存在だけど交流拠点とまではいかない、というのが現状であるように感じました。そのため、郵便局での用事のついでだけでなく、その目的のために郵便局に来てもらえるような取組みをしていく方が、より効果的であると考えました。

3 年生 平間 未夢

私は、住民の方ではなく、地域おこし協力隊の方のお話を主として伺ったが、そこで 1 番に感じたことは何事も「一長一短」ということだ。田舎は噂が広まりやすく、それが嫌で出て行ってしまう人もいる。しかし、裏を返せば、情報共有がしやすく、口コミが広がりやすいということになる。事業を営む側からすると、これは大きなメリットで、K さんはこれをうまく利用していた。このお話を聞いて、その事柄をネガティブな方向だけから見るのではなく、ポジティブな方向に思考転換することの重要性がわかった。また、都会と比べて、生活費は安く済むかもしれないが、人足などで身の回りのことは自分たちでやらなければならない。これも一長一短の一例だと思う。短所を知っておかなければ mismatch が起き、定住にはつながらないため、田舎の魅力だけではなく、一方で生じる負担なども事前に伝えて行くことが必要だと思った。後日、4 年生が聞き取りをした住民の方のお話を聞いたところ、何か良い案があってもそれを実行できる人間がないことが 1 番の課題だと感じた。そのため、それを実行したり、知見を持った人が地域に来るための受け皿を作ったりすることが、今後の私たちに求められていることなのではないかと考えている。

3 年生 星 拓

今回の郵便局での聞き取り調査の中で私が印象に残ったことは、地方の郵便局ならではの地域の住民の方達とのコミュニケーションです。M さんとお話をさせていただいた中で、地域の人たちともよくコミュニケーションを取っており、近くの地域の見回りをしているときもあるということ、また、時には時計を直してほしいなんてことも言われたことがあるということが印象に残りました。また、佐藤さんとお話をさせていただいた中で、地域の祭りや文化祭に郵便局長が行くことはもう当たり前のことであつたということも印象に残っています。振り返ると、自分の住んでいた地域の郵便局でも、郵便局の方が地域の住民とコミュニケーションを取り、地域の運動会などに参加することが当たり前でした。今回の聞き取り調査でお話を聞いていく中で、改めて、それは決して全ての場所で当たり前のことなのではなく、田舎特有の良さなのだということに気づくことができました。他にも今回の聞き取り調査では、郵便局という組織自体のお話や今後の郵便局の活用の可能性など、今後の

ゼミでの活動を行って行く上で貴重なお話をたくさん聞くことができました。今回は本当にありがとうございました。

3年生 龍 智也

今回のフィールドワークで初めて西会津の奥川地区を訪れた。私が行ったことは主に地域おこし協力隊員への聞き取り調査、郵便局での住民への聞き取り調査、現地調査の三つである。その中で最も興味深かったのは地域おこし協力隊員への聞き取り調査である。協力隊員への聞き取りの中で最も興味深かったことは、協力隊員の行う活動への援助金が一律であることである。様々な分野の協力隊がいる中で、援助金が一律であると比較のお金がかかりやすい分野の協力隊員は行う活動が限られてしまうのではないかと感じた。実際に今回取材した芸術担当の協力隊員のLさんも、お金がかかる分野のため企画ができないこともあると述べていた。また、援助金皆一律であるとモチベーションの維持も難しいのではないかと私は考える。なぜなら、どれだけ精力的に活動に取り組んでも、援助金が変わらず同じであるからである。そのため、私は協力隊員への援助金給付のありかたを変える必要があると考える。今回の調査でこうした課題を発見することができた。この知識を今後のゼミ活動へ生かしていきたいと私は考える。

3年生 渡部さくら

今回の奥川郵便局の調査を通じて、過疎地域で郵便局の果たす役割は大きいことに気づいた。利用者の方の多くが局員の方と事務的な用事以外での会話をし、そこで相談事や、まちの情報共有をしていたことから、コミュニケーションを取れる貴重な場になっていることがわかった。また、余剰スペースの活用方法では、交流する場にしたい、買い物できる場にしたいなど住民の方が抱える不安の解決につながる意見が出された。地域おこし協力隊の方は、郵便局はみんなが利用する場所で信頼感があるため、自分の作品を展示して地域の人に知ってもらいたい、地域のいいものを紹介してほしいと話し、公共の場であることの良さを活かした案が挙げられた。これらのことから郵便局の可能性を感じるとともに、実現できれば地域の人が集う重要な拠点になると感じた。実現するためにはどのような体制が必要なのか考察し、提案できたらと思う。

3年生 若杉紗香

私が今まで体験し、考えていた郵便局とは印象が異なり、住民に寄り添い、温かい対応をしていたことが印象的だった。郵便局内を紹介していただいたときに、利用者が来て、入った瞬間に利用者も郵便局員の方も気さくに挨拶をしていて、気心の知れた間柄であることがわかった。マスクをせずに来た方にはマスクを渡し、お茶を出しているところを間近で見

て、郵便局の住民への対応の仕方がとても丁寧で温かいと感じた。私が利用者の方に奥川郵便局についてお聞きすると、何度も親しみやすく、居心地のいい場所だと答えていて、郵便局側の温かい対応は住民に伝わっていた。また、過疎化によってなくなってしまうのではと心配する声もあり、奥川地区にとって、郵便局は住民の居場所であり、地域を存続させるためのなくてはならない場所であるのだなと強く思った。奥川地区における郵便局の位置、重要性を知り、個々人間だけでなく、地域全体で交流する場となり得るのではないかと思った。今回の調査で得たこと、学んだことを活かし、郵便局が持つ地域活性化における可能性について深く考えていきたい。

4年生 石澤直人

今回、郵便局を利用している方への聞き取り調査を行い、郵便局は地域の中で郵便を出すという役割だけではなく、様々な役割を果たしているのではないかと感じた。

実際にインタビューした方は、郵便局には情報交換などに来ることもあるということや、郵便局が「道しるべ」になっているということをおっしゃっていた。そのため、気軽にお話をする場となり、地域の中の目印となっているのではないかと感じた。

また、協力隊の方への聞き取り調査からは、地区の中でお金を下ろすことができるのが農協か郵便局であるということから、お金を下ろしたりするという面からも、地域の中にある身近に立ち寄ることができる施設として重要な場所なのではないかと感ずる。

地域の中にある郵便局は郵便を出すことやお金を下ろすといったような役割の他にも、情報交換の場などの役割があることから、そこに大学生などが関わりながら活動ができるのではないかと考える。

4年生 佐々木功志

まずは、お忙しい中、このような機会を用意してくださり、ありがとうございました。

郵便局に来るお客様に対しての聞き取りを行う中で、一番感じたのは、お客様は郵便局の事務作業だけではなく、郵便局長さんはじめ、局員の方々の会話やコミュニケーションを楽しみにしている方が多いということです。それだけ、これまで奥川郵便局に来る方々との関係性を少しずつ築いてこられたという背景が伝わってきて、温かい地域だなという印象を受けました。また、それもあり、お客様自身も明るい方が多く、奥川地区やその他の地域なども含め、自分の住んでいる地域に誇りを持っていることが聞き取りからわかり、将来もポジティブなイメージを持って話す方が多く見受けられたように感じました。

これらのことから、奥川地区に住んでいる方々の人柄も、奥川地区の魅力の一つであることが再認識できました。

改めまして、このような機会をくださった郵便局の方々には感謝致します。本当にありがとうございました。

4年生 澤里夏樹

まずは、11月16日に郵便局という場所をわざわざ貸していただき、ありがとうございました。そのおかげで貴重なインタビューができ、今後のゼミ活動の参考になる成果を得ることができました。

個人的には、3人の男性の方に郵便局でインタビューさせていただいたのですが、皆さん初めて会う大学生に快くインタビューを受けて頂いたのが、とても嬉しかったです。一人一人奥川地区の未来のことをしっかり考えていて、若者にもっと奥川について知って欲しいと言っていたのでこれからもゼミ活動で奥川と関係を持ちつつ、ゼミ生以外の若者にも、奥川を知っていただけるようこちらでも努力したいと思います。

また、郵便局長とは遠野の話で盛り上がったのがとても印象に残っています。もし遠野に来た際は、ジンギスカンあんべというジンギスカン屋さんがとても美味しいのでオススメです。

最後に、貴重な時間を提供していただき本当にありがとうございました。

4年生 根本佳季

奥川郵便局を初めて訪問したが、予想よりも利用者が少なかった。その分、利用者や地域の方とのつながりが密で憩いの場所として機能していると感じた。インタビューさせていただいた方は、郵便局を「話をしに来る場所」と考えているように感じ、多目的な役割も果たしている。それは奥川郵便局ならではの魅力であり特長であると考え。私が利用する限りでは、他の郵便局は一般的な対応である。比較すると、奥川郵便局は他地域が多目的施設で担うような交流の場や機会の提供を、郵便局の業務と共に行っていると感じた。他地域で複数施設が担うような役割を、一つの郵便局で完結するような印象である。郵便局に来なければできないことは第二の目的で、一番の目的は人に会いに来ることのように感じている。

一方で、利用者の少なさが継続されることが懸念される。そのため、課題解決に向けて引き続き奥川地区へ行き、ショートスパンで都度ごとに結果を出すことが必要であると考え

4年生 三浦萌乃

先日のフィールドワークでは貴重なお時間を頂きましてありがとうございました。

午前中に行った奥川みらい交流館での聞き取りでは、岩橋さんが、郵便局は元々公務員だったから農協の人と同じような気軽さでは話しにくいと仰っていたのが印象的でした。私たち大学生ぐらいの年代が自ら郵便局に行くようになった時には既に民営化されていたので、住民の方々にはそのように感じている人もいるということを念頭に置いた上で取組を

考える必要があると思いました。

また、郵便局が地域コミュニティの拠点となる可能性はあるかという点に関しては、昔から住んでいる人が多い奥川地区においては難しいのではないかと感じたのが正直なところ
です。前述のように以前は公務員だった、ということもありますが、協力隊の長谷川さんは
コミュニティの拠点において重要なことは"場所"よりも"人"だと話しており、その通りである
と思いましたが。私が話を伺ったのは若い方が中心だったこともありますが、郵便局へはコ
ミュニティの拠点としてより機能の充実を求めていると感じました。しかし、以前行ったと
いう書道や絵画の展示に関しては住民の方々がかなり見に来てくださったということなの
で、まずはそのような取り組みを通してより郵便局を身近に感じてもらうことが必要な
ではないかと思います。

必ず地域にひとつはある郵便局を地域振興に活かさない手はないと思いますが、住民の
方々が郵便局に何を求めているのかよりたくさん意見を伺いたいと感じた聞き取りでし
た。

今回のフィールドワークでは色々な方にお話を伺う事ができ、自分の想像だけでは思い
至らない部分に気付かせていただきました。本当にありがとうございました。

4年生 三塚玄久

11月16日のフィールドワークを通して考えたことは、今回の郵便局さんと福島大学岩
崎ゼミとの連携事業への期待は私が想像していたよりも大きいということでした。直接イ
ンタビューさせていただいた、西会津町地域おこし協力隊のお二人からの意見としても、今
回の郵便局と大学との連携に関して、新たな可能性、また郵便局が地域コミュニティとして
の役割をこれまで以上に受け持ち、人が集まるイベントが行われてくれることへの期待の
声をいただきました。今後連携事業を進めていくうえで、聞き取り調査のデータは資料とし
てまとめてお出しすることになるでしょうから、その時にでもご確認いただければと思
います。

なにぶん、お互いにとってはじめての試みで、手探りの中進んでいく事業ですから、どう
転ぶかに不安はあります。しかし、地域に根差し活動してきた郵政の視点と、岩崎ゼミの知
見、そして大学生の発想の中から何が生まれるか、未知数な部分に心躍る自分もいます。西
会津町の郵便局には、来年度から自身が利用させていただく立場になるという私情もあり
ますし、今後の展開が私としても楽しみです。今後、微力ながらお力になれることがあれば
頑張ってまいりたいと考えています。

(附属資料)

郵便局お客様対面聞き取り調査票

調査日(月 日 曜日)

調査実施：福島大学岩崎ゼミ生

<問1 最初に、あなたご自身のことについて教えてください。>

• 性別

| | |
|------|------|
| 1. 男 | 2. 女 |
|------|------|

• 年齢

| | | | |
|----------|---------|---------|---------|
| 1. 19歳以下 | 2. 20歳代 | 3. 30歳代 | 4. 40歳代 |
| 5. 50歳代 | 6. 60歳代 | 7. 70歳代 | 8. 80歳代 |

• ご職業

| | | | | |
|-------|--------|----------|-----------|--------|
| 1. 農業 | 2. 会社員 | 3. 公務員 | 4. 自営業 | 5. パート |
| 6. 主婦 | 7. 無職 | 8. 生徒・学生 | 9. その他() | |

• ご家族 ()人(自分を含めて)
* (他出者の状況なども)

• お住まい

| |
|-----------------------|
| 1. 奥川地区 |
| 2. 西会津町内の他の地区(地区名:) |
| 3. 福島県内の他の市町村(市町村名:) |
| 4. 福島県外の市町村(市町村名:) |

• (町外在住の方に対し) 今日奥川に来たご用事は何ですか。

| | | |
|-----------|-----------|----------------|
| 1. 仕事で来た | 2. 観光で来た | 3. 家族や知人に会いに来た |
| 4. とおりがかり | 5. その他() | |

• (町外在住の方に対し) 奥川に来てみた印象、感想を教えてください。

| |
|--|
| |
|--|

<奥川地区・西会津町での日常の暮らしについてお伺いします>

問7. (住民の方に) 奥川地区・西会津町のいいところ、好きなところを教えてください。(いくつでも)

- | | | | |
|------------------|-------------|----------|----------|
| 1. 自然・景観 | 2. 人が親切 | 3. 治安がよい | 4. 歴史・文化 |
| 5. 住み慣れていて暮らしやすい | 6. 集落の雰囲気がい | 7. 農業が盛ん | |
| 8. 食べ物がおいしい | 9. その他() | | |
| 10. 好きなところは特にな | | | |

問8. (住民の方に) 地区の方との交流の度合い(頻度)を教えてください。(主なもの1つだけに○)

- | |
|-------------------------|
| 1. よく行き来し、親しく付き合っている |
| 2. 日常生活で困ったときなどに助けあいをする |
| 3. 日常会話をする程度 |
| 4. 挨拶する程度 |
| 5. 付き合いはほとんどない |

問9. (住民の方に) 奥川地区・西会津町での暮らしに心配なこと、不安なことはありますか。(いくつでも)

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 高齢者だけの世帯が増えている | 2. 子どもの数が減っている |
| 3. 近所づきあいが減った | 4. 家の跡取りがい |
| 5. 農業の後継者がい | 6. 若者が集落を離れる |
| 7. 集落の共同作業や行事が維持できない | 8. 耕作放棄地が増えている |
| 9. 空き家が増えている | 10. 通院、買い物等の交通の便 |
| 11. その他() | 12. 特に不安はない |

問10. 奥川地区・西会津町をよりよくなる(元気にする、持続させる)ために、今後どのような取り組みが必要だと思いますか。

- | | | |
|---------------------|--------------------|-------------|
| 1. 移住者の受け入れ | 2. 空き家の活用 | 3. 農産物のアピール |
| 4. 農家民泊や体験活動 | 5. 地区の人々が集まる行事を増やす | |
| 6. 集落の若者が主体となった活動 | 7. 農産物加工や直売活動 | |
| 8. 高齢者や集落の歴史を伝承する活動 | 9. お祭りや伝統行事の復活 | |
| 10. その他() | 11. 特に何か行う必要はない | |

問11. ここのような郵便局の余剰スペースを活用した取り組みや、地域サービスとしてあったらいいなと思う取り組みはありますか。

- | |
|-----------------------|
| 1. 地域住民の健康づくり(むらの保健室) |
| 2. 地域住民の趣味の教室や集う場づくり |
| 3. 一人暮らし高齢者のみまもり支援 |
| 4. お店や宅配などの買い物支援 |
| 5. 道の駅等への農産物の移送・出荷支援 |

- 6. 地域農産物や特産品の販促活動
- 7. 移住希望者・関係人口の情報発信
- 8. 観光情報の発信
- 9. 行政手続き代行サービス（住民票の写しや納税証明書等）
- 10. その他（）

問12. 最後に、郵便局のサービス等に対する感想・要望、また、これからの地域のあり方や大学生の活動に対するご意見・要望などがありましたら、自由にお願ひします。

以上で質問は終わりです。お忙しいところ、ご協力くださりましてありがとうございました。

2021 年度 西会津町奥川地区フィールドワーク 参加学生
(行政政策学類 3 年)

熊田 雄斗・佐藤 紀香・高野 さくら

玉根 駆留・早瀬 瑞蘭・平間 未夢

星 拓・龍 智也・若杉 紗香・渡部 さくら

(行政政策学類 4 年)

石澤 直人・佐々木功志・澤里 夏樹

根本 佳季・三浦 萌乃・三塚 玄久・山田 椋大

指導教員

岩崎由美子 (福島大学行政政策学類教授)

大学生の視点を生かした農山村集落活性化と郵便局との
連携可能性に関する調査報告書

—福島県西会津町奥川地区を事例に—

編集：福島大学岩崎ゼミ

発行日：2022 年 2 月 28 日

連絡先：〒960-1296

福島市金谷川 1 番地

福島大学 行政政策学類

岩崎研究室